
リベラル！

すたんぐれねーど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リベラル！

【Nコード】

N3353P

【作者名】

すたんぐれねーど

【あらすじ】

勇者との戦いの末、敗れた魔王が目を覚ますとそこには自分を倒したはずの勇者の仲間たちがいて、自分のことを『勇者』と呼んでいる。魔王は勇者になってしまい、しかも死んだはずの魔王（自分は生きていて、そのせいで勇者の称号を剥奪されてしまい世界中の嫌われ者になった。元勇者の仲間たちからも見放され、一人ぼつちの魔王は新たな仲間を探しながら、エゴイストな元勇者から魔王の座を奪還するべく旅に出た。（少々後ろ向きな考えで出来ています）

プロローグ（前書き）

初投稿でまだ使い勝手があまりわかりませんが最後までがんばっていきます。

プロローグ

崩れかけた魔王城

その魔王城にある大広間から激しい爆音が止めどなく響く。

豪華なシャンデリアは床に落ちて粉々になりそこらじゅうに砕け散っていた。

壁や床は黒く焦げ、剥がれ、穴が開いている場所もある。

床には無数の屍。

どこを見回しても屍、屍、屍…原形を留めていない、肉片になってしまっているものもある。

先ほどまで共に戦っていたはずの者たちは無残にも床にゴミのように転がっている。

大広間の中央には魔王だけが一人たたずんでいた。身体は傷だらけで、立っているのがやっとといったところだろう。

そこに無数の光の矢が降り注ぐ。

もう自由に動くことの出来ない魔王はすべてを諦めたかのような微笑を浮かべた。

光の矢は魔王の全身を突き刺す。

魔王は膝から崩れ落ち、全身に刺さった光の矢は、光の粒となって空気中に溶けて消えていく。

意識は途絶える寸前。

しかし、それを許すまいとするように、髪を引っ張られ無理矢理に顔を持ち上げさせられる。

「何勝手に死のうとしてんのさ。」

すぐ目の前には勇者の顔があった。

不機嫌そうに眉をひそめ、しかし口元はいやらしく歪み、笑っていた。

「ふん…我が輩もこれで終いか。貴様らごときに殺られるとはな…」
最後の見栄プライドといったところだろうか。

辛うじて動く口を開いてそんな悪態をついてみた。声は掠れ、息をする度に喉が焼けるように痛む。

「気取ってるね…馬鹿みたい。」

勇者はそれを鼻で笑った。

その瞳の奥には優越感しかなかった。

同情の色は微塵にも感じられない。

「……弱いね。こつもあつけないとなんだかなあ」

「…そうだな。」

もはや笑うしかないというように魔王は笑って言った。

「認めるんだ。…ホントに馬鹿みたい。」

勇者はそんな魔王をせせら笑った。

「ああ、……そうだな。」

魔王はそんな自分を自嘲した。

「次は幸せになれるといいね。」

「くはは……。次なんて…あるわけないだろう？」

自虐じみた笑いをこぼしながらこれまでの人生を思い返す。

今思えば退屈な人生だった。

早くに死んだ元魔王父親。

あとを継ぐために失った時間自由。

齢10にして就いた魔王の座。

それからはあまりにも短かい人生を送った。

味気なく、周りの言いなりになって、ただのお飾りとして生きて約数年。

魔王としては最短の7年での滅亡。

きっと次世の魔王に笑われるだろう。

今になってはどうでもいいことか。

心残りは別だ。

やりたいことなどなかったが、魔王城の外に憧れていた。普通というものを味わってみたかった。自由がほしかった。しかし、これも今となってはもう後の祭り。終わりは終わり。次なんてものはありえない。

「それがありえるんだよ！アンタには次があるよ。まるで心を読んだかのように勇者は言う。」

「…そうか。まあ、次があるとしたら貴様を殺しにいくとするか。冗談半分でそう言うのと勇者は嬉しそうに顔をほころばせる。」

何がそんなに嬉しいのかと逆に怪訝そうな顔をする魔王。

「じゃあ、楽しみにしてるからさ！…早くしてよ？」

勇者は聖剣を振り下ろした。背中から全身にかけて痛みがはしる。

「…っつ、ああ！！」

噛み殺しきれなかった声が口の端から漏れる。

体は震え、髪を引っ張っていた手が離れ顔面を床にぶつける。

泣きそうになったが、それは駄目だと自分に言い聞かせなんとかこらえた。

勇者はそれをまるで可愛い子犬を眺めるような優しい、だがどこか馬鹿にしているような瞳で見ている。

そんな勇者に対して湧いた殺意。

しかしそれは行き場のないもの。

それをわかっていてもなお、湧き上がってくる。

「僕はもう行くよ。あと少ししたら楽になって次の人生来るからいい子で待っててね？」

そう言つて魔王の頭を優しく撫でる。

それに反発する力さえ残っていない魔王はただ睨みつけることしかできなかった。

勇者の手は温かく眠りへと誘う。

「バイバイ魔王さま。次起きたらアンタは幸せになれるよ。」
手を離すと勇者は振り返ることなく大広間を出て行った。
何の気配もなくなり、一人取り残されると無性に寂しさがこみ上げ
てきた。

ああ、もし次があるというなら…
次があるとするならば、自由がほしいと思った。

世界はいつだって悪に対して酷く不公平だ。(前書き)

今回だけ魔王視点です。

世界はいつだって悪に対して酷く不公平だ。

その光景は異常だった。

一言でいえば異常だ。

一言でいえば超、異常だ！

「勇者さん！目が覚めましたか！？」

「心配したのじゃぞ、勇者よ。」

「勇者様、お怪我は痛みませんか？」

「大丈夫ですか勇者様！？3日も寝たきりで心配しましたわ！！」

「…はっ、大した生命力だな。」

「まあ、何はともあれ生きてて良かった…のかしら？」

目が覚めたら目の前にはどっかの国の偉そうなおっさんとなんかどつかで見たことのある旅人みたいな服着たやつらとメイドに囲まれていた。

ああ、良く見たら旅人風の格好した奴らはこの間戦った勇者一行のメンバーじゃないか。

でもこいつらは魔王であるこの我が輩とその部下でミンチにしてやったんじゃないか？

…いや、それはもう2、3くらい前の勇者一行だったか。

こいつらは一番最近に戦った勇者一行だったな。

あのピンクフリルの糞生意気な小娘がうるさかったのを覚えているぞ！

…で、俺はたしかこいつらを倒した…いや、てない！！

こいつら全員で我が輩に飛びかかってきたんだ。

いや、飛びかかっってきたっていうか30メートルくらい離れた場所から魔法放つてきやがった。

全員魔法で攻撃してきて前線に出てこなかった卑怯者ども!!

部下は皆外でその魔法で死んだり外で戦つてたりでそこに我が輩一人、集中砲火くらったし!

そのくせ、最後の最後だけ勇者が格好つけて全然血に汚れてない聖剣で俺の事を刺したん

…あれ、おかしくないか?

あれが最後だったとしたら、何で我が輩は此処に居るの?

てゆうか、此処どこ?

あいつら、我が輩の事何て呼んだ?

「?どうした大丈夫か勇者?」

え、ユウシャって…何?

世界はいつだって悪に対して酷く不公平だ。(後書き)

次からちゃんとした本編に入ります！

第一話 元魔王Ⅱ 現勇者の憂鬱

今の状況に魔王は困惑していた。

否、正しくは元魔王といえる。

今、魔王は『見た目は勇者、中身は魔王』というなんとも奇妙奇天烈なことになってしまっていた。

何も言えずに困惑している魔王を見て、勇者の仲間たちはまだ頭が覚醒していないのだろうと解釈したようでまた来ると言って部屋から出て行ってしまった。

扉が閉まった直後に魔王はベッドから飛び降りてクローゼットの横に立て掛けられている姿見に自分を映した。

そこにいたのは黒髪に黒の瞳で背は小さく肌は白い、まだ幼さの残っている顔立ちをした青年。

それは紛れもなく、つい最近自分を倒したはずの勇者である。

「え？え？何でどうして…貴様が鏡に映っている？」

鏡に映った勇者を指差すと鏡の中の勇者もこちらを指差してきた。それを見ておそろおそろ右手を上げてみる。

すると鏡の中の勇者は左手を上げた。

今度は自分の頬を思いつきり引つ張ってみる。

「いででででででええ！！？」

するとまた鏡の中の勇者も同じように頬をつねって痛がっている。痛い…ということこれは夢ではないらしい。

「嘘…だろ？え、何このミラクル！？…最低」

力なくその場にへたり込む。

いきなり突きつけられた現実キャパシティーは魔王の頭の許容量をすでにオーバーしていた。

鏡を手で触ると中の勇者：中の自分も同じように鏡を手で触っていた。
ひどく苦しそうな歪んだ表情。
今にも泣き出してしまいそうだ。

ああ、何でこうなった。

鏡を見ていると背後で扉の開く音がして、そんな事にさえ驚いてしまった。

「誰だ!?!」

大声を出して言ったつもりだが、自分の喉から発せられた声は小さく喚くような掠れ声になってしまい恥ずかしい。

その声に臆することなく平然と部屋に入ってきたのは女だった。女といっても年はまだ十代後半くらいで、女性というよりも少女といった雰囲気醸しだしている。

その少女はペコリという効果音が付きそうなほど綺麗なお辞儀をして柔らかく微笑む。

「私はコラル王国自由主義第3部隊の者です。」
リベラリズム

確かにどこかで見たとのことのある紋章が服の袖に付けられている。白を基調としている服のようで少女の青い髪の色印象を強くしている。

よく見れば瞳の色もその青い髪に見合った深い青色をしていた。しかし、見えているのは左目のほうだけ。
右目は黒い眼帯で隠れてしまっている。

怪我でもしているのだろうか。あるいは眼球そのものがないのだろうか。

しかしその笑顔を見て少しだけ冷静さを取り戻せた。

「先日、勇者様のお身体に異変が見られたので検査をしてくれと国王様から承りまして、今日その検査結果が出ましたのでお話に参りましたのですが…」

少女はそう言うのと部屋の中を見回す。

ベッドとクローゼットと姿見くらいしか家具がない無駄に広い部屋なのでそんなに首を回してまで周りを見なくても、それくらい分かるだろうに。

「ああ、…あいつらならどっか行った。」

「では、先に勇者様だけに検査結果をお話しますね。」
手に持っていた資料をペラペラとめくる少女。

そんな少女を見ながら魔王はさつきから少し気になっていたことを尋ねてみることにした。

まあ、聞きたいことはそれ以外にも山ほどあるが今は現状把握が一番だ。

「なあ、…魔王はどうなった？」

「えー…そうですね、勇者様がその手で殺したとお聞きしておりますが。」

「…そうか、死んだのか」

少女はさしてそのことに興味がないかのように資料から目を離さず言う。

魔王はもう一度「死んだのか…」と呟いた。

そしてまた疑問が生まれる。

これが、勇者が言っていた自分の『次の人生』だろうか。

もしそうだとするならば、それは『自分の人生』ではなく『他人の身代わりの人生』ではないだろうか。

今まで勇者が歩んできた人生の引き継ぎ。
これから先も勇者としてこの国を守って人生を終えなくてはいけないのだろうか。
それでは今までの魔王としての人生となんら変わりはないじゃないか。
あつたとしても善か悪かの違いだ。
そこに自由はあるのだろうか。

「あ、ありました。お待たせしてすみません。」
そんな事を延々と思考しているうちに少女は探していたページが見つかったらしく顔をあげる。
しかし少女とは逆に俯いている魔王を見て首をかしげる。

「どうかしましたか、勇者様？」

「…っ！違う！！」

少女の言葉に勢いよく顔を上げ、怒鳴り叫ぶ。
それに多少驚きの色を見せた少女だったがすぐにまた笑顔に戻る。
そこで気付く。少女のあの笑顔は作り笑いだと。

完璧なまでに仕上げられた作り笑い。

その笑顔を張り付けたまま少女は魔王を落ち着かせるように、優しくゆっくりとした口調で話しかけてくる。

「どうかしましたか？何が違うんですか、勇者様？」

「だからそれが違う！！我が輩は勇者などではない！！！！」

一気に言葉を吐き出す。途中で声が裏返ったがそんなことはもう気にしてはいられない。

「勇者ではない…？」

魔王の言葉をオウムのように繰り返し、少女は理解しようとする。
普通なら何を言っているのだと笑うところだが、少女は真面目に考

えているようだ。

しばしの沈黙。魔王にとっては何時間という時が流れたかのようにも思えた。

こんなことを言っただけになるといつののだろうか。

一時の感情に身を任せて叫んだ言葉はあまりにも滑稽で、自分でも可笑的だと思う。

何を言おうと今魔王は勇者の姿をしているのだ。

『中身』が違えども『外見』が勇者^{それ}なのだから勇者^{それ}であることに違いないのだ。

しかし少女は真剣に考え、結論が出たのか俯き加減だった顔をあげ、澄んだ青い瞳で魔王を見据えた。

「では、貴方は誰のですか。勇者ではないというなら、何ですか？」

魔王は臆した。少女の真つ直ぐな瞳に。

これなら笑われたほうがまだとさえ思えた。

少女の瞳から目を逸らせず、口ごもる。

「我が輩……は……」

何だというのだろうか。

魔王は死んだ。勇者ではないといった。

では何だというのだろうか。

魔王でも勇者でもない自分は何なのだろうか。

少女は答えを待つようにただただ何も言わず魔王を見据える。

「我が……輩は……」

その時だった。外のほうから爆音が響く。

「え…何かあったのかしら…？」

少女の気はそちらにされる。

魔王はそれにホツとして胸をなでおろした。

「あ…ああ、何かあったのかもな。」

適当に相槌を打ちながら窓の外に目を向ける。

「ちよつと外を見に行きましようか？」

そう言つて少女は身を翻し扉に手をかけた。

『全部隊に告ぐ！！直ちに西の町クロツカスに向かつてくれ！！』

どこからか声が響く。

その声に少女も扉を開けるのをやめ、部屋を見回す。

「な…どこからだ！？」

「あ、あそこです。」

少女は部屋を見回して天井に近い壁を指差した。

その先にはスピーカーがとり付けられている。

『全部隊に告ぐ！！直ちに西の町クロツカスに急いでくれ！！』

そこで音声はブツリという音をたてて消えた。

少女は何かを考えながらチラリと魔王のほうを見る。

何が何だか分からない今、頼れるのは彼女しかない。

現状が分からない今、頼れるのは彼女しかない。

「えつと…私は今からクロツカスに向かいます。貴方はここで待っていてください。」

「いや待て！我が輩も行く！！」

そう言つて慌てて少女に駆け寄るが少女は苦い顔をしながら口を重く開いた。

「…大変申し上げにくいのですが…検査結果について…です。」
「検査結果？」

何故今その話を引つ張りだしてくる？

もしかして重い病気にかかったのかと思い魔王の顔が青ざめる。

「いえいえいえ、病気などではありません。人体への異変はみられなかったのですが…」

「…ですが？」

そこまで言っつて少女は口を閉ざした。

もごもごと何かを口の中で言っつているようだが声に出さない。

「ええつと…驚かないで…くださいね？」

「ああ…」

そんなにまずいことなのかと息をのむ。

少女も一度深呼吸をして決意したように一気に言葉を吐き出した。

「貴方は今、レベルが1になってしまっています。何故かはわかりませんが…これは普通の一般人と同じ、またはそれ以下です。そんな方を戦場に連れていくわけにはいきません。」

なので貴方は此処で待っつていてください。」

「はあ！？なんだと！！！？」

「失礼します。」

少女は礼儀正しくお辞儀をすると魔王が硬直している隙に部屋を出た。

ご丁寧に鍵までかけて。

それに魔王が気付くまでにはあまり時間はかからなかった。

「はああああ！！！？おい待て！ここを開ける！！！」

扉の向こうに話しかけるが反応はない。少女はもう行っつてしまった

ようだ。

「まったく…どうすりゃいいんだ…。」
大きくため息をつく。

とにかくこの状況で一人というのは心細いし、なにより外に出てみたかった。

部屋を見回してみるが扉をこじ開けるために最適な物など何一つないほど殺風景。

これはじつとしている他ないだろう。

そう諦めかけた瞬間、ふと窓が目につく。

これなら…

魔王はニヤリと笑った

地面は意外と近かった。

この部屋は二階にあるらしい。

飛び下りれば多少の痛みは伴うが此処からは出れる。

魔王は気にすることなく窓枠を蹴り上げ宙へダイブした。

「ぬあああああああ！！！」

ドンと鈍い音がする。尻から落ちてしまったため尻餅をついた。

尻が猿のように赤くなってないかが心配だ。

「いてて…」

「…何してるの？」

尻をさすっているとおから声が降ってきた。

今までずっと聴きなれていた声だ。

それは聴き間違っことのない声だ。

鼓動が急にはやくなり、全身に汗をかいた。体全身を悪寒が駆け巡る。

「ねえ、顔あげてよ。」

そう言われても体が動かない、動かせない。

本能が告げている。見てはいけなないと。

魔王は俯いたまま目をきつく瞑った。

「ねえ、何で僕を見ようとししないの？ちゃんと僕を見てよ。」
そう言われても顔を上げようとししない魔王。

しかし髪を引つ張られ、無理矢理顔を持ち上げさせられる。

この感覚は憶えている。

痛みに目を開くとそこにいたのは魔王^{じがん}だった。

不機嫌そうに眉をひそめ、しかし口元はいやらしく歪み、笑うかつての自分。

「やあお久しぶりだね。魔王さま。」

第二話 現魔王Ⅱ 元勇者の訪問理由

今の状況に魔王は困惑していた。

「いや、僕から行くつもりだったんだけどまさかアンタから来るとはね。」

目の前にいるのは紛れもなく魔王まおうだった。

「まあ、建物吹き飛ばす手間が省けて助かったかな。正直面倒くさかったし。」

でも自分はここに居るじゃないか。今は勇者の姿をしているが。

「ここまで来るのも面倒だったんだよ？まったく…感謝してよね。」
「じゃあ、魔王まおうは誰だ？

「あ、僕が誰かって聞きたそうだね。今までの話とかから察しとかつかないの？アンタ…：ホントに馬鹿みたい。…みたいってゆうかここまで来たら本物の馬鹿か。」

目の前に居る魔王の姿をした何者かは魔王を鼻で笑った。

魔王は回らない頭で必死に考える。

今までの話し方やこの現状からいうと今目の前にいるのは

「そう、アンタを倒した元勇者。…で、現魔王です。」

そう言って口元をいやらしくくり上げたのはあの勇者だった。

「僕がここに来たのには二つ理由があるんだけど。聞きたい？」

魔王は何が何だか分からないがとりあえず頷く。

まだ体が、頭がこの状況に追いつけていないらしい。

「僕の話をご拝聴したいと…ははは。」
勇者はニヤニヤといやらしく笑いながら魔王の頭を優しく撫でる。
しかしその手はひどく冷たかった。
今勇者は魔王の姿をしている。魔界に住んでいるものは体温が低い
ので今の勇者の手も冷たいのだろう。
「まあ、そんなお馬鹿さんにお話があつて来たんだけどね。この状
況について。」

この状況というのは二人の身体が入れ替わっていることだろう。こ
こでやっと頭の整理がついたのか魔王は口を開く。

「ききき貴様！！何が目的だ！！？」

やっと出た声は震えていて裏返つていてかつこ悪かった。

頭にのせられた手も払いのける。

「目的は…とくにはないよ。しいていえば僕が魔王に興味があつた
からかな？勇者とかマジありえないから。」

勇者は心底嫌そうな顔で魔王を睨む。

否、元の自分を見ているのだろうか。

しかし魔王はその視線が自分に向けられたものだと思い身を震わせ
た。

今まで自分はこんなにおぞましい顔をしていたのかとショックをう
ける。

「ほんととはねえ、アンタも殺そうと思つてたんだよね。アツハハ」
棒読みな笑いをこぼしなんと物騒なことをいう勇者から魔王は数
歩後ずさりした。

しかしすぐに壁に到達してしまい逃げ場がない。

「だって自分があるんだよ？気色悪いったらありゃしない。これだ
つたら前の自分の身体を殺して中身いじくり回してみたいよね？…
内臓とか心臓とかを…」

壁があると分かかっていてもなお、後ろに後ずさるうとする。
が、逃げられない。

勇者はウーンと考え込みながら魔王に近づいてくる。

「それって凄いことだよな…。だって自分は生きてるのに自分の中身は見れちゃうなんて…さいっつっこの奇跡^{ミラクル}!!」

いきなり大声を出した勇者に対して魔王はもう恐怖の感情しか湧いてこなかった。

殺意なんてものは真つ二つに叩き折られて粉々に砕かれて風に飛ばされてどこかへ行ってしまった。

もはや勇者そのものが恐怖の根源だ。

「…って思っただけけどさあ、それより面白そうなもの見つけちゃってね。何だか分かる？」

「ひいっ!!!?」

一瞬で勇者の顔がすぐ近くに来る。

紫色の二つの暗い瞳が魔王を見据える。

その瞳はどこまでも続く闇のようで、光など一切ない。

「…アンタ言っただよな? 僕を殺しに来るって…」

そんなことも言っただ覚えはある気がする。

気がするだけで本当に言っただ覚えはないが。

「そそそそ…それが何だというのだ!!!?」

「えっとねえ…だからそれを楽しみにこれからは生きようかなって思っただって話。期待してるよ?」

そんなこと期待されても困る!!

口にはだせないが魔王は心の中でそう思った。

「…話がそれだね。そろそろ本題に入ろうよ。僕だって暇じゃないんだ。」

わざとらしくため息をついてから勇者は魔王と同じ視線にするため魔王の前にしゃがみこむ。

魔王が逃げないようにと片方の手は魔王の耳のすぐ横を通り後ろの

壁についている。

至近距離で見た勇者の目は先ほどよりも恐ろしく、暗く淀んでいた。
「アンタにはこれから一生勇者として暮らしてもらおう。拒否権は一切認めない。」

「なっ…そんなの勝手すぎるだろ我が輩の身体を返せ！」

「はいそうですか…なんて返す奴はいないよ。てゆーか、黙って。」
真顔で言われて魔王は黙ることしかできなかつた。

逆らったら何をされるかわかつたもんじゃない。

一回死を覚悟したからといってももう一度あの恐怖を体感するのは遠慮したかつた。

「おお、いいこだねー。(笑)」

また頭を撫でられる。馬鹿にされているとしか思えない。

…：現に何度も馬鹿といわれているからそうなのだろうが。

「で、僕は魔王として生活します。ここまでは馬鹿なアンタでも分かるよね？」

合点はいかないが魔王はとりあえずコクコクと頷いておく。

「ほんとはこれで終わりにしようと思ってたんだ。…でもアンタは言つたよね？僕を殺しに行く、と。だから君は勇者として魔王である僕を殺しに来るんだ。でも僕を殺して『はいおしまい、身体がもとに戻りましたあゝ』にはならないんだ。」

「…？何でだ？普通魔法は術者が死んだ場合消えるはずだろう？」

昔習った浅い魔法の知識からそんなことを思い出して言ってみるが勇者は黒い笑顔で魔王の頬を思い切り叩いた。

「黙れって言つたよね？…まあいつか。僕がかけたのは魔法じゃなくて呪いだよ。」

「のろ…ごめんなさい！！」

魔王は勇者がまた手を上に上げたのでとつさに謝つた。

笑つたまま手を元の位置に戻したのを見て安堵する。

そんな自分に格好悪いとも思ったが今は魔王のプライドよりも命のほうが大切だ。

「呪いは術者が死んでも消えないケースもあるんだ。僕がかけたのはそれ。だから僕を殺しても意味ないの。それに僕が死ぬってことはアンタが死ぬってことと同じだし、それじゃ意味ないでしょ？だからアンタは僕が歩いてきた道のりをたどってきてよ。そこに身体を戻す呪いがあるから。もちろんノーヒントでね。」

魔王は何かを言おうと金魚のように口をパクパクと動かすだけで声にならない。

今喋れば確実に殺られるだろう。

「まあ、そゆことで一つよろしく。…これでアンタも人間の汚さが分かるよ。」

そう言った勇者の瞳は何処かここではない遠くを見つめていた。どこか寂しそうで諦めているようなそんな感じだ。

それを見て魔王は自分でも気付かないうちに口を開いていた。

恐怖はまだあったが勇者のそんな顔を見てそれも軽くなっていった。

「貴様は…何故人間が汚いと思う？貴様も人間だっただろう。」

「…人間なんて皆自分の事しか考えてないんだよ。」

『誰かのため』とか『正義』とかは所詮、自己満足のための材料にすぎない。

人からよく見られたいとか愛されたいとか人の上に立ちたい…とか、そんな私利私欲の塊なんだよ人間って。」

勇者は続ける。

「その為に他の人間を利用してそれをまた利用する人間がいて。」

勇者をやっているとそういうのが見えてきちゃうんだよねえ。

己の私利私欲のために他人まわを利用して醜い欲望丸出しで…勇者ほくを自己満足のための道具としか見ない汚いやつらがさ！」

勇者は喚くようにそう言って我に返った。

魔王は正直言つて驚いた。まだ関わつて間もないが勇者はもつと冷淡で残酷で自分の気持ちを表には出さないような人間だと思つていたからだ。

それは勇者が初めて見せた人間らしい表情だったのかもしれない目を合わせないまま勇者は立ち上がり、魔王に背を向けた。

「…あと『苦勞して手に入れた幸せ』なんてよく言うよね。

僕、あれ嫌い。さっき言つたように誰かの為に動いて何かを手に入れて、幸せになるなんておかしくない？そんなに苦勞してまで手に入れた幸せって何？疲れるだけじゃん。

だったら自分のやりたいようにやって満足して幸せになりたいじゃん。

だから僕はこれからの人生は自分のやりたいようにやって他の奴らを利用して生きてく。」

その背中が寂しそうだった。

それが本心かどうか、勇者の言っていることが真実なのかは魔王には分からなかった。今まで人間に接したことなど一度もなかったからだ。

本や部下からの報告上でしか知らなかったからだ。

今まで興味すら持つていなかったが少し興味が湧いた。

それが真実なのか。

はたまた勇者の嘘なのか。

「じゃあ僕は帰るね。もうすぐ他のも帰ってくるだろうし。まあまた近いうちに会うだろうね。この状況の事は人にはあまり言わない

ほうがいいよ。気違いつて思われるか信じてもらえたとしたら王様につきだされちゃうかもしれないからさ。」

そのまま歩きだした勇者は「あっ」という声をもらし振り返った。

「さっき勝手に喋ったよね？その罰。」

とびきりの笑顔でそう言った勇者は黒い光を手のひらに作り出しそれを魔王のほうへ投げた。

魔王の目の前にくるとソレは爆発した。

「うああ…!!!？」

「じゃあねえ勇者さま。あ、我が輩はやめたほうがいいよ今時そんなの言ってるのキモいから。あと貴様とかもねえ〜」

それからヒラヒラと手を振りながら勇者は一度も振り返ることなく去って行った。

魔王はその背中を見ながら意識を手放した。

第二話 現魔王「元勇者の訪問理由（後書き）」

自分で書いてて意味がわからなくなりました。
理解できない方は気にしないでください…

あと話が進むの遅くてすみません…

第三話 元魔王Ⅱ 元勇者の不安

魔王の目の前には勇者の仲間たちがいた。

何これデジャヴ？

気付けばまた今までいた部屋のベッドの上に居た。

周りに居る勇者の仲間たちは無言で全員、魔王に冷たい視線を向けている。

空間には重い空気が漂う。

魔王には何故か分からなかった。

その重い空気に口火を切ったのは仲間の中の一人だった。

「お前：事態が分かってないみたいだな。自分が何をしたか分かってるのか？」

「…え？」

男の声は落ち着いてはいたがどこか黒い感情がまじっていた。

魔王はそんなことを言われても意味が分からないというように顔を顰めた。

そんな態度がカンにさわったのかまた仲間の一人の少女が魔王に怒鳴りつける。

「貴方のせいで何十人という国民、そして兵士が死んだのですよ！

！」

甲高い声が耳触りに響く。

一人が怒鳴り付けたことで他の仲間たちも声を上げる。

「勇者様：酷いです。私たちを騙していたんですね。最低です…」

「僕信じてたのに…だから勇者さんに任せたんです！！なのにこん

なのってあんまりです!!!」

「…嘔吐き野郎。お前のせいで国は大変なことになっている。アタシたちの名まで汚して…。お前なんかそのまま永眠していればよかったのに…」

いきなりかけられた一方的な罵声の嵐に魔王は脅えた。

「なんのこと…か、分からないのだが…」

控目にそう言くと少女がすごい剣幕で魔王に掴みかかってきた。

「あああ貴方!!ご自分がやったことを憶えていないのですか!？」

「やめるメルシー!こいつは分かかってない。…何せ今までずっと眠っていたからな。」

それを制止し男は魔王に冷たい視線を向ける。

エメラルドグリーン瞳には憎悪の念が込められていた。

「あの魔王城で…魔王に最後の止めを刺したのはお前だよな？」

「あ…ああ。たぶん…」

確かに止めを刺したのは勇者である。

他の仲間たちはドアの横でそれを見ていただけだった。

「あの時…お前さあ…魔王と何話してた？」

「それは…」

何と言えればいいだろうか。本当の事は言えない。

嘘をつくにしてもいいものが浮かばない。

かといって黙っているのも怪しまれる。

口の中でもごもご何か言葉にならないことを言う。

「…言えないことか?たとえば…魔王に力を貸せと言われたとか…」

「な…違う!!そんなことはない!!断じて!」

「じゃあ何だつてんだよ…?」

いらついた口調で男は言う。

それにまた口ごもる魔王。

「あ、いつが…うん…最後に言いたい、ことがあるって…」
「言いたいこと？」

「そう！言いたいことだ！それでえっと…何かあうん…死に際は誰にも見られたくないーみたいなことを…うん、言ってるそれで、だから帰れ？みたいなこと…いや振り向くな？とか…」
しどろもどろになんとか嘘の話を作っていく。
仲間たちからは疑いの視線が向けられる。

きつとこの人間達はいくら言っても自分の話は信じてくれないだろう。

まあそれは魔王の下手な嘘にも問題があるのだが…。

そこで魔王は作戦を切り替えることにした。

「すまないが今のは…全て嘘だ。」

「でしようね。貴方は今までよく嘘をついていらしたものだ。ま、今までついた嘘の中で一番分かりやすく卑劣な嘘でしたけど！」

「メルシー…落ち着け。で、魔王と何を話した？」

噛み付いてくる少女を男が押しのけてまた魔王の前に来る。

魔王は表情が見えないように俯いて低い声で言う。

「…憶えてないんだ。」

「……は？」

「全部分らないんだ。お前の事もこのメルシーとかいう女も…そして自分のことも…。」

我がは…俺が勇者って本当のことなのか？自分がこれまで何をしてきたかも分らないんだ…。」

それは確かに本音だった。

今まで魔王として生きてきた自分がいきなり他の人間おしいになっていて、しかもこの人間の記憶なんて持っていないのだから分かるはずがな

い。
今言われていることはすべて身に覚えのないものだ。
勇者と闘った時だってそれは魔王の記憶であって勇者の記憶ではないのだ。
だから嘘はついていない。

「なあっ！？ふっざけんなよ！！それでこの責任から逃げようってのか！？」

「だからその責任とやらも分らないんだ……」
胸倉を掴まれ揺さぶられるが魔王は毅然とした態度をみせる。
内心では心臓がバクバクと鳴って恐怖がこみ上げてくる。
自分は案外怖がりなのかもしれない。

今にも殴りかかりそうな勢いの男を周りの仲間は止めようともしない。
むしろこの状況を楽しんでいるようにも見える。

それだけ薄情なものなのか人間は……
あるいはこの勇者が酷い嫌われ者なのか。

どちらにも当てはまると魔王は解釈した。

「なんだよそれ……！！？ふざけんなよっ……ふざけすぎだろ……」
男はその場に崩れ落ちた。

何がそんなにショックなのだろうか。
「しかし……先程からの奴の行動や言動、雰囲気は前と少々変わっているな。」

「……たしかこの人、身体に異変があったとかで検査を受けましたよね……」

もはや勇者とも呼ばれなくなっている。

「え……じゃあそのせいなんですかね？」

「…なんともまあ都合のいい記憶喪失ですわね。」
棘のある言い方に魔王は口元をひきつらせる。
魔王の身体を心配するやつはいないのか。
元は仲間だったはずの人間じゃないのか。

見えないように小さくため息を吐く。

そうしていると扉がノックされ、兵士が一人入ってきた。

「皆様、謁見の間にて国王様がお待ちです。集まってください。」
その一言で全員がバラバラと謁見の間に向かっていく。
魔王もその群れの中、最後尾でとぼとぼと付いて行った。

「待つておつたぞ。お主は今まで眠っていたそうじゃな。今の事態を簡潔に述べるから心して聞いておくれ。」

謁見の間に入るなり国王らしき人間はそう切り出した。

「お主らが倒したはずの魔王が何故か生きておる。そして昨日、魔王軍は我が国の隣国にある町、クロツカスに襲撃をかけおつた。我が国からも多くの兵が赴き、戦つたが魔王軍の力によりそこにいた過半数の人間が死、または傷をおつた。町人のほとんどが死に至つたそうだ。」

国王は悔やんだように眉をひそめた。

その場に居た人間のほとんどが俯いたり悲しそうな顔をしていた。しかし本当に悲しんだり悔しんだりしているのかは分からない。

魔王はそんな感情は一切なかった。

別に人間が死のうがどうでもいいのだ。

逆に死んでしまったほうが魔族こしらひとしては好都合なのだから。

「そして隣国の国王は『こちらの国の勇者が魔王を倒したのは嘘だった。そのせいで我が国の国民が死んでしまった』と言ってきたのだ。このままでは隣国と築き上げてきた関係は崩壊してしまう…。」

最悪の事態、戦争になるやもしれん。」
国王は先ほどよりも顔を青くして言う。

「どうやらこちらが本音らしい。」

確かに今戦争をされれば、魔王討伐に失敗してしまったこの国は周
りから悪い印象しかないだろう。

格好の標的となりかねない。

国王にとっては人の死よりもまず隣の国との関係修復が大事なのだ。

雲行きが怪しくなってきた。

「どうすればこの関係が戻せるか。…それは魔王を倒すことにある。
しかしその前にやるべきことがある。そう、お主らの処分じゃ。」

国王の言葉に心臓が跳ね上がる。

このままでは殺されてしまうだろうか。

一抹の不安が胸に根を張る。

「聞くところによれば魔王に最後の攻撃をしたのは勇者だけで他の
者はそれをはるか遠くで見っていたそうじゃな？」

「はい、お父様。私たちは勇者に言われたため扉の横で待っていま
したわ。」

仲間の少女が国王に近づいていく。

「私たちは勇者が魔王と何かを話しているのを見ました。何かを相
談しているようでした。」

まるで…二人で何かをたくらんでいるようでしたわ。」

「それは本当か勇者よ。」

「なっ…そんなことは…な…ありません。」

その場に居る全員の視線が魔王に集まる。疑いの視線しかない。
何も言えない。違うと言ってもどうせ信じてはもらえないだろう。

きつと隣の国との関係修復のために自分は消えるだろう。

勇者を殺すという目標もできなくなるだろう。

「もう一つ、お主らに伝えなくてはならんことがある。勇者が記憶

喪失だと聞いたのじゃが、その勇者の検査結果についてじゃ…」
魔王の背中に汗が流れる。

これで身体に異常がないのがばれてしまえば先程ついた記憶喪失という嘘も同時にばれてしまう。

それこそ終わりだ。

「実はその検査結果が何者かによって奪われておったのだ。もう一度検査をするにあたっても検査には何かと必要な物が多くてな。今は出来ぬ。その結果を見た兵士は憶えてないと言っておった。」

「…じゃあ、本当に記憶喪失かもしれないのか…」
仲間のほとんどががっかりしたように肩を落とす。

逆に魔王は助かったと胸の中で安堵した。

しかしまだ安堵するのは早い。

「だったら先程の発言も真偽は分かりません！もしかしたら彼は魔王との契約で記憶を失ったのかもしれないわ！」

少女が食って掛かるような金切り声で言う。

すると国王はため息をついて魔王に向き直る。

「お主が魔王と手を組んでおるとは考えにくいのだ…。しかし何も処分を与えなくては我が国の面目がたたない。よって…」
そこで一度言葉を切る。

その場の緊張に押しつぶされそうだ。

「お主から勇者の称号を剥奪する…！！以上…！！！！」

国王の言葉で場は騒然した。

「な…何故ですか！？彼は多くの国民を殺したのですよ…！！」

「そうですね！彼のせいで隣国との関係が悪化したのですよ！！」
「彼が魔王と手を組んでいる可能性だって有り得るのです！！！！」
「死刑にすべきだ！！」

全員魔王の死は確定しているものだと思っていたのかその意見に賛成する人間がほとんどだった。

当の本人である魔王もそう思っていたため拍子抜けといったような間抜け面になってしまった。

「なん…で？」

不意に喉から出た疑問に国王は小さく微笑む。

「もともと勇者になるよう強要したのはわしらじゃ。これからは一般人として城下町で暮らしてくれ。…しかしお主のしたことを心にしまい亡くなった者の事を思い毎日を生きていくのじゃ。」
それだけ言うと国王は謁見の間の奥の部屋へ姿を消した。

しかし国王が居なくなったら後もしばらく抗議の声は絶えなかった。

それからは突き刺さる視線の中、謁見の間を後にして勇者と会った中庭に向かった。

これからのことを考えるためには一人になりたかった。

…一人になりたかったのだが、

「…本当に全部忘れてんのかお前……」

「あ…ああ、すまな…ゴホン、ごめん。」

魔王の隣には元勇者の仲間の一人の男がいた。

謁見の間を出てすぐに話しかけてきたのだ。

永遠に続くのではないかというくらい長い廊下を並びながら歩いている。

「そうなのか…」

「ああ…すま、いやごめん。」

この会話がもう5回もされている。

そのあとは沈黙がしばらく続く。

正直言つてこの沈黙がづらい。

しかし本当に何も分からないのだ。

横に居る男が勇者…否、元勇者の仲間であることは知っているが名前がわからない。

そもそも勇者の名前だつて分からないのだ。

知っていると言つて嘘をつくこともできない。

けれど何か話題を変えなくてはこの沈黙を破ることはできないだろう。

「あゝえつと、貴様じゃなくて、おまえの名前はなんて言つんだつたっけ？」

「はあ!？」

どうやら地雷だつたらしい。

胸倉を掴まれ壁に叩きつけられた。地味に肩甲骨が痛かった。

「マジで言つてんのかよお前!?!？」

「ううううめんない!?!」

…最近自分はビビりになつたなあ
と魔王は思った。

「…俺の名前なんかどうでもいいよ。…なあ今から城下町に行つてみないか?これからお前も暮らすんだろう?」

男は悲しそうに微笑んだ。

ここで断るのは可哀想だなと思ひ魔王は男について行くことにした。

「ここはコラル王国で一番市場が盛んなんだ。まあ、城下町つていうだけあるな。色々な国と貿易しているから沢山の物で溢れかえつてるんだ。」

「へえ。」

「魔道書とか変な物やら裏でしか買えないものもある。人も沢山いるからはぐれないようにな。」

「ああ、分かった。」

何も知らない魔王に男は色々教えてくれた。

この国のことがほとんどだが、それは何も知らない魔王にとってはどれも為になるものばかりだった。

しばらく歩くと門のようなものが見えてきた。

人間の文字は魔界で使っている文字に似ているから辛うじて読めるがすぐに解読するのは難しい。

「よ……う……こそ……ここ、あ！コラール！……おう？」

「『ようこそ！コラール王国城下町カーマインへ！』だろ。お前そんな基礎まで忘れてんのか……」

「あはははあ……」

哀れみの瞳で見られている。

確かに普通の人間だったらヤバかっただろう。

普通の人間だったら、だ。

「じゃあ入るか。」

門を開けるとそこは本当に大勢の人間が行きかっていた。

旅人風の人間から商業を行っている人間、普通にここで暮らしている風な人間、兵士とさまざまだ。

「こつちだ。」

「は……ま、待って！！？」

手を伸ばしても男は上手く人の波に流れて奥まで行ってしまいもう姿が見えなくなっていた。

「ま待ってつてうわあ！！？」

「うおっ！！」

無理矢理前に進もうとすると誰かとぶつかった。

商業風の格好をした男だ。しかも短気そうだ。

「つてめえ！！どこに目え付けてやがるんだ！！！！？」
ビンゴ

顔を真つ赤にして大声で怒鳴ってきた。

周りを歩いていった他の人間もその声に足を止め、野次馬が増える。

「糞野郎！！どこのどいつだ…つてお前…あの勇者じゃないか！？」

「ああ！本当だ勇者だ。」

やっぱり勇者は有名人だった。

周りから勇者勇者という声が聴こえてくる。

しかし視線は冷たい。

「お前よくノコノコと出てこれたな…。」

「ホントだよ偽物が…。」

「嘘吐き勇者め！！」

魔王の身体がビクリと揺れる。

慌ててあの男を探すがどこにもいない。

「おい聞いてんのかよ！！？」

魔王の頭に何かが飛んできた。

それはドロリと目元まで垂れてきた。

手で触ってみるとそれはトマトだった。

一体どこからと辺りを見回すと今度は顔面にクリーンヒットした。

次々と魔王に向けて

色々なものが飛んでくる。

「な、何だよ！！？ブゴオッ！？」

カボチャが頭に直撃して格好悪く地面に倒れる。

「はははっもつとやれ！！」

「そうだもつとやれ！親仁このトマト貰うぜ！！」

倒れた魔王にまだ物をぶつけてくる。

それは止むことがなかなかない。

「うう…っ」

とりあえず立ち上がる。

隙をついて城下町のすぐ横にある森に逃げ込んだ。

追ってはこなかった。

ここまで追ってこられては魔王も本当に死んでしまったかもしれない。い。

「はあっはあっ…なんでだよ!!?」

「そりやお前が失敗したからだよ。」

振り返るとそこにはあの男がいた。

酷く覚めた瞳で魔王を見下ろしている。

「…お前が魔王を倒し損ねたせいでまた世界は魔王の恐怖におびえなくちゃならない。信じていたのにダメだった。しかも憶えてないって責任も背負わず生きてるからだよ。」

それは違つと心の中で思った。

これは自分のせいではないと。

これは自分ではなく勇者が仕組んだことなのだ。

なのに何故自分がこんなことにならなくちゃいけないのか
こんなことになるならばあの時、死んでしまえばよかった。

今更、後悔しても仕方ないことだが、思ってしまう。

勇者が魔王じまに止めを刺してくれさえすればよかったのに。

「国王は何故お前を城下町に住まわせようとしたか分かるか?最近町の人間の仲間割れがよくあるらしい。そこにお前をぶつ込むことでそれを抑えようとしたんだよ。」

静かに告げられた真実に魔王は困惑した。

先程の国王の言葉に魔王は救われた。

しかしそれはまた自国のためだったのか。

「仲間割れしてるとこに嫌われ者を入れることによって結束を高めようとした。まあ国王としてはたいした考えをお持ちのよう…。で、今見ただろ？町人はみんな一斉にお前を攻撃してきたからこの作戦は成功だな。俺もそれを確認するためにお前をつれてきたわけ。」

男はニコリと効果音が付きそうなほどの笑顔を見せたが、どこかきこちなかった。

魔王はその男を見上げたまま何も言わなかった。

この男もまた自分のために色々教えてくれていたわけではないのか。

「お前：もうどこにも居場所がないじゃん。はははっ」
嬉しそうに男は言った。

魔王は泣きそくに顔を歪めた。

しかし泣くのはこらえる。ここで泣いては本当に格好がつかない。泣きそうな顔を隠すように俯く。

たしかにもう居場所はなくなった。

このままでは一生あの町で村八分にされながら死ななくちゃいけないかもしれない。

外に出たとしても今のレベルでは死に行くだけだ。

「なんなら俺がお前を拾ってやるうか？」

優しい声で甘い誘惑をかけてくる。

「え…？」

「一生下僕として俺についてくるか？毎日壊れるまで俺のためにつくすなら拾ってやってもいいよ。死ぬまで一生一人で生きていくよりもいいだろう？俺がお前を飼ってやるよ？」

そう言って手を差しのべてくる。

極限にまでへし折られた魔王の心は揺れた。

勇者になってから一人孤独だった魔王に差しのべられた手。

魔王はその手を

はらった。

「ふざけるなっ！！！そんな誘いに乗るほど我が輩は落ちぶれてないわ！！！」

きつく睨みつけると男も憎悪の念を身にまといながら睨んでくる。

それからしばらく沈黙が続いて男が口を開いた。

「やっばお前はプライドが高いのな。俺とは違って。そういうトコ口が俺は大っ嫌いなんだよ！！！」

頬に鈍い痛みがはしる。

数秒経ってやっと状況がつかめた。

目の前の男に殴られた。

驚いて男を見ると男は懐からナイフを取り出した。

「国王がお前を殺らないなら俺が…っ！」

そこまで言っていると男は森の奥を見て舌打ちした。

「っ…誰か来たな。お前の事は今度だ！！！」

それだけ言っていると町のほうへと走って行ってしまった。

どうやら助かったらしい。

「いやー彼も成長したね。僕が来なかったら死んでたんだよ勇者サマ。いや、元勇者サマかな？」

「…またお前かっ」

「うんまた僕だよお。ま、今回はすぐに帰りますが。」

勇者はアハハと軽快に笑う。

魔王はそんな勇者を睨んだ。

「いやあね、あの言葉は僕が初めて彼に会ったときに言った言葉だよ。ちよつと違うけど…彼はそれで僕の手をとったんだよね。でもどんだけ執念深いんだか（笑）」

「…最低だな。」

だから男はあんなに魔王に対して憎悪の念を抱いていたのか。

しかしそれだけではないような気がする…

「最低なのは勇者じゃなくてこの国じゃない？自分達は何もしてないくせに勇者が失敗したら許さないなんて。仲間たちだって誰も勇者の心配なんてしないで自分のことばっか。」

勇者は小さくため息をついて男が逃げて行った方向を見つめた。

寂しそうな瞳だった。

「勇者なんてのはただの災厄処理機なんだよ。必要なのは勇者であつて僕やアンタではないんだ。それが良く分かったよ。…さて、僕は帰るよ。もうじき暗くなるからアンタも帰りな。」

「…俺には帰るところなんて……」

「今日のところは城のあの部屋にいればいいよ。前はあそこが僕の部屋だったんだ。じゃあね元勇者さま。」

そう言つて勇者は消えていった。

「部屋つて…物少なすぎだろ…」

魔王も気は乗らないが一度城へ帰ることにした。

城につくまでは人が通らない道を探して通りなんとかついた。

城の門を開くと何人かの兵士から冷たい視線を向けられた。

メイドからは「床を汚すな」というような感情が交じつた視線が向けられる。

正直にいつて居心地が悪い。

しかしそんな視線は気にならないというような毅然な態度で廊下を

歩いた。

尚更嫌そうな顔をされたが仕方ないとあきらめる。

しかし、いつまで経ってもあの部屋が見つからない。

どこも同じような作りの扉で完全に迷子になっていた。

しかしそこらへんを歩いている人間に聞くこともできず当てもなく廊下をさまよってしまふ。

「あゝ困った。」

「ふふっ」

はあ、と大きなため息をつくとなかに笑われた。

後ろから聴こえた笑い声に振り返るとそこにはあの少女がいた。

青い髪を後ろで二つに結わえ、作り笑いを浮かべている。

「迷われたんですか？でしたら私があのお部屋までお送りします。」

その時の魔王には不覚にも少女が女神に見えた。

女神なんてものを魔王が信じてはいけないのだが。

第三話 元魔王Ⅱ 元勇者の不安（後書き）

勇者がエゴイストじゃない…

これからきつとエゴイストになります…たぶん

第四話 元魔王Ⅱ 元勇者の告白

「この紅茶はコラル王国でしか作られていない貴重な茶葉で淹れているんですよ。」

「ああ、そう…なのか……」

「はい。」

目の前で少女は温かい紅茶を淹れながら、ほほ笑んだ。

少女が淹れている紅茶は、魔王が居た部屋にはキッチンなどがなかったため部屋に向かう途中で少女がその機械を借りて淹れてくれたものだ。

その時に少女は柔らかいタオルも借りてきて、魔王の汚れた体をきれいに拭いてくれた。

その行為に泣きそうになったが寸前のところで気を持ち直し、小さく謝った。

聴こえるかどうか分からないくらい小さい声で言ったが少女は魔王の言葉に優しく「いいですよ。」と返事をしてくれて、そこで魔王の涙腺は崩壊した。(ような気がした)

勇者になってから周りからの冷たい態度や分からない現状への不安を和らげるような少女の優しさはまさに北風と太陽の太陽のようだった。

馬鹿みたいに嗚咽をもらしながら咽び泣く魔王に尚も少女は優しくしてくれた。

背中をさすりながら魔王が落ち着くのを待っていてくれる。

そして現在に至る。

魔王が落ち着きを取り戻し始めてから十数分が経った。

その間に魔王は今の自分がどんなに恥ずかしいかを悟り、穴があったら入りたい心境に陥っていた。

少女は魔王がそんなことを思想している間に紅茶をティーカップに注ぐ。

「どうぞ。」

「…すまな…ごめん。」

甘い香りが部屋に充満する。二つ持っていたティーカップの一つを魔王に渡し、ベッドの上に座っている魔王の横に腰かけた。

少女が座ったことで軽くベッドが軋み音をたてる。

そんな小さな音さえ部屋に響き渡るほど部屋の中は静かだった。

少女が紅茶を一口、口に含むのを見て魔王も紅茶を少し飲んでみる。予想よりもほのかに甘い紅茶の味が口全体に広がった。

思えば朝から何も食べていなかった。

口に含んだものといえば投げつけられた野菜のクズくらいだ。

「ごめんじゃなくて、ありがとうございますと言ってほしかったです。」

ポツリと少女が呟いた言葉にまた謝りそうになるがその言葉を飲み込みお礼の言葉を述べる。

「ご…あり、がとう。」

涙声になっているのに気が付き赤かった顔がいつそう赤色に染まる。それを見て少女はまた小さく笑った。

「なんだか、前の時より幼くなった気がします。前に見たときはもっと冷めた雰囲気をしていらしたような気がしたんですが…まあチラリと見たくらいなんで違っているのは当然ですかね。」

「そうなのか…？」

「はい。…貴方は私のことは覚えていらっしやらないとは思いますが。何せ記憶喪失…でしたっけ？」

クスリと少女が笑う。先程の優しい雰囲気はいつの間にか消えていた。

作り笑顔で魔王を見つめている。

顔は笑っていても目は笑ってはいなかった。

検査結果を見た兵士というのはきつとこの少女のことなのだろう。

しかし何故憶えてないなどと言ったのだろう。

彼女ならきつと憶えているだろうと魔王は国王に言われた時から頭の片隅で考えていたのだ。

「貴方は憶えていらっしやるでしょう？…嘔吐き…ですね。」

少女の責め立てるような鋭い視線が魔王に突き刺さる。

それは魔王の思いこみかもしれないが。

「違う…本当に憶えてないんだ…。というか、…分らないんだ。」

「え？」

魔王の言葉に少女は首を傾げた。

意味が分からないというように眉を顰める。

魔王はつい口に出してしまった言葉にしまったというように慌てて口をおさえた。

それを見逃さず、少女は魔王のほうに少し顔を近づける。

「それはどういう意味と私はとればよろしいのでしょうか。…貴方は…自分は勇者じゃないと言っていましたでしたがそれは『自分は魔王を倒していないから勇者ではない』ということと解釈してよろしいですか？」

「いや、それは違う！そういう意味で言ったわけじゃないんだ！！」
魔王が死んでいないのは大体勇者と会った時点で感づいてはいたが

勇者の称号を剥奪されるのを予想はしていなかったのだ。

「では…その理由も教えていただけますか？」

「それは……」

魔王は俯き、しばらく黙りこんで考える。

その間も少女は答えを待つように何も言わず魔王を上目使いで見ている。

自分が実は魔王だった。なんて言ってしまった方がいいのだろうか？

勇者が言っていたとおり、気違いと思われておしまいだろう。

今の自分は世界の信用が皆無と言っていいほどにない。

そんな人間の話を目面に聞く奴が居るとは到底思えない。

第一に今から話そうとしている話はあまりにも現実味のない話。

信じるほうもどうかしている。

しかし自分の話を真面目に聞いてくれるのはこの少女だけだ。

この機会を逃せばこのことについて話すことはもうないだろう。

一生をあついで過ごすならば言ってしまったほうが楽かもしれない。

魔王は意を決して少女のほうに向きなあった。

少女も魔王の意を感じとってか姿勢を正し、真つ直ぐに魔王の瞳を見据える。

「今から話すことは事実だ。だが、実に現実味のない話だ。信じるかはお前が決めてくれてかまわない。」

「はい。」

「話を聞いた後、お前がどう行動しようとも…俺はもう気にしない。お前に危害を加えるつもりもないから、最後まで聞いてくれ。」

「はい。」

真剣な面持ちで向かい合う二人の間に緊張の糸が張り巡らされる。重くなった口を開き、魔王は言った。

「俺は

今まであったことを全て少女に伝えた。

魔王の話聞いてる間、少女は一言もしゃべらず魔王の話聞いていた。

時間にして約十分。

その間二人はずっとお互いの目を見つめていた。

魔王の話が終ると少女は困惑したように魔王から視線を外し、俯く表情は見れない。

少女が信じるか信じないかはまだ分からないが信じないのほう明らかに確率は高い。

しかし心の端で少女が信じてくれることを望む自分が居ることに魔王は気が付いた。

信じてもらえたとしてもまだ油断はできない。

勇者の言った通り、国王に突きつけられる可能性もある。

綱渡りをしているようなアンバランスな状況。

しかし後悔はしていない。むしろ重荷が少し軽くなった気さえする。

「なるほど…だから前とは様子が違ったのですね。…分かりました。

少女が顔を上げる。

魔王は何も言わず、少女の次の言葉を待った。

「では…これからの事について考えましようか。」

「へあ？」

考えていたことよりも斜め上をいった少女の発言に魔王は素っ頓狂な声をあげた。

それをどうかしたのかというような顔をして少女は首を傾げる。

「どうかされましたか？」

「いや！どうしたも何も…今の話から何故そんな事が言える！？」

「あら、だつて私がどんなことをしてもいいって言ったのは貴方じやないですか。」

「いやいやいや待て！！まず貴様…じゃなかった、お前は今の話を信じたのか！？」

魔王が若干キレ気味でそう尋ねると少女はまた柔らかくほほ笑んだ。「信じる信じないの話ではないんですよ。それをどう受け止めるかが大切です。」

「…それは…同じことではないのか？」

「はい。違います。」

訝しげな視線を送る魔王に対して少女は笑顔を崩さずに断言した。

魔王がまた何かを言おうとする前に少女は話題を変えた。

「貴方はまずこの国から出たいんですよね？」

「え！？……ああ、まあ。」

「今の貴方はこの国から出られません。何故かというとそれはこの国の法律リールにあるのです。」

ピツと人差し指を天井に向け少女は立ち上がる。

ベッドに座っている魔王からは見上げる体制になった。

魔王を見下ろしながら少女は続けた。

「この国の人間は一人を外に出ることを禁じられています。もちろん一般人が何人集まるうとこの国を出る交通書を得ることはできません。」

「…じゃあ俺は一生この町で暮らさなきゃいけないんだな。」
それが分かった瞬間、恐怖が身体を駆け巡った。

一生野菜をぶつけられる生活を想像してしまった。

伸ばした指をビシッと青い顔をしている魔王に向け少女はニヤリと笑った。

「それがあるんですよ、この檻くわから抜け出すことができる方法が！
それは……」

そこでもったいぶって一度言葉を切る。何故か得意げだ。
魔王もゴクリと唾を飲み込む。

「それは……？」

魔王に向けていた指をスッと自分に向け少女は言う。

「それは、私です。」

「ふえ？」

本日二度目の素っ頓狂な声を発してしまった。

「この国は一般人が外に出るのに兵士を一人つけるだけでいいんです。他の国と比べたら甘い方なんですよ。」

「え……？それって……つまり……」

「はい。私が貴方の魔王討伐の旅にご同行致します。」

少女はニコリという効果音が付きそうなほどの笑顔でそう言った。

元魔王で嫌われ者の元勇者に仲間（仮）ができました。

第五話 青色少女の苦悩

「ちょっと起きてよ、もう朝だよ。」

「何故…貴様がここに居る…？」

「前の自分の寝顔を見に来たんだよ。」

深い眠りから覚めて目を開いた瞬間に飛び込んできたのは、今一番会いたくない奴の顔だった。

「自分の寝顔を直で見れるなんてそうそうない体験だね。でもア
ンタちょっと警戒心なさすぎじゃない？」

「五月蠅い。…とりあえず、我が輩の上から退け。」

今勇者は魔王のちょうど鳩尾のあたりに座っている。

どつりで眠っている間呼吸がしずらいわけだ。

魔王が言っても勇者は一向に動く気配を見せない。

それどころか意地の悪い笑みを浮かべ体重をさらにかけてくる。

苦しさに顔を歪めせると勇者はまた嬉しそうに顔を綻ばせた。

「いやあ、その顔いいね。まあ元は自分の顔だけどさ。あはっ」

「うる…さいなっ。退けと言っているだろうがっ」

「えへへへへ。…でもここで死なれちゃ困るから今日はここまでにしよっか。」

ヨイシヨと言って勇者は魔王の上からあっさりとおりた。

やっと肺に十分な酸素が送り込まれて一息をつく。

「…で朝っぱらから何の用だ勇者よ。」

チラリと窓の方を見ればまだ日は昇っておらず、辺りは静かだった。

「今は魔王だけだね。…別に大した用ってわけじゃないんだけど、これ。」

すつと魔王の前に何かを出す勇者。

魔王はそれに見おぼえがあった。

それは伝説の聖剣であり魔王を倒した忌々しい剣でもある。

前はそれを見ただけで嫌気がしたが今は何故か落ち着く。

それはきつと魔王が人間になったからだ。

「これさあ…めっちゃ邪魔なんだよね。誰も欲しがらないし。だから…」

それをくれるのかと魔王は一瞬喜ぶ。

そんな魔王を見て勇者は口元を歪めた。

「これ破壊しちゃっていいよね？」

「は？」

バキつという嫌な音がして目の前で聖剣に罅が入る。

罅は剣の全体に広がっていきあつというまに粉々になってしまった。

パラパラと床に聖剣だった物の残骸が落ちる。

魔王は口を開けたままその残骸を見つめた。

あの聖剣が…

あの伝説の聖剣が…

あの自分さえも恐れた伝説の剣が…

もしかすると勇者の弱点にもなりうる聖剣が…

最強であるはずの剣が…無くなった。

驚いて何も言えない魔王に対し勇者は言う。

「もしかして僕がアンタにあげるとか期待した？ははは馬鹿みたい。」

乾いた笑いをもらしながら勇者は粉だらけになった手をパンパンと

叩く。

「僕がそんな自分にデメリットしかないことと思う？だってこれは魔王の最大ほくの弱点だよ。そんなものを残しておく、況して敵であるアンタに渡すなんて何の冗談ですかあ？みたいな（笑）」

クツクツと喉を鳴らして笑う勇者に対して殺意が込み上げてきた。

「貴様！それでも元、勇者か！？」

「元だから良くない？…誰か来たみたいだけど。じゃ、僕は帰るね。」

「なっ！！？その為だけに来たのか貴様は！！？」

勇者は身を翻し窓枠に足をかけ、一度魔王のほうを振り返った。

「んー、まあねえ。じゃあね元勇者サマ。」

そうとだけ言つと黒い笑みをこぼしながら勇者はこの部屋から消えた。

そのすぐ後に扉をノックする音が部屋に響いた。

後を追いかけてようかとも思ったがきつともう居ないだろうと諦め、

魔王は扉に近づく。

『あの、起きていらっしやいますか？』

扉の外から聴こえたのはあの少女の声だった。

「ああ、起きています。今開ける。」

扉を開くとすぐそこに少女が立っていた。

「おはようございます。昨日はよく眠れましたか？」

「ああ、今朝は最悪な起こされ方をしたかな…。それはそうと今何時だ？」

部屋に少女を招き入れ、先程まで眠っていたベッドを整え座らせる。少女はまだ薄暗い窓の外に目を向けた。

「えつと…午前五時くらいですかね。あそこに時計塔があります。」

少女が指差した先には確かに時計塔のようなものがあるが薄暗いため時計の針は魔王には見えなかった。

「目がいいんだな。」

「ええまあ視力はいい方なんですよ。」

「そうか…」

「えっと、準備はできてますか？」

「ああ準備するも何もわ…俺には何もないからな。」

「じゃあごはん食べたらずくにここをでましよう。」

そう言つて少女は手に持っていたバスケットの中身を魔王に見せた。中身は色とりどりのサンドウィッチだった。

昨日少女が置いて行つた機械で紅茶を淹れ少し早目の朝食を食べる。結局昨日は何も食わずに眠ってしまったのでサンドウィッチがものすごく美味しく思えた。

「これすごく美味しいな!!」

「私の手作りなんですよ。結構こういうのを作るのは得意なんです。」

俄然テンションの上がつてきた二人。

久しぶりに物を口に含んだことによつて魔王も嬉しそうに笑う。

「このあとは兵士専用のシャワールームへ行きましょう。今の時間帯なら誰もいないと思います。着替えは用意してあります。」

そう言つと少女は真新しいTシャツを魔王のほうへ渡す。

しかし魔王はそれを受け取らなかつた。

それを少女が不思議そうに見る。

「どうしたんですか？ずっとそんな野菜クズだらけの服じゃ気持ち悪いでしょう？」

「ああ…でもお前は何でそこまで俺のことを気遣うのだ？世界中から恨まれているこの勇者に。」

旅にもついて来るなんてどうして…」

それは当然の質問だった。

昨日はあの後少女はすぐに帰つてしまい理由は聞けなかつた。

しかしその理由が魔王には何一つわからなかった。

こんな少女にとってデメリットしかない旅についてくるなんて何らかの理由があるはずだ。

善意でついて来るにしてもおかしすぎる。

少女は一度サンドウィッチを置きどこか遠くを見るように宙を仰いだ。

「…私、この国から抜け出したいんです。この檻くわから…。もともと縛られることが嫌いでした。だから自由主義リベラリズムの第三部隊に入ったんです。でも結局自由なんてのは人を呼び寄せるだけのただの飾りでした。」

少女は顔を歪め俯く。

「何をするにも線ラインとかあったりして、それが嫌で…。例えば人間関係とか規則ルールとか、雰囲気とかもう全部嫌で…。私は…。自由になりたいです！！」

少女が悲痛に叫んだ。

その声が部屋に響く。

しかしその訴えは部屋の分厚い壁によって吸収され外に届くことはなかった。

それは今まで少女が溜めてきた気持ちだったのだろう。

心の中で叫ぶその気持ちは自分の中にある壁で外にもれることはなかった。

初めて出てきた本音だった。

魔王にはその気持ちがあった。

今までずっと魔王城の中でしか生活せず、周りの言葉に従い自分の意見や考えなど何もなかった。

言わせてももらえなかった。

ただのお飾りとして終わった自分の人生。

自由さえもなく縛られ続け、終わった魔王じゆうおうの人生。
きっと少女も同じなのだろう。

全てに囚われて生きていく人生に疑問を持ち、嫌気がさした。

そんな気持に気付いた魔王の口は勝手に言葉を紡いだ。

「なら出よう。この国…檻から。一緒に探そう、自由を。これから
の人生を俺たちは自由に生きよう。」

「…人は一生何かに囚われて生きていくんです。それはこれから先
も変わらないと思います。」

無機質、無感情に少女は呟く。

まるで自分に言い聞かせるように。

「円の中にいる私とその円を壊したところで何も変わらなかった。

円の外にまた円。ずっと輪の中から抜け出せず、気づけば自分でま
た円を作り上げてた…。壊すことなんて無意味。抜け出すなんて不
可能。」

「それでも檻こゑから抜け出さないかぎり一生お前は囚われたままだ。

出口なんてないかもな。…でも円の中心でうずくまっているより、
その円の外には自由になれる鍵が落ちてるやもしれん。それを見て
見ぬふりをするのは…俺はもつたいたいなと思うぞ?」

少女は何も言わずにただ頷いた。

魔王はそれだけで十分な答えだと思った。

「お前の作ったサンドウィッチは美味かった。さて、お前が言いだ
したことだ。シャワー行ってこの檻くわから脱出するぞ。」

「…そうですね。」

魔王は確かに見た。

少女が微かながらこぼした笑顔を。

それは張り付けた偽りの笑顔ではなく、真実だと思えた。

真実なんて言い方はおかしいかもしれないが、魔王にはそう思えた。

第五話 青色少女の苦悩（後書き）

自分で書いてて魔王の言ってることが嫌だなと思いました。

クサイてか…

うーん…… 『知ったかぶりかっ』 みたいなの…… ちょっと違うけど

兎に角嫌だ。

第六話 初めの一步と名前

「てめえら二人で旅立とうってか？」

「はい。早くしてただけますか？」

「…生意気な小娘が。ほらよ、開いた…さっさと行けよ糞ガキ。」

目の前で門が開く。

少女の言っていた円が一つなくなった。

「ありがとうございます、門番さん。」

少女は門番に対して軽く頭を下げ、門のすぐ前にいる魔王のもとへ向かった。

その背中を見て門番は呟く。

「…てめえらの旅に幸多からんことを。」

「まさか。心にもないことを言うもんじゃありませんよ。」

その呟きが聴こえたのか少女は一度振り返り笑顔で言い放った。
門番は目を丸くし、驚いた。

「では、いざ魔王討伐の旅へ…！…ですね。」

「いや、討伐しちや俺が帰れなくなるだろ。」

「あら、そうですね。」

少女は嬉しそうに笑い門の外を眺める。

日が昇り始め、荒野を赤く染めている。

夕陽と間違ってくるくらいに赤々とした太陽はとても眩しかった。

魔王も少女の笑顔につられ笑顔になる。

「じゃ、こっから初めの一步を踏み出すか。」

「はい。行きましょう。」

そう言っ二人で門の外へ一歩足を踏み出した。

「……………」

「……………」なんか別に感動とかないですね。」

「まあ…地面は地面だもんな。それにここまだコラール王国の領土
だろ？」

「はい。まだコラール王国です。」

とくに感動することも無く、二人は道に沿って歩き始めた。

「まず最初の目的地はこの道をまっすぐ行くと着くノンポリの街で
す。あそこは人で賑わってますよー。そこで食料やら何やらの調達
ですね。」

「あ、金はどうするんだ？俺は無一文だし。」

「ああそれは心配しなくても大丈夫です。勇者様がやった任務で稼
いだお金を国王に回収されるまえ、昨日のうちに全部頂いてしまし
たから。」

「ぬかりないな…」

「はい。」

少女はニヤリと笑って親指をたててみせた。

昨日からずいぶんと手際がいい。

「次に、元勇者様が今までどんなことや道を辿ってきたかなどのこ
とを調べてきたので今から発表します。」

本当に手際が良すぎる。

畏かと思ってしまうくらいに手際が良すぎる！

魔王のその気持ちに気付いたのか少女は眉を顰めた。

「畏なんかじゃありませんよ！！失礼ですねー。」

「じゃ…じゃあその勇者の情報は一体どうしたんだ？」

「ああ、王国にある資料を少々調べてきたのとこれです。」
そう言つて少女が鞆から何かを取り出した。

「一つは本のようなものでもう一つは…」

「それ、勇者の検査結果だよな。」

「はい。ここに色々とのつてまして、つい…えへ。」

少女は困つたような笑顔でそんなことを言った。

つまり、盗んだのか。

「…そつちの本は何だ？」

「こつちは元勇者様のストーカ…こほん、ファンの方々の汗と涙の塊を本にされたものです。」

「お前…。いや、細かいことは気にしないでおこつ。で、それには何て書いてあつた？」

「助かります。…これらには色々と公に広められていないことまで書かれてあるんですけど…その前に」

少女は一度止まって魔王の方を見る。

青色の瞳に魔王を映しながら少女は口を開いた。

「私は貴方を何と呼べばよろしいのでしょうか？」

ああ、そうかと魔王は思った。

今の自分は魔王ではない。

かといつて勇者でもない。元勇者だ。

そう呼ばれるのも何だか嫌な気がする。

魔王のときに使っていた名前を使うのも変だ。

勇者の名前で呼ばれるのは死んでも嫌だ。

それならどうしようか。

うーんと唸り悩んでいる魔王に対し、少女は苦笑いを浮かべた。

「自分で新しい名前を考えてみてはどうですか？」

「あ…そうだな、そうしよう。」

しかし新しい名前といってもこれからずっと使っていくものだから格好悪いものにならないよう慎重に考えなくては。

「魔王…まおう…まお…いや違う。まおう。」

「やっぱり魔王にこだわるんですね。」

「ああ、初心忘れるべからず、だ。」

少女は苦笑いで真剣に悩んでいる魔王を見守った。

「まおう…ま、おう…うおま…おまつ、まつお…おつ、ま…おつま？おつま…！」

バツよ顔をあげ魔王は嬉しそうに笑う。

どうやら納得いく名前が決まったようだ。

「決まりましたか？」

「ああ！おつまだ！！今日から俺はおつまだ。」

「おつま…ですか。」

「ああ、桜に魔王の魔で桜魔だ。」

「桜ですかー可愛いですねえ。」

少女がそう言っつて柔らかくほほ笑む。

「いや、可愛いからじゃないぞ。」

「え？」

魔王が真顔でそう言っつと少女は不思議そうに首を傾げた。

「魔界に咲く桜は人の血を吸って生きてるんだ。魔界で桜は生き血フラットの花と呼ばれ、魔界の花の象徴とも言われている。可愛いというより格好いいだ。」

「…そう…ですか。」

少女は眉を顰め苦い顔で魔王を見ていた。

魔王は誇らしげに自分の新しい名前を連呼している。

「あ、お前のことは何と呼べばいい？名前をまだ聞いてなかったかな。」

ふと思い出したように魔王が少女に尋ねると少女はさきほどまでの苦い顔から一瞬にして笑顔を張り付ける。

「私のことはご自由にお呼び下さい。」

「は……？」

「小娘でも何でもいいですよ。」

「いや、それはちょっと……」

「じゃあ貴方が決めてください。貴方を新しい名前で呼ぶので私も新しい名前を下さい。」

「ええ……無理難題……」

ううと呻きながらも少女の笑顔を見て何か似合う名前をと考えた。

「あ、じゃあ決めた。」

「早いですね。」

自分の時よりもあっさりと思いついた。

それは少女の第一印象から決めたものだ。

「どんなのですか？」

「うん、シアンってのはどうだ？」

「……シアンですか。」

「ああ、なんかお前の目とか髪とかそれに近いし、青くてきれ……うん青いから……！」

……嫌なら別のを考えるが……」

少女は真顔のままシアンと呟く。

魔王はそれを不安そうに眺める。

昔、部下に

『魔王様はネーミングセンスがホント皆無っすよねー』

と言われたのがまだ心に突き刺さったまま抜けていない。

「…いいですね。嬉しいです、ありがとうございます。」

「本当か!?!?」

「はい。」

少女は嬉しそうに笑った。

魔王もそれに負けないほど明るく笑った。

「じゃあ…これからよろしくお願いします、桜魔。」

「ああ、こちらこそよろしくなシアン!!」

二人は右手で堅い握手をした。

「…じゃあ歩きながら勇者様の生体を解明していきましょうか。」

「ああそうだな。聞いとかなきゃな。」

そして桜魔とシアンはまた何事もなかったかのように歩き始めた。

第六話 初めの一步と名前(後書き)

やっと魔王と少女じゃなくなる…

第七話 世界のルール

「あの勇者は実は異世界から召喚されてこの世界に来たんですよ。」

「そうなのか!？」

「はい。公にも知られている『召喚型勇者』ですね。」

「召喚型勇者?なんだそれは。」

二人は広野を道に沿って歩いていく。

日はすでに天高く昇り始めている。

資料に目を向けていたシアンは少し驚いて桜魔に目を向ける。

「聞いたことありませんか?」

「ああ聞いたことがない言葉だな。」

「じゃあ説明します。」

「よろしく頼む。」

桜魔が素直にそう言うのとシアンは小さくほほ笑んだ。

「この世界には四種類の勇者がいます。」

まず1つめに、召喚型勇者です。

これは物語の中では王道とっていいでしょうか。違う世界で普通に日常生活を謳歌していたら異世界に召喚されて勇者になったというケースですかね。

次に、
遺伝型勇者です。

又の名を七光り勇者といっています。父親や祖父といった血族から受け継がれた代々勇者として育てられてきた人のことです。

3つめに、

成り行き型勇者。

巻き込まれ型勇者とも言われています。なんとなく生活や旅をしていた一般人が、どういつか事件とかに巻き込まれて勇者になることです。

そして4つめに、参加型勇者。

各国から集められた兵士達が王の命により魔王討伐を成し遂げ勇者となる者のことです。

以上の4つが基本的な勇者の種類とこの世界では言われています。

…最後に例外なんですけど、破滅型勇者といわれる人もいらつしやいます。これは勇者のその力を災いとし、この世界に悪影響を与える人のことです。

今回召喚された勇者はそれにも当てはまりませんかね。」「
シアンは少し苦笑する。

「なるほどなあ。勇者はそうやって部類されているのか。」「

「はい。…あとは何についてお話しします？勇者あなたのスリーサイズとか

も載ってますよ?」

「んなもん知りたくもないわ!もっとこれから役立つ情報を覚えておかないとダメだろ…スリーサイズとか知ってても無意味だ。」

「まあそうですよねー。」

シアンはわざとらしく意地の悪い笑みをこぼす。

それを見て桜魔は小さくため息をついた。

まだシアンの性格がいまいち掴めない。

「…じゃあ属性とかはあるのか?」

「あら、良いところに気づきましたね。実はこの人、属性とか特に無いんですよ。」

「珍しいな…」

「珍しいというか何というか…」

桜魔が眉をひそめてシアンが苦笑する。

この世界に生きている生物には皆生まれつき属性というものがある。

それは水、火、土、風、光、闇が主に一般的な属性である。

それ以外にも稀に変わった属性として生まれてくる者もいる。

その力を崇められ上にたつ者もいるがそのほとんどが異端者とみなされ、他から忌み嫌われる存在となる。

故に属性が無いなんてことは有り得ないことなのだ。

「まあこの鉄則はこの世界でしか通用しないってことですよ。だからいつも召喚された勇者は無属性なんです。」

まとめるようにシアンが呟く。

しかし桜魔はそれでもまだ解せないことがあった。

「…じゃあ戦う時俺は武力一本、魔法も術もなしか。確か違う属性でも使えるものはあったがな…」

「あ、いえ無属性というのは別に魔法や術が使えない訳じゃないんです。むしろその逆、全属性を扱えるんですよ。」

桜魔の間違いにすかさず訂正を入れる。

右手の人差し指を上に向け、シアンはまた説明口調で話始めた。

「無属性というのはどの属性にも縛られていないんですよ。だからどの属性も使えます。まあ相性が合えばですけど…。でもその点厄介なところもあります。生まれつき属性を持っている人は生まれた時にその属性の守り神…精霊さんのご加護を受けていますが無属性の方にはそれがありません。なのであまり強い力は使えないんですよ。使いたかったら精霊さんに直接会ってご加護を受けるしかないんです。」

「…結局面倒くせえ…」

「そうなんですよねえ。前ときは勇者も立ち寄ってなかったようですよ…」

二人は大きいため息をついた。

遠回りになるかもしれないが行ける限りの精霊に会いに行くこともこれからの予定に追加することにした。

「この先の街についたらそこで休みましょうか。ノンポリはいい街ですよ。」

「あ…そのことなんだが街に入るのはお前だけで行ってくれ。俺は外で待つてる。」

「え…何ですか？」

そう聞かれて桜魔は苦笑いして言いにくそうに口を開く。

「あー：今のおれはこの国：世界から嫌われてるって言うか恨まれてるっていうか？じゃん。だから一緒に入るのは遠慮しておきたいのだが。」

「なんだ、そんなことですか。それなら大丈夫ですよ。」
シアンはクスリと小さく笑った。

「ノンポリの街はその名の通り政治に関心のない人々が集まって暮らしている街なんですよ。コラル王国にありながらこの国の法律ルルに縛られない自由な街として他国からも高評価を得ている街の一つなんです。だからそこなら貴方が入っても平気だと思われれます。」

「本当に大丈夫なのか…？」
桜魔が不安そうな顔を見るとシアンはそれを安心させるように柔らかくほほ笑む。

「大丈夫ですよ。もともとこの街の人は争い事や人を憎んだりすることが嫌いなので魔族の方が来たりしても快く迎え入れてくれるんですよ。だから安心して一緒に街へ…」

そこまで言っつてシアンは遙か道の遠く先を睨みつけた。
笑顔から一気に険しい顔になるのを見て桜魔も前方を見る。
人型をしているのが見えるのがやっとなくらい遠くに誰かがいた。

「桜魔逃げてください！！」
「なっ…！？」

シアンが声を上げるのと同時に二人の立っていた地面が大きく盛り上がりその割れ目から岩が突き出してきた。
それを間一髪で避けると合間を入れず前方から先の尖った岩が飛んできた。

シアンはそれを結界で防御し、桜魔はその場にしゃがむことで避けた。
そこで攻撃は止んだ。

「それはダメだよ。アンタには一生孤独なまま旅を続けてもらわなきゃ。…だってじゃないと僕が面白くないじゃない。」

気付くとすぐ目の前には魔王の姿をした勇者が立っていた。清らしいほどの笑顔で桜魔とシアンを眺めている。

「アンタには天涯孤独で世界中に嫌われる惨めな人間になってもらわなくちゃいけない。じゃないと僕の楽しい楽しい脚本シナリオに傷がついちやう。」

「…またお前か、勇者。」

「この人…いえ、この魔王があのお勇者なんですな。」

二人がそう言っていると勇者は口の端をニイツといやらしく吊り上げ黒い笑みをこぼす。

「何言ってるの？僕は真正銘の魔王様だよ。ねえその出来そこない勇者サマ？」

「…俺は出来そこないでも勇者でもないわ！貴様何しに来た!？」

桜魔がゆっくりと立ち上がり体勢を立て直す。

シアンはどこに用意しておいたのか、魔法を使うときなどに用いるような杖を構えた。

「アンタが勝手に作ったお仲間を殺しに来たんだよ。」

平然とした態度でそんな物騒なことを目の前の勇者　魔王は言つてのけた。

その言葉にシアンがビクリと身体を震わせた。

「馬鹿げたことをぬかすな!!俺が何をしようと俺の勝手だろうっ。」

そう叫んでみると魔王は笑顔だった顔を真顔に戻す。

「は？何言ってるの？アンタの身体は僕のなんだからアンタの自由になんてさせるわけがないじゃないか。」

無表情のまま早口でそう言う魔王に桜魔は恐怖を感じる。

この男なら本気でそれを実行してしまいそうだ。

「じゃ、とりあえずそのお嬢さん、死んでくれる？」

すぐにまた笑顔になり魔王は後ろ脚で地を蹴り上げシアンとの間合いを一気に詰める。

いきなりのことに反応の遅れたシアンは鳩尾に一発突きをくらい、数メートル飛んだ。

地面に倒れたままシアンは蹲り腹部を抱え込んでいた。

魔王はそれを見ているだけで次の攻撃をしようとはしなかった。

「シアンッ！！？」

桜魔は慌ててシアンに駆け寄るとうつつと小さな呻き声が聴こえた。顔を歪め、瞳に薄らと涙を浮かべている。

「大丈夫か！？」

返事が出来ないのか数回頭を縦に振る。

ホツとして背中をさすってやると背中に誰かの視線を感じた。

背後に魔王が立っているがその威圧感から身体は動かず、振り向くことすらできない。

「うーん…どんな殺し方がいいかな？アンタにもう仲間を作ろうという気持ち芽生えないように酷い殺し方をしなきゃいけないからな…。拷問みたいに爪剥がして指の先端から徐々に切り落としていか、精神を再生不能なくらいに破壊しちゃうってのもあるかな。

あとは魔界の危ない所に放り投げてどうなるかを見たり薬漬けの廃人にしちゃったり目の前で餌にしちゃう？あ、人間ってどこまでやったら死ぬかの限界に挑戦するのも」

「ふざけるなっつ！！！！」

魔王の言葉をかき消すように桜魔がやつとこのことで絞り出した声は震えていた。

それを可笑しそうに魔王が目を細めながら見ている。

シアンは魔王が発する言葉に恐怖を抱き、身体を震わせて脅えていた。

「…確かにそれは可哀相かもね。じゃあこうしよう。ちよつど僕のペットが近くに来てるんだ。アンタがそれに勝ったら彼女を殺さないであげる。これから仲間をつくるのも許してあげる。いいでしょう?」

拒否権なんて認めないというように訴えかける冷たい視線が背中に突き刺さる。

何も言わない桜魔のことなんて気にしていないように魔王は道の横にある林に目をやった。

「ほら、来るよ。」

ゴクリと唾を飲み込み二人もその林に目を向ける。

ガサガサと茂みが揺れる音が辺りに響いた。

そこから出てきたのは

「何やってるんですか魔王様!!!? すつごい探したんですよー」
「……」

青い髪の色をした悪魔の少年だった。

第八話 魔王の側近

「もうほんとに探したんですよー！…ってアレはなんですか？」

「出来そこないの勇者さまだよ。」

「はっ！！？えっちよっ…何で!？」

「君には今からアレと戦ってもらいます。」

「はあああああああ!？」

二人は呆然とその光景を見ていた。

てつきり3メートルはある巨大な猛獣が飛び出してくるかと思っていたのだが現れたのはいかにも弱そうな細っこい悪魔の少年だった。

「なあ!？何言ってるんですか魔王様!だって勇者って言ったたらアレですよね!？貴方と互角に戦ったって…無理です!！」

「いや、君ならできるよスピカ。」

「ボクはスピカじゃありません!縁えにしです!」

「…スピカ、アレは今レベル1だから大丈夫。それに何も殺せとは言っ
てないじゃん。ね!」

「ね!…じゃないですよ!ボクの話聞いてました!？」

言い合いをしている二人を見ながらシアンが腹を抱えてゆっくり立ち上がり片手で杖を構える。

それを支えながら桜魔もいつでも動ける体勢にして小声でシアンに尋ねた。

「平気か?…あの男は悪魔だよな。強いと思うか?」

「大丈夫…です。あの少年は悪魔のようですが…髪の色がおかしい

です。」

シアンは肺に十分な酸素が取り入れられないのか呼吸が荒くなっている。

足もふらふらで先ほどの痛みがまだ残っているようだ。

「髪の色がおかしい？」

「はい。悪魔は…普通、髪の色は金か紫…なんです。」

確かに少年の髪の色はシアンよりも少し暗めの青色で悪魔特有の髪の色ではなかった。

しかし人間よりも耳が尖っていて、瞳の色は赤色と悪魔と同じ姿をしている。

「何故だ？」

その疑問の声が聞こえたのか今まで言い争い（少年が一方的に魔王に文句を言っているだけ）をしていた魔王が振り向いた。

「それは僕が彼の髪の色を塗り変えたんだ。魔王城には大勢の悪魔がいて見分けがつかないから。見分けがつきやすいように、そして尚且つ悪魔の集団の中でもあまり目立たない紫に近そうな青色を選んだんだ！」

「十分目立ってますよー!!」

少年が恨めしそうな目で魔王を睨むが魔王は毅然とした態度のまま笑っていた。

「彼は僕の新しいペット兼秘書兼付き人のスピカ。こう見えて貴族のお仲間だけど、真面目なことを抜いたら何一つ残らない冴えない少年。少年といっても軽く百歳は超えてる中身ジジイの年齢詐欺なやつだよ。」

「紹介の仕方があんまりですっつ（泣）」

ワツと泣きだしてしまったスピカという少年を見て桜魔は同情してしまっただ。

なんだかそこにいるのが自分なような気がして情けないとも思った。

「で、アンタたち二人にはこれから戦ってもらうから。拒否権は一切認めません。どちらか一方が剣を手放したほうが負けってことだ。」
魔王はそう言って桜魔の前に剣を投げた。

普通のシンプルで飾り気のない剣でスピカにも同じものを手渡している。
スピカと桜魔はお互い困ったように見つめあい、動こうとはしなかった。

この状況で自ら敵のほうに赴くのは得策ではない。
かといってこのまま見つめあっても拉致があかない。

先に動いたのはスピカからだった。

「うあああああ！！」

雄叫びをあげながら桜魔に一直線に剣を振り上げ駆けてくる。

「お前は下がってる。」

「…健闘を…祈ります。」

桜魔はシアンに忠告しながら足下に転がっている剣を拾い構えた。
見た目よりも重い剣を胸の前で構え、一直線に向かってくるスピカが振り下ろした剣を自分の剣で受けた。

金属がぶつかり合う音のすぐ後に腕を伝わり振動が全身に駆け巡った。

剣を握っていた右手が軽く痺れている。

スピカの力事態はそこまで強くはないようだが勢いをつけてきたためある程度力が加わっていた。

目の前で十字架のように重なりあっている剣を弾き返し、後方に飛び退き間合いを取った。

今の一撃で力を消耗したのか肩で息をしているスピカに今度はこちらから仕掛ける。

体勢を低くし、いつきに間合いをつめる。

下から上へ剣を振り上げ、スピカの剣のガードが開き数歩後退ったところを狙って上に上げた剣をまた振り下ろす。

相手の間合いに入って確実に、しかし致命傷までには至らないようにと少し遠くから振りかざした剣はスピカに届：かなかった。

「なあっ!？」

胴体のほんの数センチ前を通り剣は何にも触れず、地面に刺さる。

つまり、空振りした。

桜魔がそのことに驚いているうちにスピカは桜魔の間合いから飛び退く。

「…今のは確実に当たったはずだ…」

「桜魔！戦いに集中してください!!！」

不満の声をもらしその理由を考えているとシアンの声で現実に引き戻された。

「うわっと…!!！」

すぐ目の前まで来ていたスピカの攻撃を避け、剣を構えなおす。

スピカの血走った目を見て背中に悪寒がはしる。

先ほどまで自分と同じように不安そうな顔をしていたのに今では目の前の獲物を捕らえようとする猛獣のような瞳に変化していた。

滅茶苦茶に剣を振りまわし、その軌道はまったく読めない。

なんとか受けてみるものの自分からは攻撃できず防戦一方となってしまうていた。

(…これじゃ埒があかない)

そう思い一旦後ろに飛び退き間合いを確保し息を整える。スピカも息が上がっているため攻撃の手を休めていた。桜魔のほうはまだ疲れはないため、すぐに動くことができた。

まだスピカが息を整えているうちに走りだし剣を振りかざす。反応の遅れたスピカは体を仰け反らせた。

先ほどと同じような間合いで剣を振りかざしたがまた剣は空振りした。

「はあ何でだよ!？」

一度ならず二度も空振りするのはおかしいと桜魔は若干パニック状態に陥った。

それから何度も剣を振るうが空振りばかり、当たってもかすり傷くらいにしか届かなかった。

「貴様俺に不良品渡しただろっ!?!？」

痺れを切らした桜魔は道の端に立っている魔王に叫んだ。

「どっちも同じ剣だよ」。届かないのはアンタの実力と甘さが原因だよ。」

怒鳴り散らす桜魔に魔王は笑顔のまま言った。

桜魔は自分で聞いておきながら魔王の声を無視して戦いに集中する。最初は空振りをしてスピカは動かなかったが今はそれをチャンスと捉え隙を見せたら攻撃してくる。次第に体の傷が増えていく。

「いくらなんでもおかしすぎます。」

二人の戦いを見ていたシアンは眉を顰めた。
先ほどからずっと桜魔の攻撃があたらない。

相手の悪魔は何も魔法を使っているようにも見えないし剣に何か特殊な魔法が掛けられているような様子も一切ない。

「だからどっちも同じだって。ダメなのは彼の方。スピカに同情しちゃってちゃんとした攻撃が出せてない。あとは身体の問題かな。」

「アンタ僕が誰か知ってるよね？」

いつの間にか気配もなく魔王が横に立っていた。

シアンは魔王の問いかけに笑顔を張り付けて答える。

「ええ知ってますよ、魔王様。勇者様桜魔から大体のお話は伺いましたから。」

「へえ……そっか。アンタ気持ち悪いね。何であんな嫌われ者に付いて行こうとすんのさ？何か企んでるでしょ。」

「あら、企んでいるのは貴方のほうでしょう？彼を使って何をさせようっていうんですか？」

「……………」

シアンの問いかけに魔王は答えず、ただ二人の戦いを眺めていた。

シアンも答えが返ってくることを期待していなかったのか素直に目の前の戦いに視線を戻した。

「……終わるね。」

魔王が呟いた瞬間、一方の剣が宙を舞った。

「あつ……………」

剣は数メートル横に落ち、地面に突き刺さった。

剣が手から無くなり力なくその場にへたり込んだのはスピカの方だった。

息を荒げ桜魔はスピカの首筋に剣をつける。

「……ハアツ……これで終い、だ。」

桜魔を見上げスピカは何も言えず涙を零した。

「負けちゃいました…ね。まあ、勝てるとは思っていませんでしたが。…ありがとうございます。」
「弱弱しく笑うとスピカは静かに俯いた。」

「あーあ残念。負けちゃったねスピカ。」

その声にスピカの体がビクリと反応する。

桜魔はスピカの首筋から剣を退け、声の主を睨みつけた。

「…貴様、こんなことをして何がしたい。」

「別に。アンタの実力を把握しておこうと思って。これから何度かこういうことしに来るかもしれないから覚悟しておいてね。」

魔王はそう言うときスピカに手を差し伸べた。

「じゃ、帰ろっかスピカ。仕事も溜まってるし。」

「…え？」

スピカは魔王の顔とその手を交互に見る。

桜魔もその行動を見て驚きを隠せなかった。

このまま捨てるか殺すかをずっと思っていたのに魔王の意外な行動に二人は絶句した。

「何、帰らないの？置いてってもいいけど。」

「いえいえ！！か、帰ります…けどどうして？」

魔王の手を取り傷ついた体を揺らさないようにゆっくり立ち上がる。その問いかけを魔王は鼻で笑った。

「はっ、そんなの僕のきまぐれに決まってるじゃん。殺そうかと思っただけどアンタがいないと溜まった仕事できないし新しい付き人探^{ハント}すの面倒だし。」

「…そうですね。じゃあ帰って早く仕事を終わらせちゃいましょう。」

スピカは大きなため息をついた。どうやら平常心を取り戻したようだ。

前を歩きだした魔王のあとについて行く。

その背中を見て桜魔は疑問をぶつけた。

「…なんでそいつが側近なんだ？前のやつ…アルバートはどうした。」

「アルバートは5代目の魔王からずっと魔王の側近として仕えてきた悪魔の家系だ。」

優秀で忠実な家臣でもあったアルバートを辞めさせたのはもったいないと思う。

況してやこんな弱いやつを側近にしたことに納得いかなかった。

「…優秀すぎるのもいけないことだよ。スピカは全悪魔の中からくじ引きで選んだんだ。すごい幸運不運の持ち主だよ。面白いし。じゃあねーダメ人間の勇者サマ。」

魔王は振り返らずにそう言うのと目の前の空中に手を広げた。

そこから空間が歪み、大きな闇が現れた。

そのまま闇の中に直進し、消えていった。

「し、失礼します。」

スピカも一度頭を下げると闇の奥へと消えていき、その闇も小さくなり無くなった。

「っはあああああ！！疲れたあ！！」

二人が消えた瞬間桜魔はその場に倒れた。

そこにシアンも駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか？」

「なんとか…な。」

そう返事をして空を見上げた。

青い空はもう姿を消し始め、荒野を夕陽が染めていた。

ゆっくりと夜が近づいてくる。

第八話 魔王の側近（後書き）

魔王 桜魔

少女 シアン

勇者 魔王

少年 スピカ（本名縁）

になりました。書き方が変わった報告。

…主人公メンバーじゃない魔王がよく出てくる。
ダメですね。

第九話 思春期少年

「何で貴方は敵に同情してちゃんと戦わないんですか。馬鹿ですか？」

「ちよつ…痛い痛い！もう少し優しくできんのか！？」

「それは相手の方にも失礼ですし、もしあなたが負けてたら死んでたかもしれないですよ？」

「だから痛つ…いでででえっ染みる！ヤメテいやだあ！！」

「…聞いてるんですかっ！！？」

「うおっ怒った！？…ごめんなさい……」

二人は道の脇にあつた大木を背に座つて傷の手当てをしていた。

といつてもシアンのほうは軽傷で桜魔は深い傷はないものあちこちに切り傷を作っていた。

治癒魔法ヒールを使つてもいいとシアンは言ったのだが桜魔はそれを断つた。

なのでシアンが持つてきた道具の中にあつた救急箱で手当てを行っている。

「まったく…終わりましたよ。」

「ありがとうございます。」

あちこちに絆創膏ばんそうこうが付いた身体に自分で笑つてしまった。

前はそんなに怪我をすることもなかったのでこんなに身体に絆創膏を付けたのは幼少期以来だ。

「で、何で貴方の攻撃が届かなかつたか原因は分かりますか？」

「いや…まったく見当もつかん。」

シアンがしてきた質問は桜魔にとつても分からないことだった。

特にこれといつて剣にも相手にも魔法が掛けられているわけでもな

かったし、相手もそれほど技や身のこなしがあるようでもないただの戦闘の初心者だった。となると原因は自分にあるはずだ。しかしそれが見つからない。

悩んでいる桜魔を見てシアンは小さくため息をついた。

「原因はその身体にあります。」

「は？」

シアンが言った言葉の意味が分からず首を傾げる。

「今の貴方は勇者の身体です。魔王のほうが背も高かったですし腕の長さだって多少は変わるもんです。桜魔は前の身体で戦っていたから当たらなかつたんじゃないですか？…多分ですけど」

「あ…なるほど。…でも最初るとき普通に歩けたし走れたぞ？」

「じゃあそれは勇者と魔王の足の長さが同じくらいじゃないですか？…でもそれって魔王のほうが背は高いのに足の長さが同じって…」

シアンはそこで言葉を止め意地悪く笑い立ち上がった。

「じゃ、私は夕食の用意をします。桜魔は疲れたでしょうから休んでいてください。」

そう言っつて背中を向け、シアンは水の音がする川の方へ歩いて行った。

「……悪魔。」

桜魔はその背中に向けて小さく呟いた。

数メートル離れたところでシアンは一度振り返り笑顔で言った。

「まさか。私は生粋の人間様ですよ。」

それからは何事もなかったかのようにまた歩き出した。

桜魔は心の中でもう一度悪と呟いた。

目の前に置かれていたのは3つのじゃがいもだった。しかも形は歪こぼでまだ芽が残っているところもある。

「…何だこれは？」

「じゃがバターです。美味しいですよ。」

器の中に入っているじゃがいもを訝しげに見つめる桜魔に対してシアンは自分の目の前に置いてあるじゃがいもにバターをつけて食べている。

「ああ、バター使います？」

笑顔で使い終わったバターの残りを桜魔に差し出した。

しかし桜魔はそれを受け取らず頭をブンブンと振った。

「いやいやいや待て！！これが今日の夕飯か？…おかしいだろ！！」

「え？何故ですか？」

シアンは本気で意味が分からないのか首を傾げる。

桜魔は頭がクラリとした。

「普通米とか肉とか魚じゃないか？…ここの飯盒とかでたいてつくったりするとか…あ、パンでも可！！！！」

「…そういうことですか。…大変言いにくいんですが私…」

納得したように頷いた後、シアンは少し吃った。

恥ずかしそうにモジモジとして頬を紅潮させる。

「料理が、できないんです…。」

「は…？」

シアンが先ほどよりも頬を赤くして両手で顔を覆う。

「いやでも…だってあの、サンドウィッチはすごい美味かったし…え？」

桜魔がそう言うのとシアンは俯き加減だった顔を勢いよく上げて弁解を始めた。

「ただただあってあれはもともとある物を切ってパンに挟むだけ

じゃないですか！新鮮なお野菜だったら美味しくなりますし、初心者でも簡単にできるものです！！そ…それに引き換えお肉とかお魚は…焼いたりしなくちゃいけないししたら焦げちゃうもんっ！！お米も焦げちゃうし加減とか難しんですよっ！！…お、桜魔が食べないならわ私が全部食べてあげますから！！！！」

そう言つて頬を赤く染めながら桜魔の皿を自分のもとへ慌ただしく引き寄せるシアンに少し自分の中でどこかの感情の高ぶりを感じたが目の前の食事を持っていかれるのだけは御免だと桜魔もいそいそと食事をはじめた。

食事が終わる頃にはシアンもすっかり平常心を取り戻して普通に話ができるようになっていた。

食事中に話しかけるとまだ話もまともにできないくらいオーバーヒートしていた。

「…お見苦しいところをお見せしてしまいましたすみません。…：…たぶん明日には街に着くのでちゃんとしたお食事が頂けると思われますよ。」

まだ若干顔が赤いがそれを指摘するとまたオーバーヒートしてしまうだろうからあえてここは気付かないふりをした。

「いや、…うん、明日には街に着くのか。」

「はい。」

ここで沈黙。

向かい合つたままの沈黙はさすがにつらかった。

初日から気まずい雰囲気をつくつてしまったらこの先やっていけないだろう。

なので無理矢理質問を探す。

「あゝえつと…そういえば勇者と対峙した時、どこから武器を取りだしたんだ？あと食器とか救急箱とかも…」

自分はもちろん、シアンも鞆などは一切持っていない。どこかに持っているようにも見えない。

「え…ああこれですか？」

そう言つてシアンが軽く手を挙げると、その手の中にいきなり杖が現われた。

それに若干びつくりした。

「これは私専用の狭間に入れています。」

「狭間？何だそれは。」

シアンはコクリと頷きまた説明口調になった。

「魔術師は自分専用の狭間を持っていることがよくあるんです。ほとんどの方が物置代わりとして使用しています。そこに物を入れておいて使いたいときだけ取り出せてしかもどこにいても出せるので旅をするときは便利なんですよ。…でもその分扱いが難しいし魔力も大幅に削られてしまうんで魔力の強い上級者しか扱えないんですよ。魔力が弱いと入れられる数も少ないらしいです。」

「…へえーなるほどな。」

「…分かりましたか？」

その説明を受けて分かったことは一つだった。

「お前は魔力が強いんだな。」

感心したように言うとシアンは苦笑した。

「まあ多少、一般の魔術師よりは強いですがね。あとさっき魔王が置いてつた剣も入れてあるので戦闘の時に使えますよ。」

「おお助かるな。」

それからはもう説明をしたことよって完全に平常心を取り戻したシアンと雑談を繰り広げた。

もう夜になるので今日はここで野宿をすることになった。

…のだがここで事件が発生した。

「すみません一枚毛布を忘れてきてしまったようで一枚しか毛布がありません。」

シアンが申し訳無さそうに言った。

別にそれは桜魔が掛けずに眠ればよいことなので問題はないことだと思えたがシアンはそれを断固として許さなかった。

「ダメですよ！何も掛けずに寝たら風邪を引いてしまいます。…なので半分こしましょう。」

最後の言葉は満面の笑みで言われた。

その問題発言に桜魔は思いつきり慌てた。

「いやそれは駄目だろ！！半分だと二人じゃきついだろうし…俺は本当になくていいからっ！」

「大丈夫ですよ。狭いかもしれませんがくっつけば二人とも入れますしあつたかいですよー。」

シアンはえへへと柔らかくほほ笑んだ。

もうすでに眠そうだった。

確かにそうかもしれないが桜魔の気にする本当の問題はそこではなかった。

年頃の男女がくっついて眠るのは危ないだろう。

桜魔は今までの人生で同年代の女子と話すことはおろか、合うこともあまりなかった。

それは前魔王である父親が決めた婚約者フィアンセが将来の自分の王女という地位を案じて、極力桜魔に自分以外の女を合わせないようにしていたのが原因だ。

周りは野郎ばかりでそういった情報は色々と集まってきたし、興味もあつたがそれを実感することはなかった。

それ故、桜魔にそういったことにまったくと行っていいほど免疫がない。

今思えば初めてまともに女子と話している気がする。

意識しだすと止まらなくなってくる。

大木に背を預けて体育座りをしているシアン。

しかも内股気味な細い足、^{もも}腿にかかっている短いスカートの中が見えそうで自然と意識が向いてしまう。

彼女が動く度にスカートが下がっていき中身が見えそうになる。

あと数センチで中が覗けることに対して桜魔は自分が異常なくらい興奮しているのが分かった。

しかしそれでも視線をそらすことはできなかった。

黙ったまま一点を見つめる桜魔に対しシアンは不思議に思ったのか、視線を合わせようと首を低くした。

「いきなり黙っちゃってどうしたんですか？」

「うおわあっ！！？」

視界の中にいきなり現れたシアンの顔に驚いて立ち上がり数歩後退った。

そのせいでスカートの中が見えなくなってしまったのが残念だがどこを見ていたかバレてしまったかもしれないという不安が大きくなる。

「いやいや！別に何も！！」

「そうですね。じゃあ寝ましょうっ？」

変に目をそらした桜魔に対して疑うことなくシアンはフニヤリと笑った。

ポンポンと自分の隣の地面を叩き誘ってくる。

「あ、あっあうう」

その笑顔を見て桜魔は言葉にならない何かを感じた。

このままではどうにかなってしまいそうだ。

自分の中の何かが疼きはじめる。

「お、おっ俺は…」

「はい〜?」

「小便に行くから探さないでくれええええ!!!」

桜魔は一目散にその場から逃げ出した。

身も心も限界に達していたためこの判断をした。

「いつてらっしやあい。」

シアンは逃げ去っていく桜魔の背中に手を振っていた。

それから桜魔が暫くして帰ってくるとシアンは可愛い寝息をたてながら眠りについていた。

半分しか毛布を掛けていなかったためそれをちゃんと掛け直してやっつてから桜魔も眠りについた。

もちろんシアンの横ではなく地面に横になり寒さに耐えながらだ。

温もりを感じて起きたらすぐ横にシアンが眠っていて、それに対し叫び声をあげ起きたシアンに起こられるまであと6時間とちよつとだ。

第十話 表と裏の差

「俺たちが向かってた街ってたしか…ノン」

「リデルの街です。」

「…いや、たしかノン」

「リデルの街です！」

「…そうですか。」

街の門の前まで来て重大な事実が発覚した。

どうやら自分たちは今まで行こうとしていた街とは真逆の位置にある街、リデルに来てしまったらしい。

先ほど地図で確認をしたらそうだった。

「…入るか？」

このまま言い争いをしても仕方がないのでここは桜魔が折れることにした。

シアンは街の看板を見ながら唸り声を上げた。

「うーん…この街はあまりおすすめできませんね。とにかく治安が悪いです。マフィアなどの危ない方々がこの街を支配してるとかで物価も高いですし、皆さん嫌いなやつはすぐ消しちゃうタイプなんです。勇者^{あなた}なんて格好の標的になりかねないです。」

「…そうか。ならこの街は飛ばすか？」

それが一番安全安心な案だと思われる。

こんなところで血祭り[に](#)あげられては困る。

しかしシアンはその案に賛成はできないというようにまた唸った。

「この街で色々調達しなくちゃ次の街まで一週間はかかるんですよ。食料は…なんとかかなりますが毛布とか足りません。」

「それは大いに困るな。」

「でしよう？…あと貴方の防具やら何やらも買わなくちゃですよ。」

「ああそうか。」

そういえば今の自分は何も着けていない。

このまま魔物モンスターに襲われでもしたら確実に死ぬ。

「…ん？そういえば今まで魔物モンスターと一度も遭遇しなかったが何故だ？」

一日中広野を歩いていたら、魔物モンスターには一度も遭遇しなかった。

「ああそれなら、ここが城から半径五十キロ圏内にあるからですよ。

…見てください。」

シアンはそう言うつと地図を出してピンクに塗られた城の絵を指差した。

城を中心として薄いピンクの円が描かれている。

その円はこの街のちょうど手前までひかれていた。

「この円の中は城の軍隊が守ってくれているんです。城に魔物が入って来ないように。だいたいどこの国でも城の半径五十キロ圏内は軍隊が魔物を狩るようにしているんです。ですからこの円から出た先は魔物がいっぱい出ます。」

地図をしまいながらシアンは結論が出たのか街の門に向き直った。

「何もなしにこの先に行くのは危険です。最低限の物だけ買って他の必要な物は次のコレッタの町で買いましょう。あそこの方が幾分マシです。」

「…じゃあ俺はここで待つてよう。武器防具はお前が決めといてくれ。」

「それじゃダメです！」

シアンはあの狭間から何か布を取り出した。
それを桜魔に渡す。

「これを着て入りましょう。私のちょっとした知人がいるのでその人に頼ります。顔が他の人にバレないようにしてください。」受け取った布を広げるとそれはフード付きのコートだった。

桜魔はそのコートをほりフードを深く被った。

「いきましょう。貴方は私に付いてきてください。」

桜魔が頷くとシアンは門番に話しかけ、門を開けてもらった。

中は人で賑わっていて危険な雰囲気はしなかった。

たまに喧嘩をしているのは見たがマフィア等の人間は出てこなかった。

「そりゃ表向きは普通の商業が盛んな街ですからね。…でもよく客を見てください。あそこ、すれ違い様に薬の取引をしています。」

シアンが指差した先には普通の一般人のような男二人がすれ違い様に何か紙袋と金を交換しているところだった。

素早い手つきで物々交換を済まし他の人間の中に上手く紛れ込んでいった。

その交換中、一度として止まることなく他の人間に怪しまれることもなかった。

「…あれは常習犯ですね。」

「よく気づいたな。でも捕まえていいのか？お前国の兵士だろ？」

「まさか…」

桜魔の質問をシアンは嘲笑った。

「この街で余計な行動をすると消えちゃいますよ？」
それだけ言つとシアンはまた歩き始めた。

少年に目をやるとまだこちらを見ていたが桜魔はそつと視線を反らした。

しばらく無言で歩き続けシアンがピタリと歩みを止めた。

その前には古ぼけた店があった。

何の店かは分からないが色々理解不能な物が置かれている。

シアンは桜魔の手を離すと店に一步近づく。

「レイシャルさん。いますよね？」

またあの笑顔を張り付け、店の奥に問いかける。

まるではじめからいるのが分かっているような言い方だ。

そうすると店の奥から少し年のいった女の人が現れた。

「やああなたかい。珍しいじゃないか。」

真っ赤長い爪を広げて手を振る。

髪は赤紫で化粧は濃く、黒のドレスのような姿は魔女のようだ。

否、ようだではなく魔女だ。

周りの雰囲気やオーラに強い魔力を感じる。

「今日は何の用だい。またその目のことで来たのかい？」

「いえ、今日は違う依頼です。彼に魔法をかけて欲しいんです。」

そう言うとシアンは桜魔を前へ押し出した。

目の前の魔女の暗い血のような赤い瞳が鋭く光る。

その視線に背中にゾクリと悪寒が走った。

「あなた…あの紛い物の勇者だね。なんたってこんなやつ…」

後半はシアンに対して言ったのだろう。

大きなため息をつき魔女は店先に置かれた椅子に腰かけた。

「…やって頂けますか？」

シアンは苦笑しながら言った。

魔女はじつと桜魔の瞳の奥を見据えた。

「アタシは勇者あんたが嫌いだよ。でも、商売に私情を持ち込む主義はない。…いいよかけてやるうじゃないか、魔法を。何の魔法をかけるんだい？」

魔女は手の中に葉巻を出し、吸い始めた。

口から離しふうつと二酸化炭素と煙を吐き出した。

濃い煙の匂いがそこらじゅうに漂い、桜魔は反射的に顔を歪めた。

それを可笑しそうに魔女が眺めている。

シアンは考える仕草をしたあと顔を上げた。

「そうですね：防御力と攻撃力、あとは脚力が上昇する魔法を教えてください。防御力は強めのものをお願いします。」

「はいはい了解。あんた先に店の奥行ってな。アタシは魔法をかけるのに必要な物取り揃えるから。」

魔女は葉巻を地面に捨て靴底でぎゅつと磨り潰し火を消した。

「ああ分かった。」

桜魔は素直に頷くと店の奥へと入っていった。

桜魔がいなくなったのを見てから魔女はまだその場に残っているシアンに問いかけた。

「何であんな奴と旅を始めた？世界中から捨てられた惨めさに同情したのかい。…それとも」

「まさか。私はそんな偽善者紛いなことしませんよ。…ただ彼のことをいいなあ〜と思うと一緒に旅してるだけです。」

魔女の言葉を遮るようにシアンは笑顔を張り付け言った。

魔女はその表情を見てまた小さくため息をついた。

「その言葉：嘘ではないようだね。真実でもないようだけど…まあ今の回答はそれで許してやるう。」

「貴女に許されなくても別に構いませんよ。」

シアンは笑顔のままそう言つと自分もまた店の奥に入っていった。

「…それは嘘だね。ずっと許してもらいたいくせに。」

その言葉はきつとシアンに届いただろう。

しかしシアンは聞こえていないかのように振り返らず歩いていった。

「前途多難…だねえ。」

魔女は本日二度目のため息をもらした。

第十話 表と裏の差（後書き）

距離感が分からなかったので適当な数字でいれています…
なんか長かったり短かったりしたらあとで直しておきます（分かっ
たら）

第十一話 逃走劇

「ほら、上脱ぎな。」

「は？」

「だから、上半身だけでいいから裸になれつつってんだよ。」

「いやいやいや！え…だってシアンもいるし…」

「なんならあたしが赤ん坊みたいに上から下まで全部脱がしてやる
うか？」

「遠慮させて頂きます。」

桜魔はシアンが赤面しながら見てるなか、渋渋と服を脱いだ。

本来の自分の身体ではないがやはり見られるとなると恥ずかしい。

あまり筋肉のついてない白い肌を見て魔女がいやらしく笑い、その
肌に爪でつつと触れた。

「いやあ、もう少し年がたってたらもつと良かったろうに…子供の
身体じゃないか。残念だねえ。」

「…変態。」

桜魔は頬を赤く染めて呟きそれを聴いた魔女は大笑いしていた。

「レイシャルさん早くして下さい。」

それを見かねたのかシアンが魔女を咎める。

その頬は少し赤かった。

「あつはっは…すまないねえ。じゃ、あんたそこに真っ直ぐ立ちな。」

魔女は十分笑い終えたのか桜魔に指示を出す。

言われた通りに魔女が指差した方、部屋の中央にある魔法陣の真ん中に立った。

それを見て魔女が手を桜魔の胸の辺りにくるように手を翳した。すると桜魔の立っている魔法陣が光だした。

「うわっ……」

桜魔が驚いて魔女を見ると何か呪文のようなものを囁いていた。地面の光は様々な色に変化していく。

赤青黄色紫白黒桃色水色

輝きが増したかと思うとそれはほんの一瞬の出来事で瞬きをまばたしたあとは光はなくなっていた。

「何か思ってたよりつまらんな。」

身体を触ってみたがとくに先ほどと変わった感じはない。

「フン、見かけ倒しな魔法なんざろくなもんじゃないよ。」

桜魔がつまらなさそうに言う。魔女は鼻を鳴らして言った。

「さ、魔法はかけおわった。とっとと行きな」と言いたいところだが少しばかりお節介をやってやる。飯を作ってやるから待ってな。

「

魔女はそう言う。とまた店の方へと行ってしまった。

「あの人は意外とお優しいんですよ。身体に変化はありませんか？」

「いやまったく。お前はかけてもらわなくて良かったのか？」

近づいてきたシアンに桜魔は服を着直しながら問いかけた。

シアンは桜魔をあまり視界に入れないようにとずっと店の方を見ている。

「私は自分でかけられますから。でも桜魔の分ともなるときつくて……」

「ふーんそうかあ。」

「はい。それより桜魔、これから昼食をとったら今日は宿に泊ま

りましょう。私が買い物をしてきますので桜魔はバレないように隠れて待つててください。」

桜魔が着替え終わったのを見計らいシアンがやっと桜魔に向き直った。

「防具とかはどうするんだ？サイズとか…」

「あ…スリーサイズは知ってますが重さとかデザインとかの問題がありますね…。でも顔を試着時に見られてしまったら困りますし…」シアンが唸り声を上げた。

「あー…んなら別に魔法こただけでもいいぞ？防具とか重いし邪魔なだけじゃないか。だったらいらねえ。」

「そうですか？でも…うーん」

それが桜魔なりの精一杯の気遣いだったのだがシアンは納得がないのかまだ唸っている。

旅を初めて二日目になるが桜魔はまだシアンの性格も目的もつかめていなかった。

彼女の素性、況してや本名も知らない。

自分を助けてくれた優しい一面もあれば冷めた一面もあった。

しかしそれよりも何より恐ろしいのはあの張り付けられた笑顔だった。

完璧なまでに仕上げられた作り笑い。

それは今まで自分が見てきた作り笑いの中でも一番だった。

大臣や部下たちが作っていた笑いよりも自然なもので自分でもよく気付いたなと思ったくらいだ。

日ごろ毎日見ていた部下たちの態度のせいか嘘やそうだったものには敏感になっているために気付けたのだろう。

しかし桜魔はそのことも含めシアンに一切の詮索を入れようとはしなかった。

深く詮索してしまい今後の関係に亀裂が入ることを恐れあえて何も聞かずにいた。

自分は嫌われることが怖くて何も聞けずにいる。

何せ彼女がこの世界で唯一勇者に優しくしてくれるから。

それが彼女の利益のためであり嘘偽りの上っ面だけのことであったとしても、だ。

所詮本物の優しさや愛なんてものはそう簡単に手に入るものではない。

と桜魔は幼少期から考え育ってきた。

しかし、そう割り切っている桜魔はそれでも理解しがたいことがあった。

何故シアンはこんな危ない旅についてくるのだろう。

世界中から嫌われ退け者にされ魔王に目をつけられた元勇者に。

自分がかつて人間を殺してきたのに。

その理由は自由になりたかったからの一言では片付けられないだろう。

自分のとなりにいるだけで命の危険が伴う旅に彼女はついてきてくれている。

「じゃあこの街は物価も高いですし防具のことは後々考えることにしましょう。」

「え…あ、ああそうだな。」

「…私も何か手伝ってきますね。切るだけなら私にもできますし。」
シアンは恥ずかしそうにはにかんで身を翻し店のほうへ走って行った。

一人取り残された桜魔は小さくため息をついて宙を仰いだ。

「結局何も聞けなかったな。…それに、まだ一度も礼も言えていな

い。ダメダメだなあ」

桜魔はそんな自分を自嘲した。

笑うしかないと思った。

「お前たちこの後はどうするつもりなんだい？」

「今日はこの街の宿に泊まって翌日からまた広野を歩いてディセラの町を目指します。あそこのほうが人は少ないですが…まあある程度の品は揃ってるでしょうから。桜魔もそれでいいですよね？」

「おふっ！」

桜魔は久しぶりに食べた普通の食事を夢中に頬張っていた。

最近ジャガイモやサンドウィッチなどの粗食なものばかりだったので目の前に置かれた肉や米に感動した。

口いっぱい食べ物をつ込み、頬はリスのように膨れ上がっていた。

それを見てシアンは恥ずかしそうに頬を染め俯く。

「桜魔：はしたないです。」

「まあいいじゃないか。不味そうに食われるよりは嬉しそうに汚く食べられるほうがね。…ほら、あんたも食べな。」

シアンとは逆に魔女は真昼間から酒を飲みながら嬉しそうに笑っている。

いただきますと小さく呟くとシアンも食事を始めた。

二人が食べているのを酒を飲みながら見ていた魔女はある程度二人が食べたのを見計らい話を切り出した。

「あんたらディセラの町に行く前にポータル村に行く気はないかい？」

「ポータルですか？確かにあそこはディセラの町とこの街の間にあ

りますが…行っても買うものはありませんからね。食べ物は足りて
ますし、多すぎても腐っちゃいますしね。」

シアンが箸を止め魔女の話を聞く体勢に入る。

桜魔もそれを見て一度食べるのを止めた。

そんな二人を見て魔女は近くの棚から小さな箱を取り出し二人の前
に置いた。

「ちょっと頼まれごとをしてくれないかね？これをポータル村の力
インって男に渡してほしいんだ。報酬は…そうだな、デイセラの町
に行くまで馬車を貸してやろう。どうだい、いい話だろう？」

魔女は目を細くして笑った。

シアンはその箱と魔女を見て笑うと頷いた。

「私はいいですよ、どうせ途中ですし。食事のお礼もありますし。

桜魔はどうですか？」

桜魔もその意見に賛同するように頷く。

「俺も別にかまわない。こんな飯も食わせてもらっただしな。」

シアンは満足そうに桜魔を見て頷くと目の前の箱を自分の狭間に入
れた。

「そんな優しいあんたらにもう一ついいものを見せてやろう。」

そう言つて魔女は近くの壁に貼つてあつた紙をベリツと剥がし二人
の前に置いた。

それは桜魔には読むのに時間がかかる人間の文字と桜魔の写真がで
かでかとあつた。

紙を見た瞬間シアンの顔が歪んだのできつとヤバイものなのだろう
と直感的に悟る。

桜魔がそれが何かを尋ねようとしたがそれよりもシアンが椅子から
立ち上がる方が速かった。

「…馬車はどこに停めてありますか？」

「あんたらが入ってきた門のすぐ前さ。」

「じゃあお借りします。…行きましよう桜魔。」

シアンは険しい顔で支度を始めた。

何だか分からないが桜魔も立ち上がりシアンと魔女を交互に見つめる。

魔女はその様子を可笑しそうに笑った後ひらひらと手を振った。

「馬車はそこらへんに置いときゃ消えるからほっときな。じゃ、行つてらっしゃい。」

「失礼します。桜魔、ここをでたら走りますよ。」

「あ…ああ。」

桜魔はとりあえず頷き、シアンの後をついて行く。

シアンが店の外に出た次の瞬間いきなり走りだした。

「え！？ちよつまっ…！」

桜魔も慌てて走りだす。魔法のおかげか足が速くなっている気がする。

「桜魔！！体勢を低くして走ってください！！！」

シアンが走りながらそう言い自ら体勢を低くする。

桜魔もそれにつられて体勢を低くするとちよつど頭のすぐ上を何かが高速で通り過ぎた。

先ほどまで静かだった裏道に大勢の足音が響く。

道の横に建てられたマンションやアパートの窓から黒い服を着た『いかにも自分悪です』を強調しているような顔の男たちが拳銃を構えてこちらに向けている。

「なななななあ！！？あれがマフィアとかそこらへんの者か！！！」

桜魔が驚愕の声を上げる中シアンは至って冷静な声で返事をする。

「はい。…どうやら貴方はマフィア達の間で賞金首として出されているようですよ。しかも結構な高額で。これからはそんな方たちとも鬼ごっこをしていかなきゃならないようですね。」

「まじかよおおおっつ！！！！！」

泣きごとを言いながらも走ることは止めず、次々と繰り出される銃

弾を避けていく。

前よりも身体の大きさが小さくなったおかげか相手が下手なおかけか全然あたらずにすんだ。

「桜魔は私が止まっても走り続けてください。先ほどの門までは行けますよね？すぐに追いつきます。」

「は…？覚えてない…つか何言ってる」

シアンの言ったことが理解できず聞き返そうとするとシアンがいきなりナイフを取り出し、一気に加速した。

桜魔はいきなりのそのペースについて行けず曲がり角でシアンの姿を見失った。

「まじかよっ…！！速すぎっ」

慌てて曲がり角を曲がると一番初めに目に飛び込んできたのは鮮やかな赤だった。

シアンが振るったナイフの後を辿るように真っ赤な血が宙を舞った。それと同時に一人の男がその場に崩れ落ちた。その男のほかにも数人の男が地面に倒れている。

皆、すでに息をしていない。

シアンは確実に急所を狙ってナイフを振るっていたのだろう。

「桜魔が遅いからもう終わりました。行きましよう。」

シアンはそうとだけ言うともまた走り始めた。とても静かな声だった。

道の端にはあの少年が前と変わらず座っていた。

しかしその顔には恐怖の色と血が付いていて、目の前のすでに肉片と化した男たちをあの翡翠色の瞳で見つめていた。

桜魔はその少年の頭を軽く撫でるとまたシアンの後を追って走り出した。

後ろから黒服の男たちの足音が近づいてくる。

前から来た敵をシアンが鮮やかな手つきで殺していくのを見ながら桜魔は走り続けた。

久しぶりに見た血の色は桜魔の瞳にはあまり綺麗に映らなかった。むしろ不快にさえ思えて桜魔は眉を顰めた。

この光景を見ていると吐き気さえおぼえた。

なのであの青い空を見て走ろうと空を見上げるとそこは灰色の分厚い雨雲に覆われていて、青い空はなかった。

諦めて前を見た瞬間にまた赤色が飛び込む。

その赤い血が自分の顔に付着した。

拭ったのにまだ付いている感じがして気持ち悪い。

ゾワゾワと背中を何かが這いまわっているような感覚がする。

気持ち悪い

なので食べ物のことを思い浮かべることにした。

あの美味しかった肉や魚を思い出して走った。

目の前に映る映像から目を逸らすように。

それはさながら現実からの逃走

第十二話 青に勝る赤

「ほんと…一事はどうなることかと思いましたよ。」

「ああ…何とか馬車まで行けたが…ついてきてないのか?」

「追ってきてはないようです。まあ彼らもあの街が縄張り（テリトリー）ですからね。」

「ならいいんだが…」

「一安心です。あ、雨…」

馬車の外を見ると大粒の雨が灰色の空から降り始めていた。

あまり大きくない車内で向かい合って座り、シアンは窓の外に目を奪われたままだった。

桜魔もまだ鳴りやまない心臓の音を落ち着かせようと静かに息をととのえた。

車内は暫くの間、馬が地面を蹴る音と雨音だけが響いていた。

心臓の音が止まり始めると自然と意識は外に向いた。ずっと広野の先に見える林の景色。

あまり変化のない画だがそれを見て心が安らいだ。

先ほどの赤い血が記憶から剥がれ落ちていく。

「あ、そういえばこの馬車は影馬車といってレイシャルさんの魔法によって生み出された影でできた下部しほくが動かしているんですよ。魔界にはそういう魔法はあったんですか?」

シアンが思い出したように顔を桜魔に向け言った。

心は窓の外にあったので視線はそのまま返事を返す。

「あ…あー、あったんじゃないか？…たぶん。」

「そうですかあ。まあ悪魔には羽があるから空も飛べますからいいですよね。」

…空を自由に飛べるっていいですね。」

「ああ。気持ちいい…」

シアンは薄くほほ笑むともう一度いいなあと呟いた。

どこか寂しそうな言い方に、窓のほうからシアンに目を向けると、そこにはあの綺麗な青よりも目立つ赤が見えた。それを見て自然と顔が引きつるのが分かった。

「…着替えないのか？」

先ほど返事をしたときよりも声のトーンが低くなっていた。

「え？…ああ、これですか。」

桜魔の視線が自分の服に向いているのに気付きシアンは自分の胸元を引っ張り苦笑する。

こびり付いた血は所々黒く変色しはじめていて車内に異臭を放っている。

「着替えたいのは山山ですが馬車の中じゃ、ね。外も雨が降ってきてしまったし。」

「…そうか。」

桜魔が苦い顔でシアンから視線を逸らす。

その顔を見てシアンの表情も少し曇った。

少し考える仕草をしてからもう一度桜魔に向き直った。

「やっぱり着替えます。このままじゃ気持ち悪いし、それに桜魔もあまり血がお好きではないようですし…」。

まあ血が好きな人なんてそういないとは思いますが…。桜魔はちよつとあつちを向いててください。」

「え！？ここで着替えるのか！ちよつま」

桜魔の答えを聞かずシアンが服を脱ぎだそうとしたので桜魔は慌てて後ろを向いた。

「すみません。」

「い、いや！…速くしろよ…」

「はい。」

少しの会話のあと車内には服の擦れ合う音が響いた。

それだけでも桜魔は十分恥ずかしくて治まったはずの心臓の雑音がまた速くなった。

たぶん顔も赤くなっているだろう。

パサツという服が床に落ちる音が聞こえるたびに心拍数が上がっていく。

「…お待たせしました。もうこつち向いても平気ですよ。」
恐ろしく長い時間が過ぎた気がした。

シアンがそう言っても中々向き直れずにいたが恐る恐る向き直ってみるとそこにはいつもの笑顔のシアンがいた。

拭き取ったのか身体に付いていた血もまったくなかった。

服はあの制服のままだが血はついていなかった。

「あれ…服の血、落としたのか？」

「まさか。こんな短時間じゃ血は落とせませんよ。もう一着持っていた予備の制服を着たんです。この国で支給される制服は性能がいいので愛着してるんですよ。」

「へえ〜そうなのか。」

「はい。…あの、桜魔に一つ質問をしてもよろしいですか？」
笑顔を一瞬に引込めてシアンは真剣な顔つきで言った。
桜魔も緩んでいた顔を引き締めて頷く。

「あの…桜魔は人を、若しくは悪魔を殺したことはありませんか？」
怖ず怖ずと遠慮がちにしてきた質問は大体予想していたものと同じ
だった。

血を見てあんな反応をしていたらそりゃそう思われるのが当たり前
だろう。

「いや、俺だつて元は魔王。多くの人間をこの手で殺してきた。
…だがこの身体になつてから何故か血を見るのが嫌になつた。」

「そうだつたんですか…。その身体自体が血に拒否反応でも起して
るんですかね？」

「まあそれだつたらこれから治していけばいいだろう。」

「そうですね。…ああよかった。桜魔が人を殺せなかつたらこの先
どうなることかと思いましたよ。」

緊張の糸が一気に切れてシアンがはあと安堵のため息をもらした。

「まあ最初のうちは多少抵抗があるかもしれないがな。…それより次
に行くえつと…」

ポータルだつたか？その村まで馬車でどれくらいだ？」

「歩いて三日くらいですから…二日はかかります。でも最初に決め
てた行き方とは変わってしまったからアレですね。勇者が辿つてき
た道とは逆の方からスタートになつてしまいました。また組み直さ
なきゃですう。」

「ははっ。まあ俺に出来ることがあつたら手伝つよ。」

「助かります。」

肩をおとすシアンを苦笑して桜魔はまた窓の外に視線を向けた。雨は先ほどよりも激しく窓を打ちつけている。そこでふと思いついたことがあった。シアンは資料を見ながら唸っている。

「なあお前の属性って何だ？…あ、言いたくなかったらいいんだが。」
「まずい質問だったらいけないとあとにつけたす。顔を上げたシアンは不思議そうな顔をしていた。」

「あれ？そういえばまだ言ってますでしたっけ？私の属性は水です。」

でも桜魔が一端に戦えるようになるまでは前衛に出てナイフで戦います。魔法は呪文を唱えなきゃ強いのは使えませんから時間がかかるんです。それに私、ナイフで戦うのが得意なんです。」

「そりゃ頼もしいな。…多分この身体に馴れるまでは上手く戦えないだろう。」

「まかせてください！ちゃんと桜魔のこと守ってあげますから。」
意地の悪い笑みを浮かべてシアンが言う。
桜魔はそれに苦笑いで返した。

「あ、さつき調べたんですけどポータルには前の勇者は行ってないようですよ。あと次に行くディセラの町には立ち寄っているようです。」

「そうか。ならポータルにはあまり長居しないで次に行くか。」

「はい。何か身体を元に戻す手懸かりが見つかるといいですね。」

「ああ。」

「でもポータルまでは随分と時間がありますね…」
そこまで言うとシアンは大きな欠伸を一つした。

それが移ったのか桜魔も欠伸をした。

「疲れちゃいましたし…寝ますか。」

「だな。」

シアンの意見に賛同し二人は暫く眠ることにした。

…のだがまた重大な事実が発覚した。

「買い物に行ってる暇がなかったので毛布が一枚しかありません…」

「あ、じゃあシアンだけで「なので一緒に寝ましょう。」

シアンが桜魔の言葉を遮り、桜魔の隣に座った。

ピタリとくつついて素早く毛布を掛けた。

慌てて逃げようと立ち上がるが腕を引つ張られてまた座り直し。

「今度は逃がしませんよ。こんな雨が降って車内の気温も下がってるのに何も掛けずに寝たら風邪を引いてしまいますからね。おやすみなさい、桜魔。」

それだけ言うとシアンは桜魔の腕を掴んだまま瞼を閉じた。

「お、おいっ…」

狭いスペースで動くことも出来ず仕方なく抵抗を止めることにした。少しすると可愛らしい寝息が聴こえ始めてきた。

小さくため息をもらす。

「それでいいんです。」

「…起きてんのかよ。」

口元を緩め、目は瞑ったままシアンが呟いた。

それを横目で睨み付けるとまた寝息が聴こえた。

もう一度ため息をついた。

シアンの頭がだんだんと斜めになり桜魔の肩に寄り掛かる形になってしまった。

こんなに近くにいると自分の心音が聴こえてるんじゃないかと不安

になる。

寝息をたてているシアンの青い髪と旋毛が見える。
寝顔はとても幸せそうだ。

近くで見ると綺麗な顔立ちをしているのが分かった。

長い睫毛に少し紅潮した頬、淡い桃色の艶のある唇、滑らかな自分よりも白い肌。

黒い眼帯をしているためその白さが際立っている。

その綺麗な顔を見ていると頬に熱が集まり出していった。

逸らそうと思っても何故か釘付けにされたように離れない。

先ほどよりも心拍数が速くなっていく。

その綺麗な睫毛がゆっくりと動き、その奥にあるあの硝子のような青い瞳が自分を捉えた。

「そんなに見られちゃ寝にくいです。」

「……………うわっ！！？起きてたのかよ！」

「反応遅すぎです。耳元で大きな声をあげないでくださいよう。」
見とれていたため反応が遅れてしまい慌てて目を逸らした。

「わ、悪いっ。」

「だから耳元で大きな声を出さないで下さいって!!」
ほんとに眠いのか不機嫌そうな声で咎めた後また瞼を下ろした。

見るなどと言われると余計に見たくなる。

が、また怒られるのはごめんなので窓の外に視線を向けた。

まだ心臓は速く動いているが少しずつ通常通りに戻りだした。

触れあっている右側の温もりが心地よくて次第に眠りの世界に引きずり込まれていく。

微睡みの中で見たのはいつか見た夢の続きだった

『君はこの世界が誰かに作られたものだと思ったことはあるかな?』

第十二話 青に勝る赤（後書き）

元魔王の性格が普通の人間のようにだ…

第十三話 届け物

『まず最初に断っておこう、これは夢だ。君はボクのことを知ってるよね？前に一度会ってるから。』

『…たぶんな。でもお前のことを覚えてない。』

俺がそう言つとそいつは それでいいんだよ と笑つた。

辺りは一面真っ白で俺とそいつだけがその空間の中で異常なくらい黒く、ハッキリと存在していた。

『何故お前はこの世界が誰かに作られたものだという？』

『それはボクが神様だからだよ？…嘘だけど。』

『下らん嘘は吐くな。ちゃんと質問に答えろ…』

俺が咎めるとそいつは小さく笑つた。

目を細めて口の端をつりあげた笑い方はこちらを馬鹿にしているような感じがしてならない。

正直言つと気色悪い。

『だつて出来すぎてない？まるで御伽噺を読んでいるように……退屈に進行していつてる。』

『何がだよ？』

核心を隠すようなそいつの話し方はイラつく。

ずっと笑顔のままなのも本当に気色悪い。

『この世界が、だよ。全部彼の思い描くままに進んで行つてる。君は、君たちは疑問を抱かないのかな？』

『意味が分かん。』

俺がそう言つとそいつはまた それでいいんだよ と笑つた。

「君たちはきつとこれから先も疑問を抱かずに生きていくんだらうね。この世界の理から外れなければ。」

「何が言いたいんだよ？」

「まあボクが言いたいこと、といえは選択肢以外の答えもあつてもいいんじゃないかなつてこと。」

「もつと意味が分からんわっ!!！」

「世界という大きな機械を動かす為に必要なのがボクら生物歯車であり、それが一つや二つ無くなつたとしても支障はないんだ。また新しい生物歯車が生まれてその開いた穴を埋めるからね。だからボクがこの世界から消えたつて世界は別に気にしないの。その周りの生物たちの間で波紋が出来て、やがて掠れていく…。たとえそれが重要な役割を持つ存在だとしても神様創造主にとつてはただの物だからね。世界はボクたちが居なくても…。それでも廻り続ける。」

そいつは酷く自虐的な笑みをこぼしてそう言つた。
俺は何も言わなかつた。

「あははっ…。じゃあ帰ろうか？現実お話しの世界へ。」

「あ、おはようございます。よく寝てましたね。」

目覚めるとそこには窓から差し込む朝日に綺麗な青色の髪を輝かせほほ笑むシアンがいた。

「…世界はそれでも廻り続ける？」

「え？どうかしましたか？」

「…え？あ、そうかここは城じゃないのか。」
やっと覚醒し始めた頭で今の現状を思い出した。
そうだここは馬車の中だ。

「あの…今の言葉の意味は？」

「言葉？なんだそれ？」

質問に質問で返されてシアンは呆れたようにため息をついた。

「寢言ですか。いきなり言い出したから何かとと思いましたよ…夢でも見たんですか？」

「夢…うん、何かをみた。」

しかしその内容が思い出せない。

どんなものだったのだろう。

「なんか…黒い……う…ん……あああああっ覚えとらんわ…！」

「別に思い出さなくてもいいんじゃないんですか？」

「それは…」

そうなのだがやはり気になる。

何か大切なものな気がする。

「それより桜魔！もう着きますよ。」

「もうそんなに経ったのか!？」

「よく寝てましたからね。お腹も空いてるでしょうから村で何か食べましょう。」

「ああ。」

窓の外を見ると雨雲は何処かに行ってしまう雲一つない快晴が広がっていた。

窓を開けると心地の良い風が肌にあたり車内の湿気を含む淀んだ空気を掻き出した。

桜魔はその窓から身を乗り出して馬車が向かう先を見た。

あと数百メートル先に目的の村がある。

「ぼ…たる。ポータルだ！」

木で作られた門に人間の文字でポータルと彫られているので読みづらかった。

「桜魔、危ないので戻ってきてくださいっ。」

「うわあっ!？」

急に体を引つ張られまた車内に逆戻りになる。

頭を上げると眉に皺をよせたシアンの顔がすぐ目の前にあった。

「もう着くんですから大人しくしてて下さい！」

「わかった…」

渋渋と承諾し、馬車が止まるまで桜魔は大人しく窓から身を乗り出さずに外の景色を眺めた。

「あーっ！久しぶりの外はいいなあ!!」

「そうですねえ。」

そう言つて桜魔は伸びをしてシアンはその新鮮な空気を肺に目一杯取り込み吐き出した。

久しぶりに降り立った大地とその解放間に浸る二人の前に村の方から誰かが歩いてきた。

「あんたらが紅蓮の魔女から俺に届け物してくれる奴らだろ？」

二十代後半から三十代前半くらいの男だ。

癖のある金髪を上のはうで結わえていて顎の周りにある髭も同じ色をしている。

少し皺のよつた垂れ気味の緑の瞳が二人を見据えた。

その男にシアンが一步步み寄る。

「はい。レイシャルさんから預かり物をしています。貴方はカインさんですか？」

「そうだ、俺がカインだよ。アンタらは？」

カインと名乗った男はシアンに握手を求めるように右手を差し出してきた。

シアンはその問いに答えながらカインの手を取った。

「私は：シアンです。彼は桜魔。よろしくお願ひします。」

「：こちらこそよろしく。」

その答えに一瞬困惑の色が見えたがそれはすぐに消え、また人懐っこい笑顔に戻る。

シアンの手を離すと今度は桜魔に握手を求めてきた。

「桜魔もよろしくな！」

差し出された手を見ても桜魔はその手を取ろうとはしなかった。

カインの腕を凝視し、その顔と腕を交互に見た。

カインの腕には刃物で切りつけた無数の痕が生々しく残っていた。

その様子を見てシアンが透かさず桜魔に耳打ちする。

「桜魔、これは人間界の礼儀のようなものです。出会った人には名を名乗り握手をするんです。

これじゃあ失礼ですよ！」

「いやいやお嬢ちゃん、別に構わないよ。コイツはそういう奴ってことだ！」

最後の言葉だけ聴こえたのかカインはでかい笑い声をあげ、桜魔の頭をガシガシと撫でた。

それが嫌で堪らずその手を払い除け、睨みつける。

「触るな：っ」

「桜魔っ！！」

シアンの焦ったような声が聞こえたが構わず睨みつけ、フンと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

カインはそれを苦笑するだけで何も言わなかった。

「ごめんなさい…彼はちよつと今人間不信に陥っていて。」

「な…！？別にそういうわけじゃ…」

桜魔が慌てて弁解しようとする。シアンはキツと桜魔を睨みつける。

黙ってる…ということだろうか。

「気にすんなって。…お前ら腹減ってるだろ？俺の家で飯食ってけ」
カインは気に触った様子もなく鼻歌を歌いながら村のほうへと歩いて行く。

シアンはその背中を見ながら安堵のため息を漏らした。

「そんなに人間かれが嫌いですか？貴方には人間界のことを色々教えなくちゃいけませんね…」

「別に…嫌いなわけじゃないが、ただ…いけ好かない奴だ…」

「いけ好かないって…」

しかめっ面のまま桜魔が言うとシアンは呆れたような声を漏らした。それから何も言わずカインの後を追って歩き出した。

村は畑や家畜がたくさんおり、ディセラの街や城下町とは違い人は少ないがのどかで自然が多い村だった。

一言でいえば田舎だ。

「あ、おっちゃん帰ってきたー」

「俺の母ちゃんが呼んでたぞっ！…ん？そいつら…」
村に入ると三人の子供が寄ってきた。

子供たちはシアンと桜魔を上から下へと視線を向けてジロジロと見てくる。

それをカインが子供たちの頭に手をのせ、撫でることとで止めさせた。

「お前の母ちゃんの所には後で行く。ほら、遊んできなさいー！」

咎めるように少し強めの口調で言うと子供たちはべっと下を出してカインの腕を叩く。

「おっちゃんのかせにうるせー!!」

「おい行こーぜ!」

子供たちは桜魔にもう一度視線を向けた後、走り去っていった。

カインはそれを苦笑いで見送った。

シアンはどう声をかけていいのかわからず困ったような顔をしている。

桜魔は子供たちに馬鹿にされるカインを鼻で笑ったらシアンに凄い形相で睨まれたので黙った。

本人は至って気にした様子はないがシアンがそれを心配そうに見つめるのでカインは惨めな気分だった。

「あの魔女から渡すもの渡さないのか?」

「あ、そうだ!カインさん…えっとこれを」

思い出したように手を叩くとシアンはカインにあの箱を差し出した。

「ああそうだそうだ!ありがとな。ぐへへ…」

受け取った箱を見てにやけるカイン。

気持ち悪い…と桜魔は瞬間的に思った。

シアンの笑顔が微妙にひきつる。

「…中身は何なんだ?」

話しかけるのは腰が引けたが中身は気になるので桜魔はカインに問いかけた。

カインは嬉しそうに笑いながら箱を開け、何かを取り出した。

「これだよっ。」

「…何だ?」

それは赤色をした小さな鉄の塊のようなもの。

それ以外にも箱の中には色とりどりの鉄の塊が入っている。

「これだけじゃ分らないかあ。じゃあこれも！」

カインはそう言うのと腰につけていた銃を二人に見せた。

銃を取り出したということはその鉄の塊は銃弾なのだろう。

その銃弾を幾つか銃に込める。

カインが銃をセットした瞬間にシアンがすぐに反撃できるように体勢をととのえた。

桜魔も体を強ばらせる。

しかしカインは二人が予想していたのとは違う方向に銃口を向けた。

自分の頭に。

「な……にを」

シアンが驚愕の声を上げ、困惑したようにカインを見上げた。

桜魔も驚きのあまり開いた口が閉まらない。

カインはそんな二人に微笑を浮かべ引き金を引いた。

パンツという意外にも軽い銃声が鳴った。

その音とほぼ同時にカインの頭から赤い液体が飛び散り、二人の顔や服に付いた。

目の前でカインの体が後ろに大きく仰け反り、倒れた。

銃弾は頭を貫通していて、その傷口から炎が燃え上がりカインの身体を燃やしていく。

頭の回りが追い付き始め、やっと現状が掴めたと思えばその場に悲鳴が響く。

「あ、ああ、うあああああああつっ！……!?」

桜魔はその悲鳴が自分の喉から発せられているものと気づくのに

は随分と時間が掛かった。
しかも何故こんなに自分が取り乱しているのか理解できない。
足に急に力が入らなくなりその場に崩れ落ちた。
シアンは桜魔ほど取り乱している様子は見えないが驚きを隠しきれないというようにただその燃えている死体を眺めていた。

「何かあったんかあ？」

「すっげー声聴こえたんだけど…」

そこに先ほどいた子供たちがやってきた。

シアンは慌ててその死体を隠すように子供たちの前に立った。

「見ちゃダメです！」

「え！何々？何があんのっ!？」

「俺にも見せてー!!」「ちよっ…待って」

しかし子供たちはその言葉で好奇心をくすぐられたよつでシアンを押し退けてその死体を見にかかるとスルリとシアンの脇から滑り込みシアンより前に出る。

それを見た瞬間子供たちの動きがピタリと止まった。

その様子を見てシアンは息を呑んだ。

子供たちの次の反応を待つ。

「なんだおっちゃんまた死んだの？」

それは子供たちにとって特に衝撃を受けるようなことではなかった。

「これはこの村で日常茶飯事に起ることだから。」

第十三話 届け物（後書き）

最初の件はあまり意味はないです。

第十四話 不老不死

「あんたらあの男のこと知らないでいきなり来てあんなもん見ちま
ったのか。災難だねえ…しかしアイツにも困ったもんだ。」

「…いえ、あの…事情を知らないであんな物を届けた私たちにも非
はある…と思います。」

「いや完璧あの魔女が仕組んだことだろうな。俺たちに非はない…」
「桜魔っ！！」

シアンは桜魔を睨みつけた後ため息をついた。

二人は今、ポータルの村の村長の家にいる。

何故そうなったのかというとそれは遡^{さかのぼ}ること数十分前。

カインの死体を茫然と見ていた二人の前に偶然通りかかったこの村
の村長が事情を察して二人を自宅に招いたのだ。

村長の話によるとカインはあと数十分程したらひょっこり現れるら
しい。

信じられる話ではないが気を落ち着かせるためにとりあえずは村長
の家で待機という形をとることにした。

まだ青い顔のままの桜魔は何かを考えるとあの光景がフラッシュバ
ックして思い出してしまうので、何も考えずに窓の外の青空を眺め
た。

頭を回せられるくらいには気が落ち着いてきたシアンは村長に先ほ
ど気になったことを尋ねた。

「あの…村長さん。カインさんが現われるってどういことですか？それに子供たちが言っていた『また死んだ』って言葉…」

「ああ、アレはこの村じゃよくある光景だからね。子供たちは慣れちまったんだよね。」

「慣れていいモンじゃないとは思うけど。」

「はあ…。それが理解できないんですよ…。それじゃあまるで彼は何度も死んでる、ということになりませんか？」

「だから、その言葉通りなんだって！あの男は…」

「うわあああああああつっ！！？」

村長の言葉を遮るように桜魔が情けない悲鳴をあげ、椅子から落ちた。

「どうしたんですか桜魔！？まさか魔物が…」

その声を聞いてシアンが椅子から勢いよく立ちあがると杖を取り出し体勢を構える。

村長は魔物という言葉ワードを聞いてすぐに家の奥に逃げていった。

シアンが桜魔に近づきもう一度確認するように桜魔に尋ねる。

「桜魔、魔物はどこにいますか？」

しかし桜魔は首を横に振りながら窓の外を指さした。

「…？何ですか？」

訳が分からないシアンは取りあえず桜魔の指先が示す方向に目をやる。

しかし窓の外には何もいなかった。

「…何もいないじゃないですか。オバケでも見たんですか…桜魔、話の腰を折るのはやめて下さい。」

シアンは桜魔に聴こえるように大きなため息をつくと杖をしまい、また椅子に座りなおした。

村長が出してくれた紅茶を一口飲み小さく美味しいと呟く。

村長はまだ部屋の奥からこちらを警戒して見ている。情けなく床に座り込む桜魔は家の玄関に目を向けた。

その玄関の扉がゆっくりと開く。

そこには幽霊オバケともいえる存在がいた。

「村長さ〜ん。何か拭くもの貸して下さいい…」

血まみれの男、カインは情けない声で部屋の奥にいる村長に話しかけた。

その男にシアンが悲鳴を上げて攻撃を仕掛けたのはほぼ同時だった。

「いやあごめんね。アンタらてつきり紅蓮の魔女から事情を聞いているのかと思つて…。いきなりで驚かせちゃつたかな？」

村長から借りたタオルで頭や身体に付着した血を拭いながらカインはへらへらと笑った。

最初にこの家に現われた時より傷の数が増えているのはシアンのナイフのせいだ。

先ほどの遅たくましさはどこへいったのか今はとても弱弱しく見える。

これなら子供たちに舐められているのにも納得がいく。

いつも笑顔を絶やさないシアンでもこれには驚いたようで二人して青い顔でカインを見ていた。

村長は買物があると出かけてしまい、今この家には三人しかいず、気まずい空気が流れている。

先に口火を切ったのはカインのほうだった。

「えつと…改めて自己紹介しようか。俺はカイン。こつ見えてもう百…二、三十は超えている。」

何故か死んでも死ねない不老不死…かな？」

その言葉にシアンが震えだす。

目をカッと見開き勢いよく椅子から立ち上がり机を叩く。

「あ、有り得ない！！不老不死なんているわけがないですっ…信じられません。」

最後の方は自信がなくなりか細い声へと変わっていき、また椅子に崩れるように座った。

ティーカップに入った紅茶が波紋をたてて机に少し零れる。

桜魔はその零れた紅茶を見た後、顔面蒼白なシアンに目を向ける。

シアンは頼れないと察した桜魔は嫌々ながらも意を決してカインを見る。

「貴様は何故不老不死になった？経緯いきわづらひを答えろ。」

「…信じるんですか？こんな現実味の無い話を…。私、幽霊とか非現実的なもの信じられないですよ…。」

先ほど叫んだことよってかなり精神を削られたシアンがジトツとした視線で桜魔を見上げた。

正確には信じられないのではなく、信じたくないのだろう。

桜魔はその様子にため息をついて反論を許さないように一気に言葉を吐きだした。

「信じる信じないの話ではないんだろ？この状況をどう受け止めるかが大切なんだってお前は言った。」

俺のいうことが信じられるならこの男も同じだ。話を聞いてみる価値はある。」

それは最初にシアンが桜魔に言った言葉だ。

その答えにシアンは苦い顔をして俯くと、暫くしてから小さく頷いた。

桜魔はそれを確認するとカインに向き直る。

カインは酷く驚いた顔をして桜魔のことを見つめていた。

「……?どうかしたのか?」

「えっ?!?!いや、何でもなし。少しお前の態度に驚いただけだ。」
「何故驚く?別におかしなことは言っていない。……と思う。」

「え……いやあの、前に会ったと……いや、さっき俺が死んだときは凄く……うん。脅えてたし?いきなり遅しく……、なったりで……」

「……いや、うん!まあそれより俺がこうなった経緯を話そうじゃないか!」

しどろもどろに答えながらカインは視線を泳がせた。

桜魔はそれを冷ややかな目で見ながらも何も言わずカインの次の言葉を待った。

それに気付きカインが一つ咳払いをして話始めた。

それは今から約百年前のこと。

俺が川でマグロを釣っていると上流からどんぶらこどんぶらこと大きな魚が流れてきました。

その魚を捕まえてみるとあら不思議!その魚は上半身が美しい女性の半漁人でした。傷だらけのその半漁人に一目惚れした俺はその子を家へ連れて帰り、幸と名付けて飼いました。

幸は最初は俺に脅えていたけれど時を重ねていくうちにだんだんと打ち解けてくれました。

言葉の通じない彼女と俺の間に愛というものが芽生えた瞬間でした
!!

俺たちは穏やかな日常を謳歌していた……そんなある日、

俺の元に水の国の王子がやってきてその半漁人を寄せせとやってきました。

もちろん俺は断固拒否したんだけどそいつが彼女の元の所有者で彼女を迎えにきたといった。

彼女をあんなに傷だらけにしたのがあいつらだと知ったとき俺は激怒したね。

だからこういつてやったのさ、

「てめえらに幸は渡さねえ！！とつとと帰りな青二才っ！！！」
つてな。

そしたら大爆笑されてそいつらは俺に向けて銃を突きつけた。

そいつが引き金を引いた。

その時は本当に殺られると思ったね。

だけどその瞬間、水槽にいた彼女が俺の前に飛び出てきたんだ。

何が起こったのか分からない俺の上に覆いかぶさった彼女の真っ赤な血が俺に降りかかった。

彼女は痛みに涙をこぼしながらそれでも俺を安心させようと笑っていた。

最期の時まで…

彼女を殺したやつらに俺は怒りをぶつけた。

でも人間が飛び道具に敵うわけもなく彼女の仇を打つことも出来ず呆気なく死んだ…

と思ったその次の瞬間！！

俺は生き返っていた！

その時のそいつらの顔っていつたら本当におかしかったなあ…
んで、そいつらは俺に向かって

「首を取ったのになんで生きてるんだ！」
つて聞いてきた。

俺のすぐ横には彼女の返り血と自分の血で赤く染まった俺の顔があった。

その時俺は思った…
自分の寝顔ってこんなだったんだ。って

「それが俺が不老不死になった時の状況だ。」

「つつこみたいところは山ほどあるがまあ全部突っ込んでたら限きりがない。貴様に幾つか質問をする。

それに真実だけ答える。いいな？」

「どんとこいつー!!」

呆れ気味に桜魔が言つとカインは親指を突き立てて言った。

その声にシアンがビクリと肩を揺らす。

「…あまり大きな声を出すな。こいつが脅えてるだろう。」

「えっ！シアンちゃんもしかして俺のこと嫌い？化け物だから嫌いになつたっ！?!？」

机から身を乗り出したカインは正面にいるシアンの顔を覗き込んだ。シアンがその顔を見て目を逸らすように顔を背け、椅子ごと一歩後ろへ後ずさつた。

「いえ！べ、べべ別にそんなことはありませんよ！！断じて！！カインさんはとっつてもいい方ですよ。初めて会った時から一瞬この世から消えた時までずっと！！！」

自分に言い聞かせるようにシアンはぎこちない笑顔で言う。

視線が様々なところに飛び、カインに視線を合わせようとはしない。

しかしカインは明らかにおかしいシアンの態度に疑問を持つことなく安堵のため息を漏らした。

「なんだあ。嫌われちゃったかと思つたよう。あ、良かったらお近づきの証しに俺の指を一本あげようか？死んだらまた生えてくるし、一本二本くらいなら平気だし…」

「いらないですっ！！！」

近くのペンたての中にあつた鋏で自分の指を切ろうとしているカインをすごい速さでシアンが制する。

高速で鋏を手から弾き飛ばし、その鋏は玄関の木製の扉に突き刺さった。

「そっ？まあ指を切るのも痛いからいやだしな。」

へらへらと情けない笑顔をしているカインに桜魔は聞こえないように小さな声で、

馬鹿だ

と呟いた。

第十四話 不老不死（後書き）

最近、受験勉強のため塾の時間が増えて投稿するのが遅くなっています。
いません。

塾の合間を見てこれからも更新していきます。

第十五話 質問

「貴様は何をしても死なないのか？」

「ああ撲殺銃殺毒殺絞殺刺殺斬殺：様々なやり方を試したんだけど、どれも駄目だね。」

「脳や心臓を破壊してもか？」

「一度だけ再起不能くらいに切り刻んで、磨り潰してバラバラの場所に捨ててきてもらったんだけどね：翌日土のなかで目が覚めたよ。」

「そうか…。そこまでするんだったら貴様は死にたいと思っているんだな？」

桜魔の質問にカインは諦めたような寂しげな笑顔をこぼした。

「…うん。俺は死にたい。」

「何故そう思う？」

「俺は今まで百数年の時を生きてきた。沢山の仲間も大切な人も思い出もできた。…だけど皆俺を残して消えていく。仲間が老いて死んでいくのを目の前で見ているだけなんて寂しいもんだよ。」

自分だけ違うんだ。…同じ世界に生きて、同じ線の上を歩いていた筈なのにいつの間にか俺だけその線の上から外れてた。俺は世界の理から外れた異端者、化け物に成り下がった。」

ここではない何処か遠く、自分の記憶の奥底を見るように虚空を見つめるカインの瞳には光がなかった。

人間は死ぬことを怖がるというが死ねないことにも恐怖を抱く。

魔王である桜魔でもその気持ちは理解できた。
自分だけ周りと違う、置いて行かれるのに恐怖を抱く。
死ぬことに恐怖を抱くのも、死ねずにいることも、どちらも苦しい
ものなのだ。

「…そうでしょうか？私は貴方が羨ましいです。」

重い空気の中で先ほどまで脅えていたシアンが口を開いた。
顔を上げ、しっかりとカインを見据えたその目には何か黒い感情が
混ざっているようだった。

先ほどまでの弱弱しい態度とは違い、今は吹っ切れたような顔を
している。

「不老不死は長年、人間に限らず生命を持つ生き物ならその全てが
求めてきたものです。」

それを貴方は手にしているんですよ？いいことじゃないですか。」
シアンは薄い笑顔をカインに向ける。

その笑顔に背筋にゾクリと悪寒がはしる。

生気のない虚ろな瞳カインを映し、独り言のような小さな声で呟く。

「世界の理から抜け出せるなんて…私は羨ましいです。」

その時桜魔は思った。

それがきつと彼女の最終目的なのだろう、と。

世界の理から抜けることは即ち、彼女のいう束縛から放たれること
なのだろう。

シアンはそれっきり何かを言うことはせずただ黙りこくってしまった。
た。

カインは困ったような視線を桜魔に向ける。

「気にするな。…質問を続ける。」

たぶんアレは彼女の独り言のようなもの。
彼女の過去に関係することなら無暗に首を突っ込むのもいけないことだ。

カインはシアンに視線を向けた後、小さく頷いた。

「貴様はずっとこの街で暮らしてるのか？」

「そうだよ…かれこれ五十年以上はずっとこの街から出たことがない。」

「…そうか。」

桜魔は納得したように頷くと何かを考えるように目を瞑った。
数秒そうしてからまたカインに質問を始めた。

「貴様の言ってる紅蓮の魔女とはあの…レイなんとかとかいうリデルの街の魔女か？」

「そうだよ。あの魔女には通り名がいくつがあるんだ。一般的には『紅蓮の魔女』とか『リデルの魔女』、あとは『深紅の薔薇』かな？」

「ろーずまっだー？何だそれは。」
聞きなれない単語に首を傾げているとカインが苦笑いをして説明してくれた。

「ローズマッダーてのは深紅色のことだ。あの魔女は姉妹達の中でも赤好きで有名だからね。」

「姉妹達？あいつに姉妹がいるのか？」

桜魔の問いかけにカインは戸惑いの色を見せた。
しかしそれもすぐに消え、また笑顔に戻った。

「あの人には四人の姉妹がいるんだ。みんな薔薇の好きな人でね、だから通り名に薔薇とそれぞれの好きな色が入られているんだ。赤と青と白と紫の四色。」

「ふーん…一度会ってみるのもいいかもな。じゃあ、次の質問。こ

れで最後だ。」

「おう！どんと来い！！」

カインは自分の胸を張り、拳でドンと強く叩いて鼻息を荒くした。その様子を見て桜魔は口端をニイツと吊り上げた。

目を細くして笑い、確信を持ったハツキリとした口調でカインに問う。

「お前、前に俺と会ったことがあるよな？」

その言葉にカインが顔に明らかに動揺の色を見せた。

シアンも顔を上げ、驚いて桜魔を見る。

桜魔は笑顔を崩さずに立ち上がり、ゆっくりと反対側の席に座っているカインに歩み寄った。

「何言ってるんだよ！俺はお前とは初対面だし、どっかで会ってたとしてももう随分と前だろうし覚えてないだろ。俺はお前を知らないっ！！」

怒鳴り声を上げるカインに対し、桜魔は余裕の笑みでカインに迫る。

「貴様は…アンタは嘘を吐いてる。俺のこと覚えてるんだらう？何で本当のことを言わないんだ？」

座っているカインに対して圧力うをかけるように上から目線でカインに近づく。

カインは勢いよく立ちあがると桜魔から逃げるように壁に背を付けた。

明らかに動揺している素振りを見せる。

「だから知らないって！！俺はお前に会ったのは今日が初めてだ！！」

「そ…そうですよ桜魔！勇者がこの世界に召喚されてまだ一年ほどです。それに…本にかかれていますときにこの街に来たことは書かれてません！！」
シアンもカインに加勢する。

しかし桜魔はその言葉を鼻で笑った。

「そりやその本がデタラメ書いてるってことだろ。勇者がこいつこの世界に来たのが一年前なら記憶も新しいはずだ。覚えてないわけがない…だろう!？」

カインに近づくと桜魔はカインのすぐ横の壁を思いつきり殴った。ドゴンツという鈍い音にカインとシアンがビクリと肩を揺らす。身長差から下から睨みつける形になってしまったがそれでも迫力は十分あるようでカインが身を縮ませる。

「貴様の俺への態度や反応が少し変だったり俺のやることや発言に驚いたりしてたのは前の勇者（俺）を知ってたからだろう？村に入った時に子供や村人が俺を見てたのも前に俺が来たのを知ってるからだろう？…最初は憎悪の視線を向けられてるのかと思ったが少し違ったしな。…どうなんだ。」

吐き捨てるようにそう言うとカインは桜魔から視線を逸らし、苦い顔をした。

「そんなの…自分の記憶に聞いてみるっ。…お前が一番知ってることだろう？」

その言葉を聞いて桜魔は顔には出さず、心の中でガッツポーズをした。

その言葉を待っていたのだ。

桜魔は静かにカインの横に着いていた腕を下ろした。その行動にカインが頭の上に？を浮かべた。

桜魔は苦しそうな顔をして絞るような声で言った。

「それが出来たら…一番良かったのにな。」
桜魔の言葉に新たな？を頭に浮かべてカインが桜魔の顔を覗こうとする。

そこで桜魔が勢いよく顔を上げたのでカインがまたビクリと肩を震わせた。

桜魔は真っ黒な瞳にカインを映し、請うような眼差しをカインに向けた。

「俺、記憶がないんだ。」

第十六話 疑問と不安

「俺がお前に話すのは全てじゃない。全ては話さない約束なんだ」
「別に俺がいいって言ってるんだから構わないだろう？」

「…前のお前とした約束だからな。お前にいいって言われてもダメだ」

「……………」

カインは桜魔が黙ると話をはじめた。

俺とお前が会ったのは過去に二回。

一回目は魔王討伐の仲間とだった。

仲間の一人がどうしてもトイレに行きたいと言い出して仕方なくこの村に立ち寄ったらしい。

その時もお前は俺に同じような質問をぶつけてきた。

何で不老不死になったのかとか魔女の姉妹のこととか百年前のこの世界の話とか…

今回も同じような質問されて驚いたよ。

お前らは仲間のトイレがすむとさっさとこの村から出て行った。それが一回目。

二回目のときは一人だった。

酷く暗い顔で俺の、不老不死の生体が知りたいとやって来た。

お前はこの村に来たその日から毎日俺の殺し方を一緒に探してくれた。

色々試した結果は惨敗。

でもお前はめげずに俺を殺した。

気が狂ってもおかしくないくらいの回数だった。

一心不乱に頑張るのには理由があった：がそれは言えない。
そんな俺たちの殺し殺されるおかしな関係が続いて数日後、あの仲間たちがやってきた。

駄々をこねるお前を無理矢理馬車に押入れ、何も言わずに村を去って行った。

それが俺たちが出会った二回目、だ。

「…お終いだ。これでいいだろう?」

カインはもうヤケクソといったように鼻息を荒くし、ふんぞり返って椅子に座っていた。

桜魔ももう一度座りなおしカインの話に耳を傾けていたがやがて大きなため息を吐いた。

「イカしてる話だな。何なんだそれは」

呆れたように桜魔がいうとカインはムツとした顔で事実だと言った。
事実：それは真実なのだろうか?

「…お前らつてさ、何で旅をしてんの? やっぱり桜魔の記憶を取り戻すため?」

「まあ…そんなところだ。」

桜魔はカインの視線から逃れるように視線を外した。

旅をする理由

それは自分が魔王に戻るため。

シアンは自由になりたいがため…というのが彼女の理由だと桜魔は考えている。

「じゃ、俺も着いて行くかな! お前の失くした記憶を取り戻す旅に
!!」

「はあっ!?!」

カインの言葉に桜魔は目を丸くする。

カインは嬉しそうに頷きながら桜魔の肩に腕を回してひつついてきた。

「だって俺らはダチだろ？ダチが困ってるんなら助けてやるのが男つてもんだ！」

「放せ暑苦しい！俺はお前と友人になつた覚えはない！！」
傷だらけの腕から逃れると桜魔はカインから距離をちるようによびさつたが狭い部屋の中ではあまり距離もとれない。

カインはニヤニヤと笑みを浮かべたまま桜魔に一步一步近づく。

「前のお前とはダチだったんだ。したら桜魔もダチだ」

「ふざけるな！！シアンも何とか言えつてつ。こいつと旅などしたくないだろう！？」

急に話を振られたシアンは笑顔を張り付けて笑う。

「私は別にかまいませんよ？彼はふつ不老不死、なので戦闘時は助かります。」

諦めたような笑顔で言うシアン。

不老不死を認めるのは嫌だがそれではいつまでも埒があかない。
観念したようだ。

「おお！シアンちゃんは俺のこと仲間として認めてくれるのか！！
？うっれしいなあ」

「俺は認めないぞ！お前が仲間なんて…」

断固として拒否し続ける桜魔の言葉を聞かずにカインは桜魔の手を引つ張り走りだした。

「こうなつたら俺の家でパーティーだな！ご馳走作つてやるよ」

「ご馳走！？」

ご馳走という言葉に反応する桜魔に苦笑しつつシアンも二人を追いかけて歩きだした。

カインの家は村の端にあるボロい木造建築の家だった。

外から見ると随分とボロくすぐに崩れてきそうな印象だが中は意外と整理整頓されていて綺麗だった。

そこまで広いわけでもなさそうだが独身男が一人で生活する空間と

しては十分すぎる広さだ。

しかし部屋の壁や床、家具には血痕のあと（おそらくはカインのもの）が無数あり、木造建築の穏やかな印象はそれだけでぶち壊した。そして部屋に置かれている家具もおかしい。

桜魔がかつて魔王だったところに反逆者や敵を捕らえた時に使用していたものがある。

処刑器具や拷問器具の類。

それが部屋に所狭しと置かれている。

自然と顔が引きつるのが分かった。

「…何だこれは？」

「え？あ、そっか桜魔は忘れちゃったんだっけ。これは俺の趣味だから気にしないで。」

触ると危険なものもあるから触っちゃダメだからな！」

カインはそうとだけ忠告すると奥のキッチンへ向かった。

呆れてものも言えない桜魔はカインの姿がキッチンの奥へ消えると大きなため息を吐いた。

このままいけばカインが仲間になるのはほぼ確定だろう。

勇者の過去を知ってる人間とともに旅をするのは危険ではにだろうか？

という疑問から桜魔はカインが仲間になるのを拒否していた。

悪い奴ではないんだろがやはりどこか気に入らない。

シアンにも聞かれたが何故かと聞かれても理由というものは見つからない。

これは本能がカインのことを嫌っているからなのだろうか。

それともこの身体がカインを嫌がっているのだろうか。
分からない

桜魔はもう一度大きなため息を吐くと近くにあった椅子に腰かけた。

それからしばらくして扉が開きシアンが入ってきた。

「二人して置いていくなんてひどいです…よ…」
木製の扉がギイツと音をたてる。

シアンはこの部屋の異常な光景に驚いたのか硬直している。
そして何事もなかったかのように扉を閉め、今度は勢いよく開け放った。

「何ですかコレ!!?」

「あいつの趣味だとさ。こんな奴を仲間にしていいのか?どうなんだ?」

シアンは何も言わずに眉を顰めて小さくため息を吐いた。
扉を優しく閉めると桜魔に向き直る。

「たしかに彼がいたら私たちの本当の目的に到達するのは難しくなるかもしれませんが。」

ですが貴方は今、レベルも身体能力も低下し、剣を振るうにもその身体感覚が掴めていない。

しかもマフィアやらの危険な方にも狙われ…こうは言いたくありませんが世界の人々からも恨まれています。そんな貴方を私だけで守るには限界がある…と私は思いました。」

「それは…悪い。俺の目的のためにシアンには色々と迷惑をかけてるし、…その、だったら俺と旅するのは…ここま」

「なのでカインさんには旅に同行してもらいます。貴方は彼と仲良くすることを心がけて下さい。」

桜魔の言葉を遮るようにシアンが笑って言った。

桜魔が顔をあげるとそこには張り付けた笑顔のシアンがいる。

何故彼女あんな偽物の笑顔を振りまくのだろうか?

何故彼女はあんなにも笑顔が上手いのだろうか?

疑問はつのるばかりだ。

「私も少し疲れましたね…椅子をお借りしましょう。」

シアンはため息を吐くと桜魔の横にある椅子に腰かけようとする。

「きゃあああああつ！！？」

椅子の表面とシアンの身体が触れ合った瞬間シアンが悲鳴を上げて床に倒れた。

「どどどどうしたんだシアン！？」

慌ててシアンに駆け寄り身体を抱き起してやるとシアンは顔から血の気が引いて青くなっていた。

「どしたのそんな大きな声だしてっ！！？」

シアンの悲鳴を聴いてカインも手にオタマを持って駆け付ける。

シアンはフルフルと震える指先で自分が座っていた椅子を指さした。

「い、今いきなりビリッって…ビリッて」

ビリッというのは効果音だろう。

それを聞いて桜魔はチラリとシアンのスカートを見る。

残念ながら破けたりというハプ幸運ニングは起こっていなかった。

それに対して少し気落ちした桜魔だが慌てて頭の中を切り替える。

布が破れた音ではないのならシアンのいうビリッという効果音は何なのだろう。

「あ…シアンちゃんごめんね。それ俺専用の椅子なんだ。高圧電流が流れる仕組みになってるんだ。」

「お前どんだけなんだよっ」

カインが照れくさそうに言いながら頭をかく。

桜魔は小さくため息を吐く。

シアンはまだ自分に危害を加えた椅子を茫然と眺めている。

こんなのが仲間になって大丈夫なのだろうか？
不安はつのるばかりだ…

第十七話 過去と現在

「何だこれ！？美味しいなっ」

「ほんと美味しいです。…料理がお好きなんですか？」

「いや、俺独身だし作ってくれる女もいないからさ。まあもう百年は作ってるからそこそこベテランだしな。」

「いや、王宮でもこんなに美味しい物作れるやつはいなかったぞ！！人間はこんなに美味しい物を毎日食ってるのか！？」

カインの作った手料理を頬張りながら桜魔は魔王城の時のことを思い出した。

出される料理は確かに絶品だったがカインが作った料理のような気持ちのこもった物ではなかった。

所詮はただの雇われ料理人だ。

これなら料理人として旅に同行してもらいたい…かもしれない。

「そんなに褒められると照れるなあははは」

嬉しそうに笑うカインを見て桜魔も気持ちをやや緩め小さくほほ笑む。

穏やかで温かいこの空間にずっと居座りたいと思ってしまう。

しかしこの家に入った時から息苦しさを感じる。

それは周りにある拷問器具のせいではない。

何故か分からない。何かが心につつかえている。

「…カインさん。」

目の前の料理をずっと見つめていたシアンがポツリとカインの名前

を呼んだ。

「ん？何かあったシアンちゃん」

「あの…えっと…教えてくれませんか？」

恥ずかしそうに顔を赤くして小さい声で言う。

カインはそれが上手く聞き取れなかったのかももう一度聞きかえす。

「え？何て言ったの」

「あの…りよ…料理、教えてくれませんか？」

食事が終わってカインとシアンはキッチンに立っていた。
時刻は午後一時を回ったところだ。

「ではこれからメープルケーキを作ります！」

「はい！！よろしくお願いします！」

「うすっ」

張りきるカインとシアン。

真っ白なエプロンを身につけ、頭には三角巾を付けている。

どこの小学生だと突っ込みたくなる姿だがシアンの表情は真剣だったのでそこに水をさすのはやめておこう。

「ではまず卵を三つボールの中で混ぜて。」

「はい！」

シアンが慎重に卵を持ち、割ろうとするが一向に割れない。

「…シアンちゃん、もっと強く叩いてもいいんだよ？」

「こうですか！あっ」

グシャリと卵が割れてシアンの手がべとべとになる。

カインはそれを苦笑いで見ている。

「…もうちょっとやさしく、ね？」

「はい…」

ケーキ作りに奮闘している二人とは別に桜魔は夕食の買い出しに出
ていた。

今日の夜ごはんは肉じゃがを作るらしい。

もちろん桜魔はそんな物見たことも食べたこともないので今から楽
しみだ。

カインから渡されたメモにはそれに使う材料が書かれている。

「じゃがいも、にんじん、たまねぎ、牛肉…にくじゃがっていうも
のはこんな物で作るのか。」

…はたして美味しいのか？想像もつかん」

でかい独り言を呟きながら人気ひとけの少ない道を歩き、数百メートル先
の市場を目指す。

カインの家から離れると先ほどよりは随分と気持ちが軽くなった。

自分はそれほどカインのことが嫌いなのだろうか？

「…そんなもん分からんな」

人といるのが嫌なのだろうか？

「別に以前も僕しもへはいたしな」

自問自答を繰り返す。

独り言が多いのは自分が魔王の時から変わっていない。

周りから見たら変人だろうが癖になっってしまったため仕方な
いことだ。

辺りを見回したがやはり人はいない。

心配すら感じない。

桜魔はここでやっと自分が一人なのだと気付いた。

ずっと誰かが横にいる気がしていたがそれは幻覚か何かだったよう
だ。

「あー…そういえば最近はずっと一人でいることはなかったな。」
最近ではいつもシアンが隣にいたためか一人になったのが急に寂しくなってきた。

気付かなければよかったと後悔するが時すでに遅し、桜魔は世界に一人置き去りにされた気がして怖くなって自分を抱きしめるように身を縮こまらせた。

しゃがんで目を開き、青い空を見上げた。

自分が魔王だったときは眩し過ぎて不快だった太陽も今では心地の良いものに変っていた。

優しく包み込むような太陽の光が嬉しい。

少しだけ、寂しさが軽くなった気がした。

こんな寂しさを感じるのは何日ぶりだろうか。

まだ新しい記憶の糸を、辿る。

山積みにもされた本に埋もれて横たわる冷たい床の感触は今でも肌が覚えていてる。

回りに散らばる本は全て魔王になるための心得や元魔王の自伝、魔王が主役の物語といったところで大してためになるわけでもなければ面白くもないものばかり。

毎日莫大な量の文字と対峙してきたが自分は所詮お飾りでしかない。なのでそんな知識をつけるだけ無駄だった。

隔離された魔王城龍の中ではそれしかすることがなかった。

いつか来るはずだった自分が魔王になる未来を想像し、そのために備えてきた知識も今では無意味な言葉の塊でしかなくなり、頭の片隅に押し込めた。

楽しみといえば授業の時間だけだった。
一対一である勉強は楽しいものではなかったが、教えてくれる僕たちとの会話が楽しかった。

『生きている物は皆、自分の記憶を持ち過去が存在する。無論それは魔王様にもあります。生物は皆、先祖が犯した過ちを繰り返さなために自分たちより前を生きた同族の者たちの記憶を残し学ぶのですよ魔王様。』
社会科担当のリースは赤縁のメガネを押し上げていつもそう言っていた。

『人間界を支配するためにはな、力だけで制圧することは不可能だ。そんなんじゃないかって付いて来やしない。計算して先を読み、先手を打つことが勝利への鍵だ。だから数学するぞ』
数学担当の飛鳥は俺のやる気を出させるためにいつも違う理由で勉強するように促した。

『魔王様、言葉というのは自分を表わします。本心は違えどもそれは他人には見えないのですよ。自分の気持ちを伝える術は言葉だけです。多くの言葉を知っていればそれだけ自分の表現の仕方が増えるので』

国語担当のシャロルは深紅のドレスを身にまとい艶やかに微笑んだ。

『魔物や生物の生態を知っておくことは戦いで有利になるんだ。植

物も同じ、戦闘時に上手く利用できるととてもいい武器になるんだよ。知っておくと便利だから、ね?」

理科担当の了は理科の勉強に限らず色々な戦法を教えてくれた。

中でも一番好きだったのは了の教えてくれた理科…というよりは了自身が好きだった。

自分のことを一番分かってくれていて、いつも傍にいてくれた。

桜魔は親友だとさえ思えるほど彼を信賴していた。

尊敬し、敬愛していた。

その四人以外にもお付きの者や剣術、体術を教えてくれる僕が何人かいた。

『魔王様あゝ庭に真つ赤な薔薇が咲きましたよう!!見てくださせいっ』

『まおーまおー!!聞いてようっ飛鳥が一緒にお茶しようっっていうたらすんごい嫌な顔するのっエル寂しい!』

『魔王様、地下から新しい書物が発見されました。とても興味深い内容なので是非読んでみてください。』

『おーい魔王、人間狩りに行ってきたから土産だ。どうだこの鮮やかな血の色は!興奮するだろう?』

『ちよつとドウル!そんな汚い物魔王様に見せないで!!』

『飛鳥、貴様は本当に失礼だな!この私がそこらへんの汚物と同然だと!?!』

『何言っただよりス、当然だろ?』

『なあにいいいっ!?きつさまあ!!!!』

『ちよっ…もう、魔王も何か言っただよ』

『お前ら…ほんとバカだなあ』

寂しいと思えば誰かが来てくれた。

名前を呼べば誰かがすぐに駆け付けた。

退屈だけど、偽物の笑顔かもしれないけど、楽しかった。

退屈で苦くて痛い思い出ばかりでも、ほんの少しの希望があったあの頃を…

自分は取り戻さなくてはいけないのだ。

桜魔は自分を抱きしめていた腕をそつと離れた。

手には汗が滲んでいた。それを掴むように手を握り締め、勢いよく立ちあがった。

早く、一分一秒でも早く帰りたい。

桜魔は何も考えずに走りだした。

市場まで全力疾走した。

第十八話 初めてののおつかい。

「じゃがいもにんじんたまねぎゆうにくう!」

「…は?」

「だ…だからっ、じゃがいもとお…にんじん、たまねっ…ぎ…ぎゆうにくっ……くれっ」

「えっとお…お客さん?」

市場の入口のすぐ横にあった店の店員に桜魔は腹に溜まった酸素を吐き出すように言った。

あの距離を全力疾走は流石にきつかった。

途中で疲れては立ち止まり、また走りだすという馬鹿なことを繰り返して市場に着いた時にはもうクタクタだった。

もう一度と聞き返してくる店員にイラつきながら桜魔は同じことを繰り返す。

「だあかあらあっじ…じゃがいもっ、とにんじんに玉ねぎと牛肉を売ってくれ!」

「えっと…お客さん、ここはアクセサリーショップですよ?食材はもっと奥の方です。」

店員が呆れたように言う。

その言葉を理解するには酸欠の脳に十分な酸素を取り入れてからだやっと思が整ってきてから桜魔は落胆したように言う。

「ここでは売ってないのか…?」

「はい。売ってません。」

キツパリと断言する店員に桜魔は肩を落とす。

ここまで来てさらに奥へ進まなくちゃいけないのかと思うと気が滅

入った。

「それよりお客さぁん……」

「……？何だ」

店員が声のトーンを二つほど上げて桜魔にすり寄ってくる。

「あなた綺麗な顔してますね。そんなあなたのカツコよさをもっと上げる良い物があるんですよ！」

これこれ、本物のサファイアを使った指輪リングです！こんなに綺麗な輝き！あなたさまにしか似合わないです！この指輪リングは今までずうとあなたさまを待っていたのです！これは運命なのです！！どうです？この輝きでなんと五千ペルト！！お安いでしょう！？な・ぜ・ならっこれは私の弟がやっている……（略）」

店員が勝手に指輪の説明と自慢を言っている中、桜魔もそれに食いついていた。

よくあんなに口が回るな。そして疲れた様子もない……こいつは体力が凄くありあまつてるな……

なんてことをずっと店員の口を見続けて考えていた。

「で……どうでしょうお客様？こんな素敵な物、逃す手はありません！……ハア……お買い求めになる……でしょう？」

息切れし始めてやっと話を切り、桜魔に買うようにと進め始める。

しかし桜魔は店員の話が終わるとつまらなさそうにため息をついた。「んな安物いらんわ。俺は今日にくじやがという珍味を作るための材料を買いに来ただけだ。」

「……え？……はぁぁぁあぁあつ！？」

店員は信じられないという目で桜魔を見た。

あんだだけ説明させといて、しかもそれを興味津津で見っていたくせに

今更何だと…

「ちよ、あんたそれはな…」

抗議をしようと桜魔を睨むがすでに桜魔は踵を返し、人ごみに紛れていなくなっていた。

行き場の無い怒りだけが募り、爆発した。

「ばつきやるおおおおおおおおおおおっっっ!!」

悲痛な嘆きが市場に響き渡った。

「ここで…じゃがいもとにんじんと玉ねぎと牛肉は売ってるか？」

「はい。ありますよ。」

やっとのことで見つけた店の店員はたぶん年代ぐらいの女の子だった。

最近ではこれぐらいの年の子供も店で働くのかと桜魔はオヤジのように関心した。

「今日の夕ご飯はカレーですか？」

桜魔の言った物を袋に詰めながら少女が世間話を始める。

その質問に桜魔は少し得意げに答える。

「いや、にくじゃがとかいうものらしい！」

「ああ、肉じゃがですか、美味しそうですね！食べたくなくなっちゃうな。」

ふふっと笑う少女に桜魔は少し驚く。

「にくじゃがを知ってるのか！？そ、それはどういう物なんだ！」

「え？肉じゃが知らないんですか!？」

それを逆に驚き、少女が不思議そうな目で桜魔を見る。

桜魔は失敗したと思った。

珍味だと思ったがどうやら一般的な料理だったようだ。

これではこちらが変人ではないか…

桜魔はそっと少女から視線を逸らした。

「…もしかして旅人さんですか？」
「…は？」

もう一度少女を見ると少女は優しく笑っていた。

「肉じゃがはですねー、じゃがいもがメインの煮物のようなものですよ。…って説明のしようがないんですよね。すいません」

「いや、こっちこそ変な質問して悪かった。」

「いえ…あ、今日は何処に泊まるおつもりなんですか？」

「この村に住んでるカインという男の家だ。（勝手に決定）」

桜魔が素直に答えると少女は驚いた表情で桜魔を見上げる。

「カインさんに来客なんて珍しいですね。お友達なんですか？」

「いや違う。」

桜魔は即答した。

あんな変人と友人になったつもりは微塵もない。

今日知り合ったばかりの知人でしかない存在だ。

「奴の知り合いから届け物を言付かってな。」

「そうなんですかあ。カインさんいい人なんですけどちょっとおかしなところがあるから…」

あ、今のはカインさんには内緒ですよ！

少女が人差し指を口元にあて嬉しそうに笑う。

自然な笑顔には不純なものは一切なく、本当に楽しそうに笑っている。

桜魔は軽く頷くと少女が差し出してきた食料の入った袋を受け取った。

「全部あわせて八四〇ペルトです。」

「ああ……………あ？」

ここでやっと気付いた。

桜魔はお金を持ってきていないことに。メモを渡されただけで金を受け取った記憶はない。

普段も金銭のことはシアンに任せきりにしていた為手持ちの資金は○だ。

動きが停止している桜魔を見て少女が首を傾げる。

「どうかされましたか？」

「えっ……いや、あの……その……」

口ごもる桜魔の意を察したのか少女はふっと笑った。

「もしかしてお金を忘れてきたんですか？」

「えっ！？なっ何で分かったー！」

動揺する桜魔を見て少女は楽しそうに笑った。

「あはっ……まあ乙女の勘ってやつですかね！えへっ」

「乙女の勘！？なんてすごい魔法なんだー！」

「魔法！？あはははははははははっ……ち、違います……よう。あははははっ

……」

桜魔の発言に腹を抱えて笑い、ひとしきり笑い終わった少女は目尻に溜まった涙を拭き取る。

「すみませ……ふふっ。ちょっとおかしかったもので……。こほん、じやあ行きましようか。」

「？何処に」

「決まっていますよ！カインさんの家に、です。買い物代金を頂かなくては。」

少女はそう言うのと店の奥の椅子に座っている女に話し掛けてもう一度桜魔のところへ戻ってきた。

「母に言ってきました。行きましょ？」

桜魔は歩き出そうとする少女の手を掴み、止めた。

少女が振り返り不思議そうに桜魔を見上げた。

「あれ、何か買い忘れ？」

「いやここからあそこまでは結構距離もあるし……手間をかけさせる

のは悪い。俺だけで取りに帰る。」

これは自分の失態だ。

それを他人にまで背負わせるのは悪いだろ。しかし少女は桜魔の手を握りまた歩きだした。

「お、おいっ待て」

「別に手間なんてかけられてませんよ。私がカインさんに会いたいんです。」

桜魔の制止を遮り少女は前を見たまま言う。

その為どんな表情をしているかは分からない。

人混みをするすると意図も簡単にすり抜け、すぐに市場から出てこれた。

そこでやっと桜魔の手を離し振り返った。

「店番ずつとしてて暇だったんですよ。だから行きたいです！…でも嫌だったら帰ります。ダメですか？」

少女は少し悲しそうに眉尻を下げた。

そんな顔をされたらどうすればいいのか桜魔には対処法が分からなかった。

困る。

「…えっと…俺は、うん。別にどっちでもいい。」

「ほんとですか！？じゃあついて行きます。」

少女は嬉しそうに笑いまた桜魔の手を取った。

「私、アキネって言うんです。あなたは？」

「ああ…俺は、桜魔だ。」

自分で付けたはいいがやっぱり慣れない名前を口にするのはどうも変な感じがする。

アキネは「桜魔ですか」とその名前を噛みしめるように繰り返した。
「じゃ、行きましょう桜魔」

「いやちよつと待て、このまま行くのか？」

アキネはまた歩き出そうとするが桜魔は動こうとはしなかった。
それを不思議そうにアキネが見つめる。

桜魔の顔は少し紅潮していてアキネと目をあわせようとはしない。

「どうしたんですか？」

「いや…その、手…」

「手？」

手がなんだと見てみるが特におかしな様子はなかった。

別にどこか怪我をしているようでもない。

ただ手を繋いでいるだけである。

アキネは桜魔の言いたいことが分からず首を傾げた。

「…何もありませんよ？早くしないと日が暮れちゃいます。行きましようよお」

「ううああ、分かった行こう。」

桜魔はしぶしぶと言ったように歩き出した。

つられてアキネも歩き始める。

顔を真っ赤にしながら歩く桜魔を見てアキネも何故桜魔がそんなことを言っただのかやっとな理解した。

繋がれたままの手を見て今更離そうとも言えずアキネも顔を赤らめた。

他愛もない会話で場を繋ぎ、カインの家に着いた時にはもう日は西に傾きはじめていた。

「帰ったぞおって…うわっ」

桜魔が扉を開いた瞬間、真っ黒な煙と何かの焦げたような臭いが風によって運び出されてきた。

反射的に二、三步後ずさる。

「何ですかこれっ!?!まさか火事じゃ…」

アキネも少し後ずさり、繋いでいない方の手で口を覆う。

「シアンちゃんこれももうダメっ!!一旦…ゲホツうえっ…外に」

「そ…ですなっゲホツゴホッ」

カインとシアンの情けない声が家の中から聴こえてきた。

「おいっ大丈夫か!?!」

桜魔が中に向けて叫ぶとすぐにシアンが飛び出してきた。

煙が目に沁みて前がよく見えないのか桜魔に向かって突進してくる。

「うおおっ!?!?!」

「きゃああ」

「きゃっ!?!」

シアンからのタックルを食らってそのまま押し倒される形で地面に倒れる。

手を繋いでいたためそれにつられてアキネも地面に尻もちを着いた。
「痛たたあ…あ!?!お…桜魔おかえりなさい!初めてのお使いはど
うでしたか?ちゃ、ちゃんとできましたか?!?!」

シアンは少し身を起こすと自分の下にいる桜魔を見て慌てだした。
どうやらこの火事を引き起こした原因はシアンらしい。

「シアン…ど…どい」

「もう大変なことになっちゃったよー!まあ焦げてるのはオープン
の中のケーキだけだか…ら?」

桜魔の言葉を遮りカインが家の中から飛び出してきた。

楽しそうに笑っていたが桜魔たちを見てその笑顔が引っ込む。

眉を顰め、戸惑っているように視線を桜魔とシアンに向け、遠慮が
ちに声を漏らした。

「…お取り込み中?」

「違うわこの戯け者がっ!!」
渾身の力を込めて叫んだ。

「…で何故こうなった？」

幸い被害にあったのはオーブンとその中のメープルケーキになるはずだったものだけで、

家全体が火事にはならなかった。

家の中は異臭が漂い、荒れてはいるものの片付ければ済むものなので今は放置し人数分の椅子だけ用意した。

オーブンの周り以外でも机の上や床がひどい有様になっていた。

桜魔は向かいにカインとシアンを座らせ凄んだ。

その態度にカインが脅えている。

シアンは焦りの色を見せてはいるがそこまで怖がってはいなかった。

「えっとお…メープルケーキを作ろうとして…燃えちゃいました！」

「あれは火力と…量の問題だけじゃないと思うよ。あれだよシアンちゃんが入れた力」

「カインさん!!…過ぎたことを話すのはやめましょう。過去を

振り返るのは人の悪い癖!!」

「いや、今は思い出そうよ。」

シアンがカインを睨みつけた。

カインはヒツという小さな悲鳴を上げて黙ってしまった。

これ以上カインは答えられそうにもない。

仕方ない、シアンに聞くか。

「シアン、正直に真実を言ってくれ。何があった？」

「何もあります。ただオーブンの具合が悪かっただけです。」

シアンはニコリという効果音が着きそうなくらいの笑顔で笑う。

断固として本当のことを言うつもりはないようだ。

桜魔は諦めたようにため息を吐いた。

諦めるしかない。

「もういい……」

「あら、張り合いがなくて残念です。では私からも質問を一つ。」
シアンは残念がることもなく笑顔を変えることなく言う。

「貴方の隣にいる方はどちら様でしょうか？手を繋いで帰ってくる
ほどですからとても仲がいいんですね？」
何故だろう。

言い方に棘が混じっている気がするのには自分の思い過ごしだろうか？
隣でアキネが硬直している。

「あくそつだ俺、金忘れてったんだよ。で、その買い物した店の店
員がここまで取りに来てくれたんだ。

カインの知り合いだって聞いたから。」

「そうなんですかカインさん？」

シアンが疑いの目をカインに向ける。

カインはじつとアキネを見た後ゆっくり頷いた。

「彼女はアキネちゃん。この村の村長の娘だよ。」

「アキネです！よろしくお願いします。」

アキネは慌てて立ち上がるとシアンに対して深くお辞儀をした。
つられてシアンも立ち上がりお辞儀をした。

「私はシアンです。よろしく」

先ほどの棘のある言い方と恐ろしい笑顔は消え、穏やかな口調と笑
顔をアキネに向けた。

アキネもそれに一安心したのか身体を強張らせていた力を抜いた。

「ごめんねーはいお金。そつだアキネちゃん！ごはん食べてかない
？」

「えーでも…悪いですよー」

カインからお金を受け取りながらアキネは嬉しそうに笑った。

そこに机を掃除していたシアンが顔を出す。

「そうですね！一緒に食べましょう、私アキネちゃんと一緒にご飯食べたいです。」

「でも悪くないですか？」

アキネはシアンが言っても悩んでいるようでチラリと桜魔の方を見た。

その視線に気づいた桜魔は小さく笑ってやる。

「別にそいつがいいって言ってんだから食ってけばいいんじゃないか？」

それにここまでの距離を歩かせてしまったし。」

桜魔がそう言うとアキネは少し頬を赤らめて笑った。

「じゃあお言葉に甘えて！何か手伝います。」

「一緒に肉じゃが作りましょう！」

「いや、俺らで作るからシアンちゃんはやめて。」

「や、やめてって何ですかー！！」

談笑している三人を見て桜魔も笑った後床の片付けへと戻った。

一瞬シアンが桜魔に視線を向けたが、桜魔はそれには気付かず床磨きに没頭していた。

夕食が終わったあとは二人とも疲れていたのですぐに眠ることとなった。

カインはアキネを送った後、少し用事があると言って出て行ってしまった。

電気を消してもう数十分が経ったが一向に眠気はやってこない。

それどころかこのベッドの寝心地が悪いせいか気分がすぐれない。となりの部屋で眠っているシアンはもう眠っているだろうか。

「うーううーあああー」

「桜魔…起きてますよね？」

だらだらと寝返りを打っている。と急にドアが開く。
そこにはシアンが立っている。

その顔は昼間の笑顔は消え、真剣そのものだった。

「お話があります。」

シアンが部屋に入ってきたので桜魔も身体を起こしベッドに座った。
その横にシアンも腰かける。

窓から漏れる月の光にシアンの解いた青い髪が輝きを増す。

真っ白なワンピースからのびる細い手足はどこか魅力的で真剣な顔
つきは実年齢よりも大人びて見える。

その姿に息をのんだ。

「昼間のことで話があつてきました。」

「…昼間って俺が買物に行ったときのことか？」

桜魔が尋ねるとシアンは首を横に振った。

「貴方がアキネさんを連れてきた時のことです。」

アキネというワードが出てきて桜魔の心臓は跳ね上がった。

否、そのワードを口に出すシアンの冷めた瞳に、だ。

青色の瞳の奥に底知れない闇が見える。

「貴方が誰とどういう関係になつても別に私は構いません。魔王も
貴方の身体で好き勝手やっていますしね。恋愛をしてもかまわない、
友情を築くのも自由。でもそれは貴方自身を苦しめるものになりま
す。」

淡々とした口調でシアン言う。

機械的で完全に感情をシャットアウトしたような言い方はまるで口
ポットだ。

桜魔はそんなシアンをみて恐怖よりも不安をおぼえた。

「貴方は今、あの勇者なんです。その身体で何かを築いてもそれは
最後には貴方の手の中には残らない。」

すべてあの勇者のものになるのです。たくさん仲間が出て、
恋人が出て、自分の居場所、存在価値が見いださせてもそれは勇
な

者という器にだけに限るもので貴方が魔王に戻る時には持って行けないもの。それを増やして歩くのは錘のついた鎖を嵌めて歩いているのと同じ。」

「な、何が言いた」

「その鎖はやがて貴方の動きを止め、息を止めることとなるでしょう。これは忠告です。」

無意味な人間関係をつくるのは自分の身を…精神さえも滅ぼすことになるでしょう。」

桜魔が入る隙もなく、シアンは言う。

その意味はつまり…

「無駄な仲間は作らず魔王に戻ることをだけを目指せてか？」

吐き捨てるようにそう言うとシアンはやっと笑顔を見せた。

ただし偽物の、だ。

作り笑顔は物語る。

周りを信用するなど言っている。

彼女はそう言いたいのかもしれない、桜魔はそう思った。

「別に仲間を作っではいけないと言っているわけじゃないんですよ。寧ろ世界のことや人のことを知るのは今後の魔王生活で役立つんじゃないでしょうか？私が言いたいのはその邪魔になることもあるってことです。」

クスリとシアンは笑った。

その笑顔は月明かりに照らされどこか妖しく見えた。

何も言わない桜魔に対してシアンは小さくため息を吐きベッドから立ち上がった。

「言いたいことは大方言えたのでもう眠ることにします。桜魔も早く寝た方がいいですよ。」

いつもの調子でそう言つとシアンはドアを開け、一度振り返り「おやすみなさい」と言つて部屋から出て行った。

いつもの調子…とは言ってみたものの、彼女のあれも演技のうちなのかもしれない。

ドアが閉まるとともに口から大きなため息が漏れた。気付けば全身に汗をかいていた。

それほどまでに緊張していたのだろうか。

もう一度ため息を漏らそうと息を吸ったが口に入った酸素は吐き出されることなく飲み込まれた。

いつ開けたのだろうか。

音さえせずに開かれたドアの間からシアンの顔が見えた。

「明日からまた二人で頑張っていきましょうね、桜魔」

それっきりドアが開くことはなかった。

心拍数がいつもの倍以上の速さになっている。

全身にかいた汗は妙な寒気でひいてしまったようだ。

桜魔はドアを見るのが怖くなって慌てて毛布にくるまった。

シアンの言った言葉がぐるぐると頭の中で廻る。

二人で…というのは釘を刺されているのではないだろうか？

貴方には私以外の人間は必要ないと…

それはさすがに考えすぎだと桜魔は無理に笑った。

今のほんの数分の会話だけで疲労が蓄積され、すぐに眠気が襲ってきて助かった。

意識が落ちる。

まどろみの世界へと落ちていく

第十九話 異常空間依存症

『おやすみ。』

『それを言うならおはようじゃないか?』

『いや、ここは夢だよ。だからおやすみ。』

『じゃあ…おやすみ?』

『うん。』

辺りは一面真っ白で俺とそいつだけがその空間の中で異常なくらい黒く、ハッキリと存在していた。

これはあの夢の続きだとすぐに分かった。

『…またお前か』

『そうだよ。またボクですが何か問題はあるのかな?』

『大ありだっ安眠妨害だっ』

『じゃあ永眠させてあげようかな?』

そいつは黒い笑みを浮かべて一歩近づいてきた。

前の時よりもはっきりとそいつの姿が分かった。

何の混じりけもないほどに黒い漆黒のまっすぐ伸びた長い髪に焦げ茶色の瞳。

黒いワンピースからのびる手足は細く、あまりに肉のついていない不健康的な身体の少女だ。

その細いしなやかな指がすっと首に触れた。

目を細めて口の端をつりあげて笑いながら首を掴む。

『…抵抗しないの？』

『しても意味はない。これは夢だ』

『あつそ。』

俺の返答が気に入らなかつたのか少しだけ顔を顰めた。

しかしそれもほんの一瞬の出来事。

一気に首を絞めに入る。

夢の中であるのに肺は酸素を求めるように呼吸は荒くなり始めた。

目の前の女はそんな俺の苦痛に歪む顔を悲しそうに見つめていた。

『くつ……ああつあ………』

俺が苦しそうな喘ぎを漏らすとその力は緩まった。

掴んでいるそつちのほうが折れてしまいそうなくらい細い腕に手をのせるとそれだけでビクリと肩を揺らす。

夢と侮おぼっていたが意外にも痛覚に似た何かが存在しているようだ。

女の瞳に焦りと戸惑いの色がみえる。

視線が合うと女はすぐに視線を逸らした。

『…今ならきつと出来る、と思ったんだけど。やっぱり君を殺すのはボクには出来ないかな？』

女は残念そうにため息を吐くと首を絞めていた手を解いた。

俺は力なくその場に膝をつくと咽ながらなんとか肺に酸素を送ることが出来た。

『今やらなきや後悔するのは分かっても結局出来ないのは臆病者の証だね。』

それでまた後悔することになるんだ。』

女は俺を見下ろしながら嘆くように言った。

俺にはそいつの言っていることがなんとなく理解できた。今まで生きてきた人生の中での後悔のほとんどが自分が臆病で何もせず現状維持、考えることを放棄してきたからだ。

ある意味今の入れ替わってしまったこともそのせいなのかもしれない。

『でもボクはやっぱり君を手にかけることはできないようだ。』

女は虚空を見つめて笑っていた。

寂しそうな自虐的な空っぽのような…そんな笑い方だった。

『なんでお前は今回はちゃんと姿が見える？』

俺が聞くと女はゆっくりと視線を俺に戻し口元だけ笑って見せた。

『なんでだと思っ？』

『質問を質問で返すな』

『…自分で考えることもしないで全部答えが返ってくると思っなよこの屑。』

君はいつもそうだね。何でどうして、どうする？…知るか。んなもん自分で考えるよ』

女は吐き捨てるようにそう言った。

ただ虚ろな視線を俺に向けてゆっくりとこちらに歩いて来る。

俺の横まで来ると腰から砕けるようにその場に座り込んだ。

俺を見上げている。

そして俺の服の袖口を引っ張った。

俺は仕方なくそいつの横に座る。

『あはは…ここは居心地がいいね。…いや、前から居たけど人が違うからかな。』

『…ずっとここに居るのか？』

『さあ？覚えてないな。』

嘘を吐いているようではなかった。

本当に覚えていないようだ。

女は俺に体重を預けるように寄りかかってきた。

しかしその身体では全然重さがなく、真っ黒な髪から柑橘系の甘い香りがした。

少しすると細い指が俺の手に絡んできた。

絡み合う指と指はお互いに遊ぶように動き少しくすぐったかった。

少しすると手はしっかりと握られていて俺が強く握ると握り返してくれた。

何だか居心地がよかった。

安心感があった。

落ち着く。

何も言わず、ただ時間が過ぎていく。

時間の感覚なんてなかったけどそんな感じがした。

そんな中で女があっ、と声を出した。

『もう時間みたいだね。彼女が君を呼んでる。』

『そうなのか？俺には分からない』

そいつは それでいいんだよ と寂しそうに笑った。

離れようとする手を強く握りしめた。

まだここに居たいと思った。

『まだあともう少しだけ…!』
『でも…彼女が呼んでる。これは夢。あっちが現実。』
『いやだっ』

俺が首を振ると女は小さくため息を吐いた。

『君のさっきの質問に答えたげるからそしたら帰る。』
『うう…ああ』

嫌だったけどいつまでも駄々をこねるわけにはいかないので仕方なく承諾した。

女は優しく俺の頭を撫でて頷いた。

『ボクはこの身体、空間に閉じ込められてる。ま、魂みたいなものだけだからさ、
現実世界での肉体が近くにあるときだけなんだ。』

『あんまり意味が分からない。』
『それでいいんだよ。君はこのことに深入りしちゃいけない。巻き込まれただけだから。』

…ごめんね。』

悲しそうな顔を見て心臓が痛くなった。

その隙に女は俺の手の中からするりと抜けて行った。

『ほら帰って。ずっとここに居たらおかしくなっちゃうよ。』
『分かった。帰る』

『うん。おはよう、だね。』
『いや、またな』

「桜魔っ！！！」

目が覚めるとすぐ目の前にシアンの顔があった。
まだ覚醒しきっていない頭の中を整理する。
夢を見ていた。

前よりも記憶は繊細に残っていた。

「桜魔っ…よかったあ。何度呼んでも起きないから心配しましたよ！」

「わ、悪い。でどうかしたのか？」

辺りを見るがまだ薄暗い。

シアンは窓の方に桜魔を引っ張っていくといっきにカーテンを開けた。

「見て下さい！！村が…！」

そこに広がっていたのは真っ赤な炎と黒い煙に覆われた村だった。

第二十話 魔王様とぼく。(前書き)

長いことお待たせしてすみませんでした…

パソコンが壊れてて更新できなかつたんですが復活しました

これからもよろしく願います

第二十話 魔王様とぼく。

「ねえ人魚って食べたなら人肉の味がするのかな？それとも魚の味？」
「は？」

「魚だとしたら赤身？白身？」

「何の話ですか？」

ぼくが魔王様の側近として働きはじめてまだ数日。
この人…ではなく悪魔の性格が全く理解できない。
今日もいきなり変なことを言い出した。

「そもそも食べられるものなの？ねえ君はどう思う？」

「知りません！仕事をしてください。」

「いいから答える糞野郎。十秒以内で。」

じゃないと腹かつさばいて内臓引きずり出して夜の樹海に捨ててく
んぞ。

アンタに拒否権なんて与えた覚えはないから。ね？」

そんな汚い言葉をそんな満面の笑みで言わないで下さい。

この方なら殺りかねないので慌てて答えを考える。

「いーちにーい…。」

そんな考え事してるうちに死へのカウントダウンが始まっちゃった
し！

「あ、あ、あ…あのっそもそもニンギョって何ですか？」

「あれ？いないのかな…あ、半魚人のこと！」

「ああ、あれですか。」

ニンギヨなんて言われてもそんなのはぼくはそんな生命体知らない。半魚人はそこまで見たことはないけど聞いたことはあったから知ってた。

ぼくが納得して答えを考えていると魔王様はあれつと呟いた。

「ねえ半魚人じゃおかしくない!? それじゃ魚に人間の足が生えてるみたいじゃない? だったら半人魚にしなきゃだめかな? てゆーか魚に人間の足が生えてるって気持ち悪い…」
魔王様は何を想像したのかゴミ箱に向かって嘔吐した。

「大丈夫ですか!？」

慌てて背中を擦るとゴミ箱から青白い顔をした魔王様が現れた。その先から酸っぱい匂いがツンと鼻を攻撃してきた。

「いや…あの脛毛の濃い足があの気持ち悪い魚について海を泳いでるのを想像したら…うえっ」

どうやら魔王様は想像力と感受性が豊からしい。

それから何度か想像しては嘔吐を繰り返した魔王様はもう気はすんだのか書類に落書きをする作業に入った。
ぼくはその落書きを消す作業に入った。

「そういえば人魚つながりなんだけど君に一つ面白いお伽噺教訓話をしてあげよう。…君は人魚姫を知ってるかな？」
落書きに没頭していた魔王様が唐突に質問をぶつけてきた。
まあいつものことだ。

顔を上げるとまだ幼さを残した顔立ちにくすんだ赤い瞳がぼくを見

つめていた。

「…いえ、知りません。」

「じゃ、教えてあげるよ。」

魔王様は片方の口の端をつり上げて笑った。

話は割愛。

まあ一言で言えば悲恋な話だ。

「まー結局、言いたいことつてのは馬鹿みたいな女の話だ。」

「馬鹿つて貴方に言われちゃ彼女が可哀相ですよ」

「え？何、何か言つたかなあ？」

「いえ、何も。特には言つてません。」

ぼくが笑顔で答えたら魔王様はぼくに聴こえるように大きな舌打ちをしてため息を吐いた。

聴こえるように言われるつて影で言われるより恐ろしいと思つ…

このままじゃ胃に穴が開きそうだよ。

「と…とりあえず、なんとなくには理解しました。悲しい話ですね。」

でも貴方の話し方だとまったくその話に感情移入できませんが。せめて心の中でだけでも毒づいてみた。

「…今なんか僕に失礼のあること考えなかつた？」

「いえ、まったく。…で、その話にどんな教訓があるっていうんですか。」

「簡単な話だよ。『自分の身にそぐわないものに手は出さな』、『何かを失っても必ず欲しいものが手に入るとは限らない』、『他種族に恋をするのは無意味である』の三つ。」

魔王様はそう言って目を細めて笑った。

ぼくはそんな魔王様を軽蔑の意を持って睨みつける。

「貴方の意見には賛同しかねます。はっきり言って間違ってると思います。」

「そうかな？僕は今正論を言ったと思うのだけれど。」

悪びれた様子もなか魔王様は笑って机の上にあったチョコレートに包み紙を剥がした。

長時間温かい室内に置かれていたチョコレートは溶けてドロドロになっ

てしまっていた。中にジェル状にされた赤ワインが入っていたためそれも溶けて溢れ

それを右手に持っていき握りつぶす。

「だって人魚姫は王子サマのために色々したのに結局自ら泡になっちゃったじゃん。王子サマに恋しちゃったから死んじゃったんだよ。そのせいで死んでしまったのなら愛とか恋とかそんな感情は無意味なものだと思うよ。」

握った手を開いてグチャグチャになったチョコレートを嬉しそうに見つめて魔王様は共感を求めるようにぼくに対してねっ？と言ってきた。

ぼくは何も答えない。

「姉さんたちも酷いよね。自分の妹に人を殺せと言うなんて。しかもその人に会うために人間になったのにその人を殺せなんて…。ほんと酷なことをするよっ」

魔王様はもう一度手を握り締めるとぼくに向き直った。

その瞳はどこか遠くを見つめていて心此処に在らずといった感じだ。

「でも彼女は強いね。普通自分が消えてなくなるときに相手を優先できるなんて。今の時代、そんなことできる奴はいない。…いたとしたらそいつは偽善者、だ。」

椅子から立ち上がりゆっくりとぼくの方へ歩いてきた。

ぼくは動かない。

彼は、誰の話をしているのだろう。

さっきの人魚姫の話？

それとも…

「君はそんなときどうする？好きな人に思いは伝わらない、殺らなきゃ自分が死んじゃう、でもその人を愛していたら…どうする？」

魔王様の生温かい手がぼくの頬を撫でた。

手についたチヨコレートが頬につく。

ぼくは何も答えない。

ただ彼の赤い瞳を見据えた。淀んだ血のように赤い瞳の奥には何かが見えた。

しかし彼は寂しそうに笑った後僕から目を逸らし窓の外に視線を向けてしまったためそれは何か分からなかった。

ぼくは頬についたチヨコレートを拭くこともせず彼の寂しそうな背中を見つめた。

「話は戻るけど結局人魚はなんの味がするんだろうかね？」

「…さあ？上半身は人肉で下半身は魚じゃないですか。イメージだと白身ですかね。」

「でも魚と人間のちょうど境目は？交じり合ってるのかな。それともパツクリ分かれてる？」

「それだと露骨すぎますよね。」

ぼくが苦笑してそう言うつと魔王様はだねと小さく笑った。

「でも僕、人肉って食べたことないんだけど美味しいの？甘いのかなあ…」

そう言つて自分の手の平をペロリと舐めた。

「さあ？あまり美味しくなさそうですね。」

「うん…あ、そういえば勇者は今どこらへんにいんの？」

魔王様は唐突に話を変えた。

もういつものことなので慣れた。

勇者は前に一度魔王様が倒して今は玩具として生かしてる人間のこ
とだ。

その玩具が好きなようでした。たまに城を抜け出して会いに行っている。
側近のぼくからしては迷惑だ。

「えつと今はリデルの街にいるそうで、次はポータル村に向かうそ
うだとか…」

「そっかあ…」

魔王様はニイッと意地の悪い笑みをこぼした。

こういつときこの方は悪いことを考えているんだ。

「じゃ、勇者がポータル付いた夜にでも村を襲おうか。」

あそこは近場の街に食料を送る大切な食料場だ。あ、勇者は殺しち

や駄目だよ?」

「かしこまりました…」

ちやんと考えてるんだか考えてないんだか分からないこの方は…
チョコレートを何個も握りつぶしてべちよべちよになった手を満足
そうに見ながら魔王様はあつという声を漏らした。

「人魚の肉って食べると不老不死になるんだよ。それっていいこと
なのかな?

前その人に聞いたことがあるんだけど寂しいんだってさ。君はなり
たい?」

「まあ不老不死になりたい奴はいっぱいいますけどね。ぼくは遠慮
します。」

「だよね…そんなのになりたがるのは強欲な奴らだけだよ。…でも
少し気になるよね?」

「…!? まったく!」
嫌な予感がする。

いや、嫌な予感しかしない!!

「今から人魚を捕まえに行こう! さあ行くよっ」
的中!!!

「待ってくださいっ! 書類はどうするんですかっ!」?

「帰ったらやるよおっと…」

言うや否や魔王様は軽々と窓から飛び降りた。

ここは三階です。よい子も悪い子も真似しないでください。

「もうっ…待ってください! ぼくも同行しますっ。」

仕方ないのでぼくも魔王様を追いかけてはしたないけど、窓から飛
び降りた。

「じゃ行こうか? 次はピーターパン症候群シンドロームについて話をしてあげよ

う!」

「意味分かりません!」

「そういう僕はサザエさん症候群だけだね。」

「何なんですかそれ?!?!?」

魔王様はぼくの知らないことをよく知っている。

ぼくはそのほとんどが理解できないけどまあ面白いと思う。

そういえば頬にチョコレートがついたままだった。

チョコレートは外の冷たい空気に晒されて完璧に固まってしまった。

「もうっ魔王様のせいでチョコレートがあ!」

「じゃあ舐めれば?舌をにょーんと伸ばして…」

「できるかあああっああ!」

第二十話 魔王様とぼく。(後書き)

この話は十九話のちよつと前の話ですかね。
ややこしくすみません…

第二十一話 下級悪魔

「カインはいないのかっ!？」

「まだ帰ってきてないようです。」

「じゃあどうする?」

「とりあえず着替えましょう。こんな格好じゃ動けません。：幸いこちらに被害が及ぶにはまだ時間があるようですし」

こんな非常事態だというのにシアンは冷静だった。

桜魔が頷くと身を翻し部屋から出ていった。

壁に掛けられた木製の時計の針は午前二時四十分を指していた。時を刻む針の音だけが静かに響く。

服に袖を通しながら桜魔は考えを転らせる。

あの夢のことだ。

彼女は身体が近くにあるから話が出来ると言っていた。

それは前回の時よりもより繊細にはつきりとしていて今でも思い出せる。

それはつまり彼女の身体がこの近くにあるということだ。

それがどれくらい距離かはわからないがそう遠くはないはずだ。

探そうかとも思ったが今はそれどころではない。

自分が今やるべきことは現状把握だ。

着替えが終わったとほぼ同時に扉をノックする音が聞こえ、返事を待つことなくシアンが入ってきた。

「行きましようか。まずは村の様子を確かめて何があったのか知っておかないと…」

「そうだな。その後はカインを探すか？」

「はい。…でも村がおかしなことになっている原因が分からない限り、迂闊に動くのは危険です。彼は不老不死の身体を持っているのでほとぼりが冷めてから探しに行ったほうがいいかもしれません…。まあその事は後々考えることにしましょう。」

「わかった。じゃあ家を出よう。」

部屋から出て家の出口へと向かう。

窓の外はまだ暗く、街のほうは赤い炎の灯りが見えた。

金属製のドアノブに手をかけると微かだがそのドアの向こうに人の気配があった。

二人…いや三人ほどだろう。

シアンもその気配に気づいたのか慌てて元の部屋に引き返す。

「桜魔、こっちに来てください！今から結界の魔法陣を描きます。」

「わかった」

シアンが杖で床に魔法陣を描くのを横目で見ながら部屋のドアに意識を集中させる。

足音が三人分こちらに向かってるのがわかった。

だんだんと足音が大きくなり気配が近づいてくる。

シアンはまだ描き終えていないようで必死に杖を振り何か呪文を唱えている。

「急げっ！」

「今やってますっばー!!」

小声で怒鳴りながらシアンを急かす。
チリチリと身体中に熱を感じ汗をかきはじめていた。

「おいこつちの部屋にはなかったしやっぱここじゃん?」

「だな。…メンドクセー」

「だなんだ。何で俺達がこんなこと…ホントだったら今日一杯人間共をギタギタに出来たのにいっ!!」

「あゝあばれてえっ…」

閉じた扉の外から籠った声が聞こえる。

その声が扉の前から聴こえてきたころ、やっと魔法陣が完成した。

二人は小さな魔法陣の中で息をひそめ、時が過ぎるのを待った。

「はいはい文句は魔王様に言えよ。なんたってこの任務は魔王様直々の隠密任務だからな!」

「言えるかばあか!」

「てか何で俺達なワケ?」

「知るか。…んじやとつとこ終わらせようぜ。」

「とつとこ…ハム太」

「何言っつてんだ馬鹿あ」

「うっせっ!!」

ガチャッ

ドアが開き三人の男が入ってきた。

正確には三人の悪魔だが。

全身真っ黒でコーディネートされた服に背中から生える漆黒の翼。耳は尖りズボンの上から可愛い黒色の尻尾が生えている。

翼や尻尾を隠せてないところをみるとどうやら下級悪魔のようだ。

「…で、アレ何処にあんだっけ？」

「確か…ベッドの下？」

「だな。」

男たちはそう言うつと先程まで桜魔が眠っていたベッドの下から大きな白い箱を引っ張り出した。

箱は縦2m70?ほどの物だ。

特に装飾は施されておらず、金具で開閉できるものとなっているようだ。

金具部分には大きな南京錠が取り付けられている。

「これだな。…で、これ開けんの？」

「いや、そのまま持っていく。俺前持つからお前後ろな。お前は真

ん中。」

「りょーかい！」

「ラジャツ!!！」

「丁寧に扱えよ。傷でも付けたら俺たちの首が飛ぶ。」

「へいへい」

そうして指令された通りの配置ついてゆっくりとその箱を持ち上げようとする。

が、これが意外と重かったらしく後ろを持っていた奴が眉を顰めた。

「なんか…重くね? 一体何が入ってたんだよ?」

「さあ？何も音はしないし小物ではないよな。…最強の魔物！？」

「うええ…気持ちわりい」

「黙って運べのろま。」

慎重に運び出すとする前の男に対して他の二人は重いだの気持ち悪いだのと文句を言いながら歩き出した。

随分と時間をかけて慎重に家から箱を運び出すと悪魔たちはそれを担いだまま飛んで行った。

辺りに完全に気配がなくなったのを確認し、魔法陣を解くと桜魔はその場に座り込んだ。

「あゝあーっ、びびった！！」

「ほんと、驚きましたね。…でも彼らは何を持っていったんでしょうか？」

桜魔はこの部屋にいて何か気付きましたか？」

「知るかあんなもん。あるのさえ気づかんかった。そんなもんあとで本人に確認したらいいことだろう。」

「でも…、…そうですね。じゃあカインさんを探しに行きましょうか。」

シアンは苦い顔をしながらも自分の中での優先順位を決めたようだ。床に付けたままの尻を持ち上げ、膝を使い立ち上がった桜魔は赤色に染まる窓の外を見た。

まだ夜明けは遠い。

第二十二話 罪悪感

荒い道を下りながら桜魔とシアンは戦闘準備を整えた。

「シアン、剣一応持つとく！」

「はい。いつ攻撃されてもいいよう気は抜かないで下さいね。…今回私も前に出て戦いますから桜魔は私のことは気にせず自分の身の安全を最優先してください。…絶対に。」

「ああ、わかった。」

「…まあといっても無闇に戦闘を始めるのではなくまずは様子見といきましよう。」

彼らの目的も分かってませんし。」

シアンは面倒くさそうにため息を吐くと走る速度を速め桜魔の前に出た。

「ここからは敵にバレないように茂みを走って民家のほうへ行きま
す。」

はぐれないように私の後についてきて下さいね。」
「わかった」

桜魔の返事を聞くや否やシアンはすぐ横の茂みに入り込んだ。
姿が見えなくなる前に桜魔もその背中を追う。

置いていかれないようにとシアンの速いペースに息切れしながらも
走った。

「大丈夫ですか桜魔？」

「あ…あぁっ、だい…じょぶだ」

禁の民家が見えやすい所で立ち止まったシアンが桜魔を気かけ声をかけるが桜魔は答えるのも辛そうだ。

息切れしている桜魔に対しシアンは汗ひとつかかず涼しい顔をしている。

地面に座り込んでいる桜魔を見て苦笑しながらシアンも桜魔の隣にしゃがみ込む。

桜魔の背中をさすりながら視線は民家の方へ向けられている。

その視線の先には悲惨な光景がひろがっていた。

まさに一方的な殺戮。

悪魔が人間を切り殺し、焼き殺し、その度に赤い血が宙を舞う。

悲鳴悲鳴悲鳴悲鳴。

思わず喉の奥から異物が込みあげてくる。

「…っ何だ、よコレ」

「桜魔…。とりあえず落ち着いてください。見たくないのなら見なくてもいいですよ？」

シアンが優しいほほ笑みを向けるが桜魔は何も答えず、ただ目の前の光景を見続けた。

自分が魔王だったころ、自分は一度も城から出たことはなかった。

もちろん戦場に赴くこともなかったわけであってこんな酷い光景を目の当たりにしたのは人生で初めて。

それがこんなにも酷いものだったとは…

桜魔が落ち着きを取り戻してきたころ、シアンが急に立ち上がった。

「大体のことは分かりました…この村は国の食料のおよそ40%を作っている村。」

悪魔たちはここを潰してこの国を追いこもつとしているんです。」

「そお…なのか。」

「ええおそろくは。この村は一応広いですから作物などを焼き尽くすには相当時間がかかるでしょう。」

なので今からもう次の街へ向かいましょう。」

「は!?!いいのかカインは…」

桜魔は立ち上がりながらシアンの腕を掴む。

シアンは桜魔の顔を見ないまま小さく頷いた。

「彼は不老不死ですから死ぬことはありません。なのでほとぼりが冷めてからまた来ましょう。」

いいですね?」

「…分かった。」

「では剣をかまえて。なるべく戦闘はしたくないので隠れながら行きますが…気は抜かないで。」

シアンの気迫に押され桜魔が頷くとシアンは桜魔の手を解き、辺りを警戒しながら走りだした。

それにつられて桜魔も走りだす。

幸いにもこの周りにいる悪魔たちには気付かれていないようだ。

炎が燃え家が崩れる音、人々の悲鳴、悪魔たちの笑い声が二人の足音を消す。

その雑音は桜魔の頭に直に響き頭が痛くなった。

昼間は市場だったはずの場所はもはや原形を留めていなかった。

焼け崩れた瓦礫がれきの下には多くの人間が下敷きにされていて悲痛な叫び声を上げている。

それを優越感に浸りながらニヤニヤと眺める悪魔たち。
その光景にもはや恐怖しか感じられなかった。
ふと目に止まったのはアキネがやっていた店。
やはりそこも焼け崩れていた。
その瓦礫の下に、人。

「っ桜魔！？こんなところで何立ち止まってんですか！早く行きましよう」

「…シ、アンあれ」

「何ですかこん…」

いきなり立ち止まった桜魔に気付いたシアンは桜魔の手を引きまた走りだそうとした。

しかし桜魔の視線は別のところに向けられ、一向にそこを動かさずはしない。

桜魔が指をさす方向を見てシアンも言葉を失った。

瓦礫の下には見たことのある人間が居た。

瓦礫の下敷きにされ悲痛な声を上げ、泣いているアキネ。

桜魔は意識をせずとも足が勝手に動くのが分かった。

「あ…アキ」

「桜魔！！」

アキネに向かって走りだそうとする桜魔をシアンが止める。
掴んだ腕には凄い力がこもっていた。

「行かないでください！私たちは早くこの村から出ていかなきゃいけません。」

私たちが向かうのはそっちじゃありません。」

「でも…アキネが」

「貴方は馬鹿ですか！！こんな状況で他人を心配している余裕はありません！」

桜魔の言葉を遮りシアンは顔を真っ赤にして言う。

シアンという言葉に納得がいかない桜魔は何かシアンの手を振りほどこうとする。

しかしシアンは全然離そうとしない。

「っ離せ！！お前は、アキネを見捨てるというのか！！？」

「…はいそうです。彼女を助けるには悪魔たちと戦わなくてはいけませんから。」

だから、見捨てます。」

憤慨する桜魔に対して先ほどとは打って変わって冷静に、冷酷にそう言うシアンに桜魔は一瞬脅えた。

同じ人間のはずなのに何故彼女は簡単に見捨てる事が出来るのだろう。

わずかだが同じ時間を共有し、あんなにも一緒に笑っていた相手なのに…

「俺は…俺だけでもいいから行く！お前は先に」

「雑魚が何ほざいてんだか。貴方が行ったところで何も変わりませんよ？」

大体、貴方にはアレを何とかする力なんてありません。」

シアンの冷めた視線が突き刺さる。

感情のこもっていない瞳。

どこまでも深い闇がその中に見える。

無意識の内に掴まれた手を引っ込ませようとしたがシアンの力の方が強く、桜魔の手を離そうとはしない。

「そ、そんなのやってみなくちゃ」

「分かりますよ。貴方は弱い。力も魔力も、精神も。だからそうやって誰かを助けようとする。」

そして最後は、死。自分が無力なのを知らずにただ動くだけ。それはただのエゴに過ぎません。自己満足の為の行為だけ。何もできないせに口だけは達者ですね。現に今まで貴方は自分の力だけでちゃんとこの地面の上に立っていましたか？

できてないですよ。だから足元^{すく}掬われて居場所まで失うんですよ。

「うづうづるさいいいい！！！黙れ俺は…」

シアンからの投げつけられた言葉に言い返すことが出来ず、ただ俯いた。

振り払おうとした手にはもう力が入らなかった。

チラリと一度アキネのほうに顔を向ける。

まだ苦痛に声を上げている。

「…アキネ」

本当に小さなシアンの耳に届いたかも怪しいような小さな呟き。

しかしそれはアキネに聴こえたように顔を上げた。

ばかりと目があったてしまい桜魔は心臓を掴まれたような感覚がした。

アキネは何かを必死に叫んでいる。

しかし桜魔の耳にはそれが何と言っているのか聞き取れなかった。

自分はアキネが助けを求めていることに気付いているが助けることは出来ない。

後ろめたさにアキネから視線を逸らし俯いた。

「そう、それでいい。貴方は無力なものですから自分の身の安全だけを心配して?」

耳元でシアンが優しく囁く。

耳にシアンの甘い息遣いが聞こえ、離れていく。

「行きましようか。」

ただ俯くことしか出来ない桜魔の手を引きシアンが微笑む。

どこか寂しそうな諦めを含む笑顔。

しかし桜魔はそれさえも気付かずただ目の前の現実から視線を逸らすように目を閉じた。

視界が遮断されても耳は現実で起こっていることを桜魔に伝える。

悲鳴悲鳴悲鳴…

背後で何かが軋む音がする。

シアンは目を瞑る桜魔の手を引き歩き出した。

桜魔が最後にもう一度アキネを振り返るとちょうど目があってしまった。

その瞳の奥には闇しかない。

絶望。

瞳から零れた涙が頬を伝い地面に落ちた。

たすけて

アキネの口から溢れたのは桜魔への願いだった。しかしそれはもう無理なことだとアキネは悟ったのだろう。

桜魔に向けて微かに微笑んだ。
痛みと悲しみに笑った顔が歪んでいる。

その笑顔を見て桜魔はまた地に足を貼り付けられたように動けなくなってしまうた。

その笑顔が桜魔の視界から、消えた。

何もかもがスローモーションに写り全ての音がこの世界から消えた。そんな錯覚を起こすほどその光景が理解できなかった。

木が軋む大きな音と共に上から落ちてきた瓦礫がアキネに降り注ぎ、アキネの姿が見えなくなった。

その瞬間、あれほど動かなかった足が勝手にアキネの方向へ向かった。

シアンはそれに気づいていなかったのか桜魔の手をあっさりと離してしまった。

「なっ！？桜魔止まってっ…今行ったら！」

背中にシアンの制止の言葉が飛んでくるがそんなもの今は構っていられなかった。

ただ本能のままに、身を任せて足を走らせる。

「アキネツ！！」

自分の手が傷つくことも気にせず一心不乱にアキネの上に落ちた瓦礫を退かす。

名前を何度も呼び続け、手を動かす。

「アキネアキネアキネツ！！！！」

「っ桜魔あ！！」

シアンの叫びも届かず瓦礫の山を掻き分ける。

やっとのことでアキネの顔が瓦礫の中から見えた。

そこからは力任せに瓦礫を退かし、アキネを何とか瓦礫の中から引き出した。

しかしそこにアキネはもういなかった。

あるのはただの器。

傷だらけになったアキネの身体だけ。

残ったのは罪悪感。
込み上がる喪失感。
そして、虚しさ。

その器を持ったまま桜魔はもう一度その器の主の名前を呼んだ。

「アキネ……」

しかしもう返事が返ってくることはなかった。

アキネの死体を持ったまま呆然と座り込む桜魔にシアンは近づくとができなかった。

それは感情的な問題ではなく、今の状況が原因だ。

桜魔があそこへ向かった為周りの悪魔たちが桜魔の存在に気づいてしまったのだ。

桜魔とシアンの間には間隔があったため自分は気づかれることはなかったが桜魔がアレでは使い物にならないだろう。

悪魔たちを敵に回す覚悟をしてナイフを握りしめた時だった。

桜魔の回りに集まってきていた悪魔たちが消えた。

否、凄い勢いで吹き飛んだ。

駆け出そうとした足を何とか止め、状況を把握する。

桜魔はそのことにも気づいていないようですとアキネの死体を見つめている。

その背後に誰かが降り立った。

漆黒の羽が空に舞う。

羽は炎の灯りに照らされ、まるで生き物のように空を泳いでいた。

「…おい」

第二十三話 知ってる。

冷たくなり始めた身体は固くなり、あの柔らかく温かな手の温もりはなかった。

夜風に吹かれ冷え切った身体を抱きしめて桜魔は静かに涙を流していた。

「おい…」

背中から男の低い声が聞こえたが桜魔はそれに気づいても振り返ろうとしなかった。

それが敵だとして、もう別に死んでもかまわないと思った。

アキネを見捨てた自分なんかが生きていることさえも罪だと思えた。

「…お前、あの勇者とかいうやつだよな。」

桜魔が何の反応も示さないしていると男は桜魔の肩を掴み、無理矢理振り向かせると桜魔の頬を殴り飛ばした。

痛みを感じる間もなく、次いで腹に男の蹴りが入る。

その衝撃にアキネを離してしまい、桜魔は頭を地面に強打する。

痛みは数秒遅れで桜魔の身体を走った。

「あうっ…ぐう…」

蹴りが見事に鳩尾に入ったようで一瞬息が出来なくなる。

腹を押さえ蹲すくまる桜魔さくらまに更に追い打ちをかけるように蹴り飛ばす。

「かはっ…っうがああああっあああう」

転がった拍子に落ちていた先の尖った太い枝が腹に突き刺さった。腹の辺りはどんとどんと血が滲み出てきている。

痛みに動くこともできず喘ぎ声を漏らす桜魔を男は見下していた。

痛みからくるものなのか、感情的なのか分からない涙が頬を伝い地面に落ちる。

涙で歪む視界のせいで男の顔は分からない。

しかし、どこかで聞いたような懐かしい声だった。

「お前がこの世界に来てからだ…全部変わっちゃった。お前のせいでな。」

静かな声音で、しかしそれ以上の迫力のある言い方。

お前のせい

その言葉を俺は何度聞いただろうか。

そう、全部俺が悪いことになっている。

なぜ？

「お前があいつを…魔王を変えた。」

違う。
変えたんじゃない。
入れ替わったのだ。

「そのせいであいつは生物としての大切なものをなくした…」

それがあいつの望みだったんだろ？

何で俺が責められなきゃいけないんだ。

「あいつには…俺たちみたいになっただけじゃなかった。あんなになるなら…何でとどめをさしてやらなかったんだ？」

本当、何であいつはそんなことしたんだろうな…
俺のほうが聞きたいことばっかだよ

「なあ…何であいつはあんな風になっちゃったんだ？何があいつをそんなに歪ませたんだ？」

…答えてくれよ。」

気がつけば男の声は震えていた。

何かにすぎると弱々しい声で返答を求める男を桜魔は不思議に思った。

もし自分の予想が合ってるならば…

彼はもっと強い男ではなかっただろうか？

「あ…すかつ？」

掠れる声でその名を呼ぶ。

声を発する度に腹がビリビリと電気を流されたように痛む。

「な…何で俺の名をっ」

目の前の男は明らかに同様しているようだ。
予想が確信へと変化する。

「飛鳥…あすかあすかあすかあすかあああっ」

激痛を訴える腹を無視し、腕を伸ばし飛鳥に触れようとする。
掠れる視界にはつきりと飛鳥の顔が見えた。

驚きと困惑が入り交じった複雑な表情をしている。
手に触れるとそれだけで飛鳥の体が震えているのが分かった。
触れた手の温もり。

それは確かにそこにあった。

「あっ…すか」

「なん…」

飛鳥が何かを言いかけた時、不意に空から大量の水が降ってきた。
それに気づいて飛鳥が後退する。

しかし降り注いだ水は姿を変え鋭い槍になり飛鳥を追いかける。

「ちっ…クソがっ」

それを繰り出した風で飛び散らせる。

「あ…す」

「桜魔！！大丈夫ですか!？」

飛鳥の名前を呼ぶ声を遮りシアンが桜魔の前に下り立つ。
シアンという言葉に飛鳥が不思議そうな声を出す。

「そいつの名前：桜魔じゃないだろ？」

「…いいえ。彼は桜魔です。」

シアンは飛鳥を見据え、静かに言った。

飛鳥はそれでも不思議そうな顔をしていた。

飛鳥が悩んでいるうちにシアンがさつと桜魔に治癒魔法をかけながら枝を引きぬく。

そのおかげか多少の痛みは引いてきた。

「…桜魔、立つてここから逃げますよ」

「いや、待って…くれ。俺はあいつに話がある！」

「えっ…桜魔!？」

シアンが止める隙もなく桜魔は立ち上がると全速力で飛鳥のもとへ駆け寄る。

飛鳥はそれに身構えたが数メートル前で桜魔が立ち止まると構えたまま攻撃はしてこなかった。

「飛鳥、聞いてくれ！俺がどうしてお前を知ってるかを。」

桜魔は真っ直ぐに飛鳥の瞳を見つめた。

困惑している飛鳥は桜魔を見て悩んだ後小さく頷いた。

「馬鹿！！何敵に話しかけてるんですか!？」

慌ててシアンが止めに入るが桜魔は首を横に振る。

「シアンは黙^{てめえ}っててくれ」

見事に桜魔と飛鳥の声が重なりシアンは不満そうに顔をしかめ、一歩下がった。

本人たちもまさかハモると思ってなかったらしく驚いた表情を見せる。

桜魔はそれが嬉しくて笑ってしまった。

それとは逆に飛鳥は照れ臭そうな、微妙な顔をしていた。

「あゝ最悪。…で、話ってなんだよ？」

この雰囲気が苦手なのか飛鳥は横を向いて話題を戻そうとする。しかし桜魔はその反応にさえ笑ってしまった。

いつも同じように話しかけてくれたのが嬉しかった。

「…何笑ってんだよ。」

「いや、お前がいつも通り接してくれるのが嬉しく…て」

嬉しいという感情と同時に寂しさが込み上げ、泣きそうになる。ぐっと唇を噛みしめもう一度真剣に飛鳥の瞳を見つめる。飛鳥もそれにつられて真剣な表情に変わる。

「聞いてくれ飛鳥！お前に信じてもらえるか分からないけど…」

俺は元魔王シークだ。」

「…はあ！？意味わかんねえんだけど！」

「信じる信じないは別として最後まで聞いてくれ。

俺は勇者との戦闘の末、負けた。それで目を覚ましたら何か勇者と

体が入れ替わっていたんだ。しかも魔王を倒せてないとかで周りから見捨てられ、虐げられ、勇者には馬鹿にされ、殺されそうになった。勇者は俺に身体を返してほしかったら自分で探せと言ってきた！そこにこいつ…シアンがやってきて手助けをしてくれると言ってきた。今一緒に身体を元に戻す方法を探す旅をしている。正直言つて俺はこいつがいなけりや今頃そこら辺でゴミのように扱われていただろうな…」

自分のこれまで体験してきたことをまとめるとざっとこんなものだろうと桜魔は思った。

しかし今思えば自分は何て非現実的な話をしているのだろう。

それに客観的に見れば自分は何て酷い状況に陥っていたのだろうか。…泣きそうになる。

そして本当にシアンには助けられていたと改めて思った。

飛鳥にやられた傷はじわじわと痛みを甦らせてくる。

いくらシアンに治癒魔法をかけてもらったといえどあれは応急手当程度のものだったのだろう。

桜魔はギョツと唇を噛みしめてその場に止まった。

「…信じられるわけねえだろ。何だよそれ…馬鹿じゃねえの？」

「あす…」

「意味わかんねえよ！！あいつが変わったのはお前のせいじゃないとでも言い逃れする気かよ！！」

ふざけんじゃねえよ！！んな有り得ねえ話、っ信じられるわけないだろ！！」

それは明らかな拒絶だった。

桜魔の淡い期待は脆くも崩れ去り、桜魔は崩れるようにその場に膝をついた。

やはり…信じてもらえなかった。
それは分かり切っていたことだった。
しかし信頼を置いていた仲間拒絶されるのがこんなに悲しいとは
予想もついていたいなかった。

「だいたいつそんな嘘に騙されるほど俺は馬鹿じゃねえっ！…！」
「…そんなこと、とつくに…知ってるよ。お前は配下の中でも一番
頭の切れるやつだったからな…」

苦い顔のまま飛鳥は桜魔から顔を背けて叫ぶ。
彼があんなにも取り乱しているところは初めて見たと桜魔はほくそ
笑んだ。

飛鳥はそれが悔しいのか握り締めた拳をさらに強く握りしめた。

「お前に俺の何が分かるってんだよ！！？何も知らないくせして…」
「知ってるよ。お前のことなら知ってる！！年はっ107歳、自分
の実力だけで大出世を遂げた天才で、
人一倍…いや、何十倍も努力家で！いつも独りで、はあっ無理して
…なのにそれを表には一切出さず俺たちにつ…ぐっ心配かけないよ
う…って気丈に、振舞って…不器用で…優しい俺の、…お兄ちゃん。」

桜魔の最後の言葉に飛鳥は驚いて顔を上げた。

その言葉が出てくるのは予想外だったのだろう。

飛鳥は何かを桜魔に言った。

しかし腹の傷が叫んだことで再発したのか、出血の量が多いらしく
頭がグラグラとする。

もう何の音も耳には入らない。

最後に見えたのは飛鳥の悲しそうな顔だった。

第二十三話 知ってる。(後書き)

皆さん気付いてらっしゃると思いますが…

このネーミングセンスのなぞ…!

どうにかありませんかね…

第二十四話 有言実行（前書き）

飛鳥視点の話です。

先に言いますが桜魔に血の繋がった兄弟姉妹はいません。

第二十四話 有言実行

バチンッ

鈍い音のすぐあとに頬に激しい痛みを感じた。叩かれた左頬はジンジンと熱を帯びる。

「ばっ…かじゃないの？」

そして罵倒の言葉。

俺は冷たい視線と哀れみが入り交じった視線の中で何も言わず、俯いた。

「何で魔王様の命令に背いたの？勇者には手を出さなって…あんたそれを承諾してこの作戦を任してもらったんでしょ？」

「…それはそうだけど…」

「…あんたらしくもないわね。何かあったの…？」

最後の言葉はきつとあいつの、シャロルの優しさだろう。

「まあ飛鳥もやっぱ生き物！感情に流されることだってあるんだよ。仕方ないよね」

なんて笑いかけてくる了は俺の肩に手を置いてきた。気持ち悪くてすぐに払い除けましたけど。

「まったく馬鹿だよね」

「まあ…気持ちにはわからなくもありませんが…」

「ふん…所詮は貴様も子供だな」

「いや、こればかりは仕方ねえって！」

「エルは飛鳥のことイケナイ子だと思うなー！！」

「もうやっちゃったことは仕方ないと思う。」

罵倒と慰めの言葉をかけられるとどうしようもなく悔しかった。悔しくて拳を握りしめると手のひらに血が滲んだ。

暫くそんな時間が続くといきなり扉が大きな音を立てて開いた。

「やつほー…みんな元気かなあ？」

「…おはようございます。」

入ってきたのは魔王と最近魔王の側近になったスピカとかいうやつだ。

上機嫌な魔王に対してスピカの方は俯いたままで嫌そうな顔をしている。

…そりゃそつだろうな。

なんの功績もないただ運だけで選ばれたあいつは回りの悪魔たちから反感を受けている。

こんな魔王の直属の部下ばかりの中にといたら居心地も悪いだろう。

「うん！きょうもみんな元気だねって、おやおや？飛鳥は元気がないねえ」

わざとらしい言い方で俺の顔を覗き込んでくる魔王から俺は顔を背けた。

…今、こいつの顔を見るのは嫌だった。

そんな俺にあからさまなため息を吐いた魔王はボンと俺の頭に手を置いた。

「ま、あんま気にしなくていいよ。別にあいつが死んでないならね。でもほんっと、らしくないね〜！」

盛大なため息を溢すが特段気にしている様子は見えない。

「そんなに僕のこと好き？ いやあ飛鳥がそんなに僕のこと好きなんて…まじウケるわ。」

なんて、馬鹿にしたような乾いた笑いを漏らすそいつはやはり俺の知っている魔王じゃない。

それはあの時、魔王と勇者の戦いのあとからずっと感じていたことだ。

何だか頭がモヤモヤする

もし、あいつの言ってることが本当のことならば…

…俺はもしかするとあの勇者の言葉に淡い期待をよせているのかもしれない。

なら…賭けに出してみるのもいいかもしれない。

俺がずっと黙ったままでいると魔王はその反応がつまらないのか俺にかまうのを止めた。

「あゝあつまんないなあ！」

そんなこと思っていないだろう楽しそうな声音が頭の上から聞こえる。それにいち早く反応したのは、やはりと言っていていいだろうだった。

「んなら俺と剣術の稽古でもや」

「るわけねえだろ。」

了の言葉を切り捨てるように酷く冷めた声で言う魔王に周りは黙るしかなかった。

了も心底傷ついたような顔をしている。

「あゝあつまんない！そうだスピカ、また君に面白い話を聞かせてあげよう！」

「え！？いえ、あのっ……」

「ほら逝くよ〜！」

「魔王様、字が違います！って待って下さあああ」

拒否する間もなく腕を持たれ連れていかれるスピカを了が一瞬、すごい形相で睨み付けていた…他のやつらは気づいてないみたいだが、来た道を引き返し魔王は上機嫌で鼻歌を歌い始める。

「かつぱっぱらっぱあゝ」

奇妙な歌をうたう魔王の背中を俺は追いかけた。

他のやつには聞かれなくなかったから今まで待っていた（スピカは空気として）

魔王が廊下に出たのを見計らい俺はその背中に声をかけた。

「なあ！俺はお前にとってどんな存在だ？正直に言ってくれ…」

これは賭けだ。

あいつが俺のことをああ呼んでくれればこのモヤモヤは解消するはずだ。魔王は少し考える仕草をしたあと俺に優しく笑いかけた。

「飛鳥はね、僕にとって大切な仲間だよ。それ以上でも、それ以下でもないよ。」

「…そうか。ありがとな。引き留めて悪かったな。」

俺はそうとだけ言うと

身を翻してもと来た道を歩き出した。

あの部屋には戻らず、適当な空き部屋に入り、崩れるようにその場に座り込んだ。

「ああああっマジかよ…」

俺の中で何かが弾けた。

いつだったんだろうか…

あいつが泣き止まない時があった。

天下の大魔王ということもあってあいつの父親は様々な女と関係を持っていた。

それに嫌気がさした母親は別の男の元へ転がり込んだ。

つまり両親がそろって不倫をし、一人息子を置き去りにしていた。

父親のほうは幼い頃から魔王の座につくことが決まっていたから、そりゃもう我が儘な性格だった。独占欲が強く自分の所有物が他人にとられること自体が気に入らず、他の男の元へ転がり込んだ母親を気に食わず処刑した。残されたあいつはまだ3歳。

母親からも父親からも愛されなかったあいつは、愛を知らない子供。笑うこともなければあまり自分を出さない、ただ黙々と言われたことをやる機械人形のようなやつだった。

はつきり言って俺はあいつのことを気味が悪いと思った。

…そんなあいつを見兼ねたシャロルが俺たちお目付役…家庭教師たち…一つの提案をしてきた。

『シーク様には愛が足りないと思うの。だから、家族が必要だと思うの。』

『家族はもう魔王様とお妃様がいるだろう？馬鹿か貴様は』

『リース黙れ。』

『なっ！？飛鳥貴様あああつ！！！！』

『まあまあまあ。シャロル、続けて？』

『うん。…で一つ提案があるの。私たちが家族になってみない？』

『…つまり家族ごっこをやれってんのか？』

『まあ、そういうことね。どうかしら？』

『俺は賛成だな。シーク様、寂しそうだもんな。』

『馬鹿馬鹿しい。なんでそんな幼稚な遊びを』

『リース黙れ。』

『…飛鳥あああああつ！！！！』

『じゃ、私は母親、リースが父親、了がお兄ちゃん、飛鳥は弟』

『断る。せめて上にしろ。何で俺が弟なんだよ！？』

『だって上も下もいたほうがいいかなって？』

『幼稚な貴様には弟がピッタリだろう?』

『うるせえよ屑男!とにかく下は嫌だ!』

『分かったわよ!あんたもお兄ちゃんね。配役決まったんだから今から始めるわよ!』

『え、もう始めるの?』

『有言実行、今やらないでどうすんのよ?』

…とまあ、この作戦は上手くいってあいつも感情豊かになったわけだが。

しかも今までそんな仲良くなかった俺たちお目付役も仲良くなった特典付き。

あれからあいつは俺のことをお兄ちゃんだなんて胸糞悪い呼び方をするようになった。

まあ二人つきりの時とか甘えたい時とかだけだったけど。

だから、あいつの…魔王が俺のことを仲間と言ったのが驚いた。

あいつは俺たちを家族と呼んでいたから。

…やばい、何で俺あんなにあいつのこと信用てか信じてんだろ

でも、俺は今のあいつが嫌いだ。

嫌だ。

どちらかと言えばあの勇者のほうが雰囲気似てたし…

俺はどうしたらいいのだろう

「あー…どうすりゃいいかなあ」

なんて口に出してみるけど答えは決まってる。

あとはタイミングだ。

これは慎重にいかなくゃいけない。

デリケートな問題だ。

俺はこの問題を処理しなくちゃいけない。

「俺はこの問題を処理しなくちゃいけない。」

口に出すのは簡単だ。

それをやり遂げられるかどうか、だ。

「…有言実行。俺にはやらなきゃいけないことがある。」

そう、俺にはやらなきゃいけないことがある。

第二十五話 答えは保留

そつと目を開くとそこは相変わらずの殺風景が広がっていた。
驚きの白さ！

…なんて言ってる場合じゃないか

この空間には足りないものがある。
彼女がいない。
どこを見てもいない。
この空間に自分しかいない。

『…いないのか？』

返事は返ってこない。

『なら、俺は待ってるか。』

そう言っつてその場に腰を下ろす。
この真っ白な空間はどこか居心地がよかった。
もっとも、彼女がいないことだけが気にかかるが…

+
+
+
+

「起きません、ね。」

「そうだな。これでもう3日か。」

「はい。」

シアンは目の前で眠る桜魔の顔をのぞきこんだ。

とても穏やかな顔で規則正しい寝息をたてている。

最近まともな睡眠をとれていないので多分そのせいなのだろう…と思いたい。

隣で心配そうに自分を見てくるカインに笑顔を見せる。

もちろん、作り笑顔で。

ただし今回はどこか悲しみを織り交ぜた笑顔を見せる。

こんなときにとびきりの笑顔を見せるのは些か不謹慎だろうとの配慮だ。

表情の操作は完璧だったようでカインは同情の混じった視線をシアンに向けてきた。

しかし気を使うのも疲れる。

彼にこの場にいられては邪魔だ。

どうにかして彼をこの場から遠ざけなくては…

「…この場は私だけでも大丈夫ですのでカインさんは村の人を手伝ってきてください。」

「いや、でも……うん。分かった。桜魔のこと頼んだな。」

「はい。」

カインが出て行き、気配もなくなったところでシアンは作っていた表情をといた。

「ふう…まったく困ったものですね。」

小さなため息を吐いて窓の外に視線を向けると、半壊した村が目に入った。

彼は、あの飛鳥とかいう悪魔は桜魔が倒れた後、他の悪魔を連れて撤退していった。

しかしその時にはもう遅く、村の多くの人間が死傷、村の半数以上の家が焼かれた。

今はその復興に向けて村のほとんどの人間が寝ずに動いている。カインはやはり死ぬことはなく、村の復興を手伝っている。

シアンが治癒魔法を使えることは村の人間には伝えていない。

可哀相だとは思うが今は桜魔のことが最優先だ。

こんなところで力を消費するわけにはいかないのだ…

彼の手をそつと握るとほんのりと温かい。

そこから治癒魔法をゆつくり流し込むように与える。

彼はいま、一切の食事もとれないのでこうしておかなければ死んでしまう可能性もあるのだ。

「私は何で貴方というんでしょうね。」

眠っている彼に問いかけるが答えは返ってこない。

まあ期待も何もしてはいないのだが…

「あの檻こから出ることには出来たのだから、もう貴方は用無しなのに…」

そう、最初の目的は達成したのだ。

自分はもうあの檻の中から抜け出した。

別に困っている人がいたら助けるなんてお人よしでもない。

では何故、いま自分は彼の手を握っているのだろう。

「自分勝手に…意味分かんないし…」

彼が魔王というのは本当のことなのだろうか。それが事実だとしたら自分はとんでもないやつと一緒に旅をしている。

厄介事には巻き込まれたくない。しかし、離れられない。

「私は本当に、何がしたいんだか…」

自然とため息が漏れる。

桜魔の手を握っている手とは逆の方の手で弱く自分の右目を撫でる。正確には眼帯だが…

自分はいつになったらコレを外せるのだろうか…

「…貴方は、私に何も聞いてきませんね。」

眠っている彼に話かけているなんて馬鹿みたいだと自分で思う。しかしなぜか口から言葉が漏れる。

旅の仲間は信頼のおける人間が最も最適だ。

お互いを把握し、協力しあうもの。

しかし私たちの間には何もないし、お互いの把握もしていない。

それはこっちからしたら助かるが、パーティーとしてはどうなのだろうか。

二人の間にあるのは絆ではなく、大きな溝。

利害の一致だけで成り立った関係。

…利害？

このたびは私にどんな利益をもたらしてくれるのだろうか。

「ああ…何だこれ。私は結局何がしたいのかなあ」

さつきからこれの繰り返しではないか。

いや、彼と旅を始めた時からずっとだ。

ズルズルと答えを出さずにやってきてしまった。

今ならまだこの手を離せるはずだ。

もっと日が進めばきっと自分はここから離れられなくなる。

「どうすればいいのかなあ？」

何て誰に聞いても答えは返してくれない。

分かってる。

そんなことは小さいころに学習した。

自分のことは自分で決めなきゃいけないのに…

「いや、今は先のことを考えよう。」

答えは保留。

また保留

その繰り返し。

繰り返しの先に答えは待っているのだろうか？

第二十六話 ありがとう(前書き)

今回短いです。

桜魔視点になっています

第二十六話 ありがとう

いつまで経っても彼女はここに現れない。

俺はただ彼女が現れるのを待った。

しかし夢の中では時間経過の感覚までないので今が何時かなどわからなかった。

それ以前に自分はどうやってこの空間から抜け出せるのか、それさえも知らないのだ。

彼女がいなければこの空間で自分は何も出来ない。

『どうすりゃいいんだ…』

今は辺りの散策をしているが真っ白な景色は一向に変化を見せる気配さえない。

ただ一面に広がる白の迷路を俺はたださ迷い続けた。

行けども行けども白、白、白。

夢の中のはずなのに疲れさえ感じてくる。

額には汗が滲んできた。

それを拭ってただひたすら足を進めた。

どれくらい歩いたのだろう…

もう足の感覚さえなくなってきた。

しかし身体は勝手に前へと進もうとする。

しかしこの永遠ともいえる空間に微かな変化が起こった。

耳を澄ませなくては聴こえないであろう、小さな歌が耳に届いた。

ゆったりとした綺麗なメロディーが空間に響くように聴こえてくる。

途切れ途切れに聴こえてくるそのメロディーはどこか寂しげで自然と体がその音源へ向かう。

まるで引き寄せられるように…

+ + + +

ふつと目を開ければそこには相変わらずの笑みを浮かべたシアンの顔があった。

「桜魔、目が覚めたんですね。よかった」

何だかその笑顔に安心した。

自分は一人ではなかったのだと彼女が握ってくれている手の温もりでそう思えた。

自然と自分の表情まで柔らかくなるのがわかる。

「おはよう。」

シアンが何故、俺のためにこんなことまでしてくれるのかは分からない。

けれど、今の俺には必要なのだ。

それはこの世界で生きていくためであり、俺自身を成長させるために

自分を支えてくれる誰かが。

それがシアンであり、理由を知るにはまだ早いと思う。

今は自分がしなくてはいけないことはたくさんある。

彼女に心配をかけさせないためにも、自分は成長しなくてはいけない。

自分だけの足で立つのは俺には不可能だ。

まだアカチャン同然の俺には支えが、彼女が必要なんだ。

だからこれからも傍にいてほしい。

傍で俺を支えてほしい。

…なんてこと、口にはだせない。

だからこの気持ちのをせて言おうか。

精一杯の感謝をこめて。

「あと、ありがとう」

付け足したような言い方でも、ツ歌わるかどうかは定かではないけれども俺はそう口にした。

シアンは少し驚いたような表情のあとまた優しく微笑んだ。

「どういたしまして。」

第二十六話 ありがとう(後書き)

何だか二十四話から個人の話になってますね…
次からは普通に戻ります

第二十七話 自分なりの答え

「桜魔ったら5日間も眠り続けてたんですよ！すっごく心配したんですからあ」

「悪い…」

「…でもまあ、無事でよかったです。」

「ああ、心配かけて悪かったな」

桜魔が素直に謝るとシアンは大きなため息を吐いた。

カーテンのかかった窓から日の光がうつすらと差し込んできている。日差しから見て今は昼時なのだろう。

「お腹も空いてるでしょうから昼食にしましょうか。作ってきます。」

「なっなら俺も手伝おう！」

シアンだけに任せていたらキッチンが悪の巣窟となるだろう。

それを考え桜魔は慌ててシアンの腕を掴んだ。

しかしその瞬間に身体全身に激痛が走った。

声も出せずまたベッドに逆戻りとなった。

ビリビリと電流が流れているかのように全身が痺れている。

「馬鹿ですか貴方は…まだ完治もしていないのに急に動いたらまた傷が開きますよ？大人しくして下さい。」

見悶えている桜魔を見てシアンは呆れたような声で言って部屋から出ていった。

桜魔は一人きりの部屋で何だか見捨てられたような感じがして泣きそうになった。

少しすると身体の痺れも治まり何かを考える余裕が出来た。

さて、まず何から考えればいいか。

まずは、この村のことだろう。

悪魔たちに襲撃されてから暫く時間は経ったがまだ復興にはほど遠い状態だろう。

たくさんの死傷者も出て忙しくなっていそうだ…

その死傷者の中にはアキネもふくまれる。

桜魔はアキネのことを思い出したとたん心臓が痛くなった。溢れ出る後悔の念に押し潰されそうだ。

「ごめん…アキネ」

そう懺悔の言葉を呟いてみるが胸の痛みは治まらない。

…許されないことなのは分かっているのだ。

彼女を見捨てたことは消えない事実。

誰かの死を目の当たりにして普通でいられるほど桜魔は強くはなかった。

たぶん、それが一般人だ。

それでも人は進んでいくのだ。

この村の人間の多くが同じように…

少しずつ、少しずつ自分のペースで。

彼女は最期、笑っていた。

それは心からの笑顔ではなく、無理につくった笑顔だった。しかし、シアンが見せる無感情な笑顔ではなかっただろう。

では、なぜ彼女は笑ったのか。

「それは、俺を安心させるためだったのかな…」

都合のいい解釈の仕方だが、桜魔にはアキネがそう考えて笑ったのだと思った。

たった数時間だったが彼女の優しさはとても温かかったのを覚えている。

「…アキネ」

今はもういない彼女の名を呼ぶ。

アキネは強い人間だった。

自分の最後の時に他人に気を使うことができる、そんな人間だった。なら、彼女にごめんと言うのは失礼だったかもしれない。

「さっきの言葉は訂正するよ。アキネ、ありがとう。」

最後まで自分なんかのことを気にかけてくれて。

「本当にありがとう。」

+
+
+
+

「よっ」

そう言つてシアンは立ち上がった。隣にはどこか晴れた顔をした桜魔が立っている。きつと彼なりに答えを出してきたのだろう。

「カイン、世話になつたな。」

「いや、友達が泊まりにくるなら大歓迎だよ！」

そう言つてカインは笑つてみせた。

その目の下には黒いくまができていた。

ずっと村のために動き回つていたのだろう。

桜魔はそんなカインを見て小さく笑つた。

「ずいぶんと疲れてるみたいだな。」

「そりゃあんだけ動けばねー」

「それだけお前はこの村が好きなんだな」

「…うん」

照れ臭そうな、どこか悲しそうに笑うカイン。

少し気まずそうに視線をそらしたが、もう一度桜魔を見直した。

「だから悪い、俺は桜魔たちと一緒にには行けない。」

「……」

「やっぱりずっとこの村にいるからな…愛着があるんだ。村がこんなになつて離れるなんて、俺には出来ない。だから悪い！」

律儀に頭まで下げ、カインは謝罪の言葉をいれた。

桜魔はわざとらしいため息を吐く。

「最初から俺はお前が来ることを認めてない。」

「えー！？それはそれで傷つく…」

「だから、お前は謝罪をする必要もない。お前はこれからもこの村のために頑張ってる！」

そう言っただけで笑った桜魔の笑顔はとても人間らしかった。

つられてカインも笑顔になる。

「言われなくてもだ！桜魔、ありがとな。シアンちゃんも！」

「いえ、カインさんにはお世話になってばかりでした。村の復興の手伝いも出来なくてすみません…」

ずっと二人の会話を眺めていたシアンは慌てて頭を下げた。

「別にかまわねえよ！二人は記憶探し頑張ってくれ！あと、毛布が一枚足りないんだろ？これ持ってきてきな！」

そう言っただけでカインは手に持っていた毛布をシアンに渡した。

「わっありがとございますー！」

「これは凄い助かるな！」

新しい毛布に桜魔も喜んだ。

これであの魔の時間も生き抜ける。

「ほら行きな！もう夕方だ。次の町まで馬車なら明日の昼には着くはずだ」

「はいっありがとうございます。」

「じゃあ元気だな！」

「ああ。お前らも！」

手を振るカインに背を向けてシアンと桜魔は馬車に乗り込んだ。
ドアが閉まると馬車は自然と動き出し、カインの姿はだんだんと小
さくなっていった。

綺麗な夕日がかかる道を馬車は滑り続けた。

第二十八話 退屈

「いいですか桜魔、誰が来てもこのドアを開けちゃいけませんよ？」
「ああ。」

「多分、掃除をするためにメイドさんが来るはずですからその時はフードを被って下さい」

「ああ、わかった。」

シアンは訝しげに桜魔を見たあと、大きなため息を吐いた。

「もう！心配です…」

「大丈夫だって！そんなに信用ないのか俺は！？」

「はい。」

「即答！？」

軽くへこみ始める桜魔を見て笑い、シアンは身を翻した。

「じゃあ買い物に行ってきます」

「あ…」

「最後に一つ！いくら退屈でも外に出ないで下さい」

「はいはい了解したって」

「じゃ、行ってきます」

そう言って目の前のドアは閉じた。

シアンはこの町に着いてすぐ、今日の宿を探した。

桜魔のこともあるのでなるべく目立たない場所を探した。
路地の奥の方にそれなりによさそうな宿を見つけ、一段落ついた後、
シアンは買い物に出掛けた。
桜魔はもちろん留守番だ。

シングルベッドに座り、シアンの出でいったドアを見つめる。
開く気配はなかったのでフードコートを脱いでベッドに倒れた。
天井には雨漏りの後のようなシミが点々とできていた。

「1…2…3…」

無意味にその数を数えるが暇なのにかわりはない。
退屈すぎてつまらない。

暇、と言ってもまだ考えるべきことはたくさんあるのだ。
飛鳥のこと、戦闘の時のこと、魔王のこと、そして、これからのこ
と…

しかし、どうにも頭が回らない。

頭が回らないというよりは何も考えたくないといった気持ちだが…

桜魔がそんなことをグダグダと悩んでいると部屋の出口が開いた。

「何だシアン、早いじゃない…か」

桜魔がドアの方を見るとそこには見たことない女が立っていた。

メイド服を着ているのでこの宿の掃除係なのだろう。
桜魔がそれに気づいたのは数秒後のあとだった。

「うおおおおっ!?!」

叫ぶと同時にベッドに置いておいたフードコートを被る。
しかし間違いなく顔を見られただろう。

「も…申し訳ありません!誰もいないと思ったのでノックもせず開けてしまいました!」

メイドが慌ててお辞儀をする。

それを見ても桜魔は何か返事を返すことも出来なかった。

ただ頭の中が混乱していた。

何も反応を返さない桜魔を見ようとメイドが顔を上げると、ベッドにうつ伏せになっている桜魔がいた。

「えっ…と、部屋のお掃除をしたいのですが、よろしいでしょうか?」

「はっ!?あ、いや…別にかまわないが…」

「ありがとうございます!」

メイドはそう言って部屋に入ってきた。

手には水の入ったバケツしか持っていない。

どうやって掃除をするのかと桜魔がメイドを見ていると、メイドは何か呪文を唱え始めた。

それとともにバケツの中の水が重力に逆らい、宙に浮きあがった。

水は分裂し、形をうねうねと変えながら宙を漂う。

少しの間形を変えていた水はいきなり破裂した。

「うおっ!?!」

破裂した水は壁や床に飛び散ると、吸い込まれるようになってしまった。

「えっと、こつという掃除の仕方を見るのは初めてですか?」

「あ、ああ」

メイドが遠慮がちに尋ねてくる。

桜魔はフードを押さえながら返事をかえす。

もしかしたらこれが人間の間では当たり前前の掃除の仕方なのだろうか?

桜魔がそう考えていると後頭部に衝撃を受けた。

「いつてえ!?!?」

「ああ! すいません!」

「何なんだ!?!?」

慌てて後ろを振り向くが何も無い。

首を傾げて前に向き直ると今度は顔のすぐ横を何か掠めた。

ソレは一直線にバケツへ向かっていく。

バケツに入るとバチャンという水音がした。

「何なんだソレは?」

「え…何って水です。これがこの宿のお掃除の仕方何です。」

近寄ってバケツの中を覗くと、そこには汚れた茶色い水が入っていた。

そこにまた汚れた水が飛んできた。

「水に魔法をかけて掃除させてるのか…」

「はい。その方が効率がいいので」

そう言ってる間にも四方八方から水が飛んでくる。先ほど頭にあたったのはこの水のような。となれば、この部屋にいるのは危険だろう…。かといって外に出るとシアンが怒る…

「いたっ!!」

そう悩んでいるとまたもや頭に水がぶつかってきた。

桜魔は悩んだ末、宿の前で掃除が終わるのを待つことにした。

「おい、俺は宿屋の前にいるから掃除が終わったら呼んでくれ」

「はい。かしこまりました」

メイドの返事を聞くと桜魔はすぐに部屋を出た。

水がぶつかってきた頭のところがジンジンと痛む。

外に出ると空は快晴、雲一つない青空が広がっていた。

建物と建物の間から少しだけ見えているそれはとてもきれいだっ

た。風もほどよく吹いており、気持ちの良い気分だ。

「あ…：気持ちいいな」

壁に背をあずけてその場に座り込む。

掃除はあの分だとそう時間はかからないだろうと判断し、桜魔はその場で待機することにした。

あの狭い部屋の中よりも気分はいい。

だが、やはり暇に変わりはないのだが。

少し遠くに人が行きかっているのが見える。

あそこが市場なのだろう。

「1…2…3…」

暇なのでそこを通る人間の数を数えることにした。

しかしそれも退屈だ。

何もやる気が起こらない。

そんな無駄な時間を過ごしていると市場の方が騒がしくなりはじめた。

「何だ…祭りか？」

目をこらしてみるのがよくわからない。

ただ慌ただしく人々が動きまわっていた。

しかしその光景もどこか夢のように見えた。

ただ見えるだけで触れられない。

自分には眺めることしか出来ないのだ。

城から見ている世界と同じ、触れることのできないモノ。

その光景に嫌気がさして桜魔は目を背けた。

先ほどよりも一層つまらなくなってしまった。

ふて寝をしようとフードを深く被る。

しかしその睡眠を妨げるように頭上から声が降ってきた。

「あのー、そんなところで寝ると風邪ひきますよ？」

「はあ？」

目を開くと見えたのは焦げ茶色のブーツだった。視線を上げていくと宿のメイドと同じ服を着ていたのでどうやらこの宿の人間なのだろう。

「よろしかったらウチの宿に泊まりませんか？一泊1000ペルトでお安いですよ？」

真っ赤な長い髪を風になびかせながらそのメイドは営業スマイルでそう言った。

「…俺は元からこの宿の客だ。今は部屋を掃除しているから掃除が終わるまでここで待つてるだけだ。」

「あら！それは失礼しましたすいませ〜ん」

大して悪びれた様子もなくメイドは謝った。それに対して桜魔は多少イラつきをおぼえた。

「お前それが客にとる態度か？」

「はい。」

桜魔が睨み付けるとメイドは営業スマイルを崩さず、きっぱり言い張った。

その悠然とした態度はどこかシアンと似ていて桜魔はそれ以上そのメイドを怒ることはできなかった。

呆れた顔をしている桜魔の視線を無視し、メイドは市場の方を指差す。

「部屋が掃除中でお暇をしていられるならあちらの市の方を覗いて来られたらどうです？勇者がこの町に来てるとかで賑やかなのよ」

「勇者!？」

「ええ。私は興味ないんでどうでもいいですが普通の人は気になるみたいですね。盛大に歓迎しているようですよ？」

勇者、というのはどうやら桜魔ではないようだ。

勇者の称号はこれから魔王を倒しに行くもの、又は倒した者に与えられるものだ。

それを剥奪された桜魔は今ただの平民なのだ。

ということは新たな勇者が現れた、もしくは他国の勇者なのだろう。どっちみちこの先自分の行く手の邪魔になるならそれを把握しておいた方がいいだろうか。

桜魔は仕方なく立ち上がった。

正当な理由があればシアンも怒らないだろう。

結局、暇を潰すことができずシアンに怒られないなら何でもよかった気もするが…

「あ、行かれるんですか？なら私が案内しますよ」

メイドはそう言って桜魔の前を歩き出した。

「お前仕事はいいのか？」

「これも仕事のうちですから」

振り返りもせずになんか言うメイドに桜魔は聞こえるようにため息を吐いた。

きつと彼女も仕事をサボる理由が欲しかったのだろう。

同じ退屈をしていた者どうし、会話もなく道を進んだ。

お互いにこの沈黙を気まぐしとは思っていなかっただろう。

マイペースなメイドは鮮やかな赤い髪を風になびかせ、桜魔は少しの不安と大きな期待を持ち、軽い足取りで市場へ向かった。

第二十九話 勇者

市場は朝と変わらず、人で溢れかえっていた。

ただ一つ違うのは道の真ん中に人が歩けるスペースが出来ており、その周りを人々が囲んでいる。

ここを勇者が通るようだ。

「人ばつかで嫌になりますねえ。たかが人間一人見る為にみんなよくやるわ」

「そうだな。」

人混みにもみくちやにされた二人はため息を吐いて道の奥の方を見た。

歓声が徐々に近づいてきているので勇者がこちらに向かってきているようだ。

「勇者って言ったってただ称号をもらっただけの人間じゃないですか：なんて言うかと勇者を崇拜する勇者教に殺されるんで口が裂けても言えないですね。」

「言ってるじゃないか：。：。って、勇者教って何だ？」

態度も口も悪いメイドが桜魔を小バカにしたような視線で見ってくる。

「そんなことも知らないんですか？イナカモノですね〜！」

「なっ…うるさいな！〜！」

「じゃあ説明料100ペルトで…まあ宿のお客さんですし今日は特別に無料で話してあげますか。」

「金とるつもりだったのか!？」

怒る桜魔を他所にメイドはペラペラと勇者教について説明を始めた。

「勇者教はまあ一言で言えば勇者のファンが集まりね。歴代の勇者を崇拜するやつらが作りだした教団よ。主な活動は勇者が魔王を倒した時の自伝を作る時のためとかの時のために勇者の行動の記録、勇者の旅の資金の募金回収とか…あとは」

「おい！来たぞあれが勇者一行か!？」

「……は？」

道の奥から勇者一行らしき集団が来るのを今か今かと待ち望んでいた桜魔は楽しそうに顔を覗かせている。

メイドは自分の話を聞いていなかった桜魔にもものすごく腹がたっていた。

「ちっ…ヒトがせつかく話してやってんのに何なわけ？まじ死ね！

」

「うおっ!?!？」

勇者一行に夢中になっている桜魔の無防備な背中をメイドは蹴り飛ばした。

「いやんごめんなさい！足が滑っちゃって」

「っ…貴様!!…って、え…?」

おどけたように謝るメイドを睨もうと桜魔が振り返ろうとした時、そこにちょうどあの勇者ご一行が現れた。

一行は7人なのだがその内5人は見たことのある顔ぶれだった。そう、元勇者の仲間たち。

「ああああ貴方！！よくも国から逃げましたわね！？お父様の厚意を無駄にして兵と駆け落ちだなんて…最低ですわ！！」

ピンク色のフリルを身に纏った少女が甲高い声で叫ぶ。

他の元勇者の仲間たちも口々に喚きたて始めた。

そんな中で見たことのない2人は啞然とした表情で桜魔を見つめていた。

1人は黒の髪に黒の瞳、背中に剣を背負っている青年、もう1人は明るい茶色の髪に焦げ茶色の瞳、腰に剣をさしている青年、どちらも桜魔と同じ年くらいだ。

「あんたあの勇者だったんだ…。へえ〜どつりでねえ…」

メイドがどこか納得したように頷いているが桜魔はそれどころではなかった。

「やっべ…！！」

桜魔は慌てて立ち上がると裏道に飛び込んだ。

「あつ待ちなさ…」

「待て！！」

ピンクフリルの少女が叫んだがそれをかき消すほどの大きな声で、たぶん新しい勇者なのであろう黒色の青年が叫び、桜魔のあとを追ってきた。

そのあとをメイドが気だるそうに追いかける。

「ちよっ…勇者様!?!」

「なぎっ!?!」

「アンタまで行くな!俺があとを追っ!」

もう1人の茶色の青年もあとを追いかけてよつとするがそれを他の勇者の仲間が止めた。

勇者の仲間の1人の男がそう言って茶色の青年を制したあと、3人のあとを追って走り出した。

「宿屋で合流だ!分かったな!?!」

「ああ!?!」

それだけ言うと男は加速した。

+ + + +

何なんだこの状況は…!?!?

桜魔は心の中で叫んだ。

今、桜魔は知らない青年に追いかけている。

「おいっ!…待てっ!?!」

青年が必死に桜魔を呼び止めるが桜魔は止まることはできない。

だが徐々に距離が狭まってきているので捕まるのは時間の問題だろう。

「何で…逃げるんだよ！？っ白井…！！」

途切れ途切れの呼吸で青年は叫ぶ。
知らない人間の名前を呼びながら…

「どこに…行くんだよ！白井っ…何、で…いなくなるんだよ！？っ
答えるよっ…」

段々と声が弱々しくなってきた青年を少し可哀想に思う桜魔だ
ったが止まることは許されなかった。

あの勇者一行に捕まったらそれはもう終わりだ。
だから桜魔も一心不乱に走る。

「っ…ゆっつ…！！」

「ぐえっ…！！」

急にフードを引つ張られ、桜魔は後ろに倒れた。

一瞬、息ができなくなり身体が硬直したがすぐに呼吸ができるよう
になり、今度は咳き込んだ。

しかしその隙に青年が桜魔に馬乗りになり、身動きが取れなくなっ
てしまった。

青年は肩で息をしながら桜魔を睨み付ける。

「何でっ…逃げたんだよ？…白井」

「白井って…誰のことだよ！？」

上から退かそうと肩を押すが走りすぎて力が入らない。

「お前のことに決まってるんだろ！何で忘れた！？何で…」
「はあっ！？意味が分からな…うおっ！？」

桜魔が抗議の声を上げようとすると、青年が桜魔を抱きしめた。しかし力の加減が出来ていないようで桜魔の身体の骨がギシギシと音をたてているように悲鳴をあげる。

「いつ…！？骨…！骨があっ…！！」

「すっごい心配したんだぞっ！！お前が消えてから…後悔した…」

耳に青年の声が響く。

その声は震えていた。

泣きそうになっても我慢しているようだ。

「ごめん…お前が悩んでるの知ってたから…無理矢理にでも聞き出せばよかったのかな…」

でも、少しは俺に相談してくれてもよかったじゃんかよ…」

青年のその言葉を終わりに暫く沈黙が流れた。

桜魔は何も言えず、動けなかった。

その間にメイドと男が桜魔たちに追い付く。

しかし2人の状況に言葉を失っているようだ。

桜魔は2人の視線に居心地がさらに悪くなった。

数分すると落ち着きを取り戻したようで静かに桜魔から離れた。

「何か…ごめん。お前記憶喪失なんだよな？なにいきなり色んなこと
と言って驚いたよな…悪い…」

「いや、こっちこそ…話も聞かずに逃げて…悪い」

あんなに必死に追いかけてきた青年に対して桜魔は罪悪感が沸いてきていた。

なぜか気まずい雰囲気になってしまった。

他の2人もこの空気の中で話出さずに見守っている。

「あー…俺は赤城渚だ。んで、お前は白井悠。…て、何か改めると恥ずいな…」

青年、渚は恥ずかしそうに弱々しく笑う。

桜魔もつられて小さく笑う。

どうやら元勇者の名前は白井悠というようだ。

しかし今ではその名前を使う気はない。

「その、記憶がないから今は名前、桜魔って言うんだ…」

「へえ、いい名前じゃん。」

おずおずと話す桜魔に対して渚は気を悪くすることもせず話してくれた。

「渚…は俺の知り合いか何かか？」

「俺はお前の…友達、なんだ。前の世界でな！」

「そうなのか!?!」

元勇者にも友達がいたのかと考えていた桜魔は渚が一瞬、寂しそうに笑ったのが見えていなかった。

へらへらと笑い会う2人に男が近づく。

「話がすんだんなら行くぞ。…もちろん、お前もな」

渚を引つ張り立たせながら男は桜魔を冷めた瞳で睨んでいた。
桜魔はその瞳から目をそらす。

しかし男は桜魔の腕を掴み、無理矢理立たせた。
そのまま腕を掴む手に力をこめ、桜魔が逃げないようにする。
桜魔も負けじと睨み付けるがあの冷めた瞳をずっと見ていられなく
てそらしてしまった。

「そうだな、悠…じゃなくて、桜魔も一緒に旅をしよう！一緒に魔王を倒して…帰ろう」

「馬鹿か…。こいつは国につき出すんだよ。」

男の言葉に桜魔の肩がビクリと跳ねる。

「何でだよ！？そりゃ、あんなことがあったら仕方ないかもしれないけど…」

お前は俺の願いを知ってるよな？それに背くのはいけないんじゃないか？」

「っ…それとこれとは別問題だろ！」

「いや、同じだね。それは俺が許さない。」

仲間同士の間にも不安な空気が流れ始める。

睨みあい続ける二人の間で桜魔は小さくなっていった。

しかしそのおかげで桜魔を掴む手の力が緩んだ。

その隙に男の手を振りほどいた。

「おおお俺はっ、お前たちとは行かないっ…！！」

「悠…」

「わ、悪い…」

「いや、あんな中にいたら桜魔も嫌だろうしな！仕方ない！！」

「あり、がとう…」

渚が悲しそうに桜魔の名前を呼ぶのでつい謝るが渚は笑ってくれたので桜魔も自然と笑顔になる。
何だか渚は了に似ていると思った。
男はその答えが不満なのか不機嫌そうに舌打ちをした。

「ちっ…行くぞ…！」

「あつ待てよ勇こゆう…！」

桜魔たちに背を向けて歩き出した男を追って渚が走っていく。
桜魔は渚の言葉に首をかしげた。

「お前…勇っていつのか？」

桜魔がそう尋ねかけると男はピタリとその場に止まり、振り返った。
その顔は心底嫌そうだった。

「お前に名前を呼ばれると虫酸が走る。」

その一言に物凄い憎悪の念を感じるのは気のせいではないだろう…
それだけ言つと男、勇はまた歩き出してしまった。

「勇っ…！あつ…悠、じゃなくて桜魔、悪いまたな！」

「え、あつおおおー！」

完全に固まってしまっていた桜魔は渚の声で我に返った。
手を振ってくる渚に手を振り返しへらへらと笑った。

「じゃあな〜渚あ」

桜魔が大きな声で渚を呼ぶと勇の隣に追い付いた渚は満面の笑みを桜魔に向けた。

「またな〜！おつ…うお！？何だよ勇！！」

その隣で勇が道の端に置いてあったゴミ箱を蹴り飛ばした。

渚の質問にも答えず勇は負のオーラを醸し出しながら帰っていった。

2人が帰った後も暫く道を見つめているとメイドが小さくため息を吐いた。

「嫉妬深い男は嫌われるわよ…」

「何がだ？」

「別にい〜？ところであんた、あの勇者なのね…」
「……………」

メイドの言葉に何も言えず俯く。

メイドはその様子を見てくすりと笑った。

ゆっくりとした足取りで桜魔に近づいていく。

「どおりで何か違う匂いがするわけだわ…」

「匂い？」

顔を上げるとすぐ近くにメイドの顔があった。

驚いて2、3歩後ろに後退するがそこには壁があり追い込まれた形になってしまった。

「そ、匂い。この世界の人間ではない…異世界の人間の匂い。…甘くて美味しそうないい香り…」

メイドが桜魔の首筋につうつと指を這わせた。

桜魔は背中がぞくりと粟立つのがわかった。

顔がいつきに紅潮し、心臓の音が外に聞こえるのではと思うくらい忙しく動いている。

桜魔の身体を舐めるように見つめていたメイドは金色の瞳を桜魔に向けた。

その瞳を見つめていると何だか頭がボーっとする。

思考が霞がかったように何も考えられなくなる。

「私、そーゆーのに興味があるのよね…」

「きょう…み？」

「ええ、貴方に興味があるの」

そう言つてメイドは桜魔の首筋に軽いキスをした。

唇が触れた箇所からジンジンと甘い痺れが広がり、思考が停止した。

「私ね、ヴァンパイアなの。わかる？…吸血鬼なのよ？」

「ああ…」

「だからね、貴方の血も飲んでみたいわ。異世界人の血は極上だつて聞いたことがあるし…ね？」

耳にメイドの甘い吐息がかかる。

もう一度首筋に軽いキスをされたあと、生暖かい何かが首筋を這った。

「痛くなんてないわ…。ただ、気持ちいいだけよ…？…いいでしょ

う?」

「ああ…」

メイドは桜魔の首筋に舌を這わせながら妖艶に微笑んだ。

「じゃあ…ちよつとだけ…イタダキマス。」

牙を優しく首筋に当てると桜魔の肩がぴくりと跳ねる。

瞳は虚ろにどこか遠くを向いて、忙しない呼吸と心臓の音を聴き、その様子を楽しみながらメイドはゆっくり牙を肉に突き立てた。

「あつ…」

小さく開いた穴から鮮血が溢れ出す。

白い肌に深紅の血が伝い落ちていく。

それを一舐めしてからまた牙をたてる。

もつと深くまで牙をいれようと力を込めた時だった。

「桜魔…?」

道の奥に買い物袋を持ったシアンが立っていた。

シアンの声に桜魔がぴくりと反応する。

しかしまだ思考が追いつかないのか動くこともできないようだ。

「桜魔っ!?!何やってるんですかこんな道ばたで!?!」

シアンが顔を真っ赤にして買い物袋をその場に投げ捨て走ってくる。

メイドは牙をしまつと肌垂れていた血を丁寧に舐めとった。

「彼女がいたなんて残念だわ。…でも私、諦めないから。」

耳元で囁くだけで桜魔の身体がぴくりと跳ねる。
しかしそれだけ言うとメイドは桜魔から離れた。

「じゃあまたねえ」

シアンが来る前にその場から逃げるようにシアンがいる方とは逆の道へ走っていった。

「桜魔つ聞いてるんですか！？桜魔！！」

「……………うおわっ！？」

シアンに腕を引つ張られ、桜魔はやつと我に返った。

何だか身体の動きが鈍く、その場に座り込んでしまった。
そんな桜魔をシアンは睨みつける。

「私との約束を破って宿屋のメイドと何をしてたんですか？…最低です！！」

「え…あう…おー」

上手く呂律も回らない。

焦っている桜魔に気付かずシアンの怒りはつのっていく。

「はつきり言ったらどうですか？それとも人には言えないことなんですか？え？答えて下さい」

「いやあ…おーう」

「桜魔！！ふざけるのも大概にして下さい！！本気で怒りますよ！

！！！！」

「っ…えー」

頭だけ下げてるがシアンは許してはくれない。
しかし表情だけは笑顔になった。

「まあ後は、宿に帰ってからみっちり説教しましょうか？」

その時、桜魔はシアンの背後に凄い形相の鬼がハッキリと見えていた。

第二十九話 勇者（後書き）

色っぽい展開って難しいですね…

表現が上手くできない。

まったく困ったもんだ…

第三十話 勇者パーティー

+ + + +

「悪い、待たせたな」

渚と勇が泊まる宿に行くと、豪華なシャンデリアの下、待合室には二人の間しかいなかった。どうやら他の人間は好き勝手しているようだ。

「あら！あの偽物はいらっしやらないんですわね！！」

ピンクフリルの少女、メルシーが二人を睨んだ。

「何故連れてこなかったのですか！！」

「…るせえよ」

「なななななあっ何ですって！！？この私にう、うつつるさいとは何ですか！！？」

「だから、その口を閉じろつつつてんだよ！！」

「勇！！」

メルシーと勇が静かに睨みあい続ける。

普段から意見の衝突がある二人なので仕方のないことかもしれないが、渚はこの先やっていくには仲良くしてもらわなければ困ると思っっているのだが中々思う通りにはいかないものだ。

「…まったく！これだから低俗な者は嫌いなんです！！」

「ああ！！？てめえ…っ！！」

「勇！…メルシーもやめろよ！！」

もう一度衝突しそうになった二人の仲裁をしながら渚は小さくため息を吐いた。

メルシーはテーブルの上に置いてあった紅茶を飲み、喋らなくなっ
てしまった。

勇もまだ自分の部屋を聞いてないので近くの壁に背をあずけて目を
瞑ってしまった。

あくまでメルシーの近くには座らないつもりのようにだ。

「なぎ…お疲れ様。これ飲んで」

「おう…」

渚はもう1人の仲間、直の隣に腰掛ける。

紅茶を用意してくれていたようで目の前に程良い温度の紅茶が置か
れていた。

テーブルの上にはティーカップが3つ…

どうやら勇の分は用意されていないようだ。

「勇、紅茶飲むか？」

「いらん」

「あ、そう…」

会話終了。

仕方なく目の前の紅茶に口をつける。

口内に甘い香りが広がる。

妙に甘ったるいそれは、甘党の直が淹れたからだろう。

…どうせならほうじ茶が飲みたい気分だ。

「ねえ、さっきのつてやつぱは白井君？」
「ん？ああそうだった。見つけたよ！」

そう言つて渚が笑つと茶色い髪的青年、直は少し眉間にシワを寄せた。

「やつぱここにいたんだ…」

「おう！こうなつたら絶対魔王を倒して3人で元の世界に帰ろうな
！！」

「まあ精々あの人と同じ結果にはならないくださいね」

渚が意気込んで言つと、その意気込みをへし折るかのようにメルシーが口をはさんでくる。

それに反論するかのように直がメルシーに食つてかかった。

「なぎをあいつと一緒にしないでよ！なぎは誰にも負けないし！」

「それはどうだろうなあー。直が俺のこと褒めてくれるのは嬉しいけど、俺そんな強くないし…」

「なぎは強いよ！！誰にも負けないよ！！！」

直は渚の服の裾を引っ張りながら必死に主張する。

その期待は逆にプレッシャーになるのだが…

「まあ、前の勇者よりは性格もよろしいようですし、頑張ってくださいませ。…剣の腕前は全くですし頭もキレイなようですけど…2人でやれば何とかなるでしょうし。」

勇者が2人なんて異例なんですから…」

「そうだな！頑張るよ！！！」

メルシーの嫌みにも負けず渚は笑う。

直は若干不満なのかメルシーを睨みつけている。

「…でも、その性格のよさが仇となる場合もあるな。優しすぎるのはどうかと思うが…。」

それに、脳がない分動きでカバーしなきゃいけないがこいつはそれも出来ないじゃないか。

俺はこいつにあまり才能がないんじゃないかと思うが…。」

「何それ…何でなぎを批判すんの？いつつもそうじゃん…！」

「落ち着けて直…！全部本当のことだしこれから頑張るから…！」

渚を否定する勇に直が憤慨する。

掴みかかろうとするのをなんとか押さえつけ落ち着かせる。

何だか今日は全員ピリピリとしている。

「でも確かに貴方はいつもそうですわね。まあ当然と言っては当然ですかね？貴方はあの偽物の…。」

「…つるせえよ…！」

メルシーが何かを言おうとすると勇は近くの壁を叩きつけて叫んだ。その迫力でもメルシーは驚きもせずため息を吐いた。

「貴方の部屋は301号室ですわ。消えて下さい。」

「……………」

それを聞くと勇は無言でその場を後にした。

渚は声もかけられずただその背中を見送るしかなかった。

「あの…。」

「では、私も自室へ戻らせてもらいますわ。あの者のせいで紅茶が不味くなってしまいましたから！」

渚が続きを聞こうとしたがメルシーはどうやら話したくないようで渚の声を無視した。

ティーカップを片付けてから、2人に視線を向けることなくその場を去っていった。

2人がいなくなるとその場の重い空気はなくなった。

「ぶはあ〜っ!!」

「お疲れ様、なぎ」

「うん…」

直と2人だと場の温度が一気に上昇しはじめた気がする。

仲間というほうが何だか変に気を使ってストレスが溜まるようで、最近肩こりに悩まされている。

何だかイメージとはかけはなれているRPGにシヨックをうけた。元の世界に帰っても当然、RPGのゲームはやりたくない。

「…そんなに嫌ならやめちゃえばいいのに…」

「え…?そんなのだめだろ」

直がポツリと呟いた言葉に一瞬心が揺らめく。

何だか今日は直まで暗い。

「だって、魔王を倒せば僕らは元の世界に帰れるんだよ!?別にこのメンバーじゃなくなつて…!!」

「直!それは言っちゃいけないだろ?じゃないとあの人は俺の願いを叶えてくれないじゃないか!直の願いだつて…」

「願いなんでいいじゃん!!僕らだけで帰ればいいじゃん!!何で

…」

「直!!」

渚が少し声を荒げると直の身体が小さく跳ねた。
不安そうな瞳が渚を見つめる。

「そんなに彼が…白井君が大切なのか？こんな苦痛までして叶えたい
願いな事なの？辛くないの？なぎ、死んじゃうよ？身体だつて痛い
でしょ？時間だつてないんでしょ？」

「…白井は、俺の大切な、家族だから…」

最初にされた質問にだけ答えると直は表情を曇らせた。

「家族つて…ただの幼馴染じゃん…ただの、お荷物じゃん…」

「っ…直！…いいかげんにしろよ！？何なんだよさつきから！！」

直を怒鳴りつけるが直は何も言わずに渚を見つめていた。

その瞳はどこまでも続く深い闇のようだった。

「なぎは…親友と幼馴染どっちが大切？」

「なっ…何言つてんだよ…。どっちも…大切に決まってるじゃん！
！」

「そう？そう…なら、いいや。なぎの部屋は僕と同じ、303号室
だから。」

僕、ちよつと外見てくるからなぎに鍵を渡しとく。先に部屋で休ん
でたら？」

そう言つて手渡された鍵を見つめる。

これはつまり『あっち行け』と言われているのではないだろうか？
メルシーが勇に言ったように…

「じゃ、じゃあ…先に休む」

「うん。じゃあまたあとで」

笑う直にぎこちなく笑顔を返してその場から逃げるように部屋に向かった。

貴重な1人の時間だ、大切にしなければ。

誰もいない部屋はどこか寂しかったが落ち着く。隣に誰もいないのが落ち着く。

でも、寂しかった。

一人は、寂しかった。

何もない部屋に一人ぼっちは、寂しかったのだ。

+
+
+
+

第三十話 勇者パーティー（後書き）

もともと勇者の仲間みんな仲が悪いです。
人数は勇者の2人を入れて6人です。
うち2人はまだあまり登場はしてません。

名前は

ピンクフリルの少女…メルシー

黒髪の勇者…渚なづな

茶髪の勇者…直なお

勇者の仲間の男…勇いさみ

です。

第三十一話 好み

「まったく…言いつけ破つて外に出た何をしたかと思えば、新しい勇者たちと会つてもめて、仲良くなって、拳句吸血鬼に襲われそうになった、と。…馬鹿ですか？」
「すみません…」

あの後、桜魔はシアン不在の時のことを白状し、説教され続けた。
何だか今日は最悪な日だったと思い返しながら桜魔は鬼の期限が直るのを待っていた。

「大体、敵と仲良くしようという考えが甘いです！運が良かったから今回は助かりましたが次は掴まって国につきだされると思って下さい！！」

「はい…でも、あいつらは敵…なのか？」

床に正座をしている桜魔はベッドの上で足を組んで座っているシアンに遠慮がちに尋ねた。

この絵だけ見ると何だか浮気のバレた彼氏のようなようだ。

そんな桜魔をシアンは呆れたように見てため息を吐いた。

「あのですねー…貴方の目的は魔王に戻ることでしょ？勇者は魔王を倒すためにこの世界にいるんですよ？そしたら必然的にそうなるのは当たり前！」

「で…でも俺は、今は人間だし…」

「そうですね。でも、今彼らが魔王を倒してしまったら貴方は返る身体がなくなってしまうわけですよ？」

「あ…そうか。じゃ、じゃあ俺たちはあいつらより先に魔王に辿りつかないか、いけないのか…」

「はい。…まあ、いざとなったら先に彼らを殺します。」
「……………」

シアンの提案に桜魔はあまり納得がいかなかった。

あの魔王が負ける気は全くしないし、渚を殺すという考えにも不満がある。

しかし、それを口にできるほどの力を桜魔は持っていないのも事実。シアンの案を否定するには、新しい案を提示しなくてはならないがそんなもの桜魔が思いつくはずもなかった。

「でもまあ…その勇者を上手く活用する手もありますよね。とりあえず彼の過去を探ってみたりとかもした方がいいですかね…」

軽く悩みはじめシアンを見ながら桜魔は首に手をあてた。

噛まれたところは幸いにもあまり深くなかったようで血はそんなに出なかった。

しかし後はくつきりと残っていて、それを鏡で見ると何だか恥ずかしかった。

あの時の感覚は何故だかぼやけていたが、それは吸血鬼の力なのだとシアンは教えてくれた。

吸血鬼に魅了されると、考えるという行為が出来なくなり、脳が停止する。

そうすると全身の神経も麻痺し始め、逃げる事が出来なくなるらしい。

そしてそのまま血を全部飲まれると真んできまうだとか…
後から聞いて血の気が引いた。

「…桜魔あゝ聞いてるんですかあ？」

「あ、悪い」

「もっ…」

少し落ち着きはじめてたシアンは立ち上がるとキッチンの方へ向かった。

キッチンといつてもあまり広くはない。

やかんでお湯を沸かしはじめた。

もちろん火を付けるのは簡単な魔法だ。

シアンの属性は水だが、簡単な魔法なら違う属性のものでも使用できる。

「紅茶淹れます。桜魔も飲みますよね？」

「ああ。砂糖は多めで頼む。今日は何かと疲れたから糖分が欲しい

…」

「私事です。何か昔の同僚に会っちゃって大変でしたあ」

「そりやお疲れさん」

機嫌も直ったようなので桜魔は立ち上がり、ベッドに座った。

長時間正座していたせいで足が痺れている。

桜魔の横にシアンも腰かける。

何故か近い距離に座ってきたシアンに場所を譲ろうと立ち上がった桜魔だが、シアンに腕を引かれもう一度ベッドに座ってしまった。

「どうかしたか？」

「いえ…ただ何となく…」

俯きがちなシアンの表情は分からないが、掴まれている手に少し力がこめられている。

いつもより近い距離に内心どきどきしながら桜魔は何も言わずに上

を向いた。

天井のシミは綺麗に消えていた。

「…桜魔は、その…どんな女の子が好きですか？」

「は？何言つて…」

不意にされた質問にシアンの方を見ると、真剣な眼差しでこちらを見ていた。

頬をピンク色にしながら、青い瞳がこちらを見上げている。

「やっぱり、あの吸血鬼のような綺麗な方がいいですか？それとも…」

「…俺は、その…えっと…」

どうとも言えない。

魔王城に居る時から同年代の女子とはあまり関わり合いもなかったし、第一、そんなことを考えたことさえなかった。

よくよく考えればこんなに話す女子はシアンが初めてかもしれない。他は恋愛対象には見えていなかったとも思える。

「よくは…分からない。」

「…そうですね」

桜魔が答えるとシアンは少し寂しそうに俯いた後、またいつもの笑顔を向けてきた。

「吸血鬼はほとんど綺麗な方が多いので騙されないでくださいよー？あ、お湯沸きましたね！」

シアンはそう言って立ち上がる。

その手を桜魔は掴み、シアンをもう一度ベッドに戻した。
しかし勢いがあつたためかシアンは背中からベッドに倒れこんだ。

「な、何ですかいきなり…」

「よくは分からないけど、俺はお前のことは結構気にいってる…と
思う」

そう言うとシアンの顔はみるみる内に赤くなっていった。
きつと自分の顔も赤いだろうと思いつつシアンを見つめる。
逃げようとはしないシアンの髪を撫でた。

「…気に入ってるのか…何様ですか。」

「そりゃ、魔王様だな」

「何それ…」

少し笑ったシアンにつられて桜魔も笑う。

しかしそのまま2人も黙ってしまい、部屋には沈黙が訪れた。

お互い見つめ合ったまま視線はそらさず、桜魔はシアンの青い髪を
撫で続けた。

部屋にはやかんがお湯を沸かす落としか聞こえない。

「桜魔…」

シアンの腕が首に巻きついてくる。

そのままだんだんと顔が近づき、シアンが目を閉じた。

桜魔もそのまま流されてしまおうとした時だ

コンコン

部屋の扉がノックされた。

「うあああああああつ!!!?!?」

「ひゃあつ!!!?!?」

『え!?!?あ、あのすいません!お食事の用意が出来ましたので呼びに来たんですが…!』

ドアの外から聞こえる声で一気に距離をとった2人はお互い顔を見合わせた。

「行きますか…?!?」

「そう、だな。…うん、行こうか」

「じゃ、じゃあ今から行きまーす!!!?!?」

必要以上に大きな声でシアンが返事をする、ドアの外の気配はなくなった。

しかしそれでも2人は動けず、その場に座り込んでしまっていた。

「……………もうそろそろ行きましょうよ?」

「だな…変に思われても困るし…!」

立ち上がるとどうにも近くによれなくて、少しの距離を開けながら2人は食堂へ向かった。

第三十二話 舞い降りる

日も沈みかけ空が薄暗くなってきたころ、数人の人間が食堂に集まっていた。

部屋ずつに机が別れており、人数も少ないのであまり音がない。

「今日の夕食はガネット村直産のガネット豚のしょうが焼きと海草のサラダ、なめこの味噌汁、揚げ出し豆腐です。お食事が済みましたら申し訳ありませんがこちらまで運んできて下さい。」

食堂のカウンターでメイドから食事の説明を受け、料理の乗ったおぼんを受け取った2人は『201号室』という札の立て掛けられた机に向かい合cade座った。

「……………」

「……………」

しかし会話をすることはせず、視線も合わせず黙々と料理を食べ続けた。

手を止めると何かを喋らなくてはいけない気がして手を休めずに動かす。

他のテーブルは盛り上がっているのにこのテーブルだけは何も会話がなないことにメイドは気付いたのか不思議そうにこちらを見ていた。別に好きで黙っているわけじゃないのだ。

相手が話しかけてくれれば対応はする…と両方が思っているせいで場に変な沈黙が生まれているのである。

「……、ちそうさまでした。」

先に食べ終わったシアンがぎこちない動作で手を合わせた。チラリと桜魔の方を見ればもうすぐ食べ終わりそうではあったがシアンはその場の空気に耐えられず席を立った。

「私は先に部屋に戻りますね。桜魔も食べ終わったら戻ってきてください。」

「あ、ああ」

「では、お先に失礼します」

シアンは桜魔と一度も視線を合わせることなく、空の食器の乗ったトレーを持って行ってしまった。

小さくなる背中を見送ってから食事を再開した。

しかし残りも少なかったので数分もしないうちに完食してしまい、桜魔はまた悩んだ。

このまま部屋に帰ってもどうせ気まずい雰囲気になるだろう。となれば部屋に帰るのはもう少し後にしようか。気持ちの整理もしたいし、と桜魔はトレーを返した後、夜風にあたるため外へ出た。

辺りは暗く、夜風が心地いい。空には満月、虫の鳴く声も聴こえず静寂が辺り一面に広がっていた。

裏通りは人の気配がなく、どこか寂しさが漏れ出しているようだった。

近くの壁に背を預けて夜空を仰ぎ見る。

黒の中に無数の白い点がたくさん見える。
それらの王とでもいうかのように満月がでかどかどかである。

それを見て桜魔は苦笑した。

何故か夢の中の少女の言葉を思い出してしまった。

あの無数の白い点が一つ、消えたとして気づく人間は自分を含めてこの世界にはいないだろう。

一つの強大な存在に比べれば他の人間はあれくらいちっぽけなのではないだろうか。

客観的に見れば自分という存在はあの無数の白い点の一つだろう。

あの点の中には赤色や黄色のものもちろほらとあるが、そんな個性さえ自分は持っていない、真っ白の点なのかもしれない。

この世界から自分が消えたとして大して支障はないだろう。

まして、悲しんでくれる存在さえも今の自分にはいないのでは…？

怖い…恐ろしい…寂しい…

何かが背中を這いずり回った。

夜風にあたりすぎたのか寒気さえする。

ぎゅっと自分の体を抱き締めても震えがとまらない。

寒い、暗い、誰も、いない。

「あ…あ…あ…あ…あ…あ…」

喉から出るのは本当に小さな呻き声。

桜魔は星空に背を向けて宿の中へ飛び込む勢いで走った。

その背中を見つめる2つの瞳。

「はあっ…はっ…」

周りの人間が訝しげに自分を見ているのさえ気づかず桜魔は一心不乱に部屋に向かった。

「っはあ…はあっ…っシアン！」

「えっ…桜魔あっ!?!」

部屋に入って目に飛び込んできた焦るシアンに桜魔は抱きついた。勢いがありすぎたのかシアンの体が後ろにのけ反ったが何とか支えてくれた。

「ちよっ…おお桜魔!?!なっ…どうしっ」

赤面するシアンの肩に頭を埋めながら桜魔はか細い声で言葉を紡ぐ。

「シアンは俺の隣にいるか?側にいてくれるか?」

「はっ!?!それってぶぶぶぶぶぶっぶろ…!?!」

「シアンは俺から離れないですっと一緒にいてくれるか?」

頭の中に警報が鳴り響く。

それはしてはいけないと。

「シアンは俺のことが好き。」

「うあああっ…よく、わからないですっ…」

「違う。解ってる。」

「…ううつつ知りません！」
「嘘吐き。シアンは俺のことが好きだ。」

シアンからの抵抗がなくなった。
抱き締める力を強くする。

彼女がどこかへ行ってしまわないように
自分に繋ぎ止めるように

警報が脳から身体全体に鳴り響く。

否、これは脳からではない、この器からではなく、心というモノか
ら響いているのだ。

もし、それがあると実証できるならばの話だが。

「シアンは俺のことが好き。」
「……………」

無言は肯定を意味する。

「なら、俺は…」

それを口に出そうとしたら、ただ音を発しようとしたら、部屋の窓
ガラスが割れた。

窓から強風が一直線に二人に向かってきた。

そのまま二人を吹き飛ばした。

「きゃあっ！！！」
「うわっ…っ!?!」

二人はそのまま壁にぶつかった。

シアンは辛うじて受け身の体勢をとったためすぐに立ち上がった。

しかし桜魔は何もせずに壁に激突したため、立てなかった。立てないのはそれだけの理由ではなかったけれども、身体がまた、震え出している。今度は違う理由で。

「…白井くん…だっけ？話をしようよ。」

割れた窓の縁に少年が舞い降りた。

背中から生えた金色の羽が薄らいでいく中、腰に刺していた鞘に剣を納めながら少年は冷たい声で言う。

「僕の名前は楔直^{くわいひるなお}。君の友達の渚の親友だよ。…まあだからと言って君とよろしくするつもりはないけど。」

直は吐き捨てるようにそう言って桜魔を睨み付けた。

「…いきなり何なんですか？」

シアンが直を睨み付けながらゆっくり桜魔に近寄る。直はシアンを一瞥した後、また桜魔に視線を戻した。

「ごめんね。お楽しみのところに入っちゃって。…でも君には用はないから黙ってて。これはこっちの世界の話だから。」

「っ…それは残念ですね。桜魔は過去の記憶がないんですよ。ねっ桜魔！」

「…はい」

直の淡々とした言い方が勘に触ったのか、馬鹿にされたことに腹が

たったのかシアンが不機嫌そうに答える。
桜魔はシアンの背後に黒いオーラが見えた気がした。

「お客様どうかされました…かあああああつ窓があ…!?」

そこに騒ぎを聞き付けたメイドが部屋に飛び込んできて事態は悪化した。

「ここじゃちゃんと話せなさそうだからこっちの宿に来て。」

直は眉をひそめて叫ぶメイドを睨むと座り込んでいる桜魔の腕を引っ張り立たせ、そのまま窓に向かおうとした。

「なっ…!」

「ちよつと！桜魔をどこに連れていくつもりですか!?!」

直が掴んでいる腕とは逆の手を掴んでシアンは桜魔を引っ張った。

「君には関係ないって言うてんじゃん。僕は彼に話があんのっ!」

「なら私も行きます！桜魔を一人にするのは心配です!!それにいきなり奇襲をかける人と2人きりになんて出来ません!!」

「奇襲!?!お客様いい一体何があつたんですか!?!そちらの方は誰なのですか!?!?」

「奇襲なんてかけてないだろ!?!何勝手に事実をねじ曲げちゃってんのっ!?!」

「いつ…!?!?」

右腕を直が、左腕をシアンが引っ張り、桜魔の身体が別々の方向へ無理矢理引っ張られ、腕が取れそうな痛みを感じる。
その周りをメイドが叫びながら回っている。

騒ぎを聞き付けたこの宿の客や従業員のやじ馬がドアのところに集まってきた。

「離してよっ！！別に変なことなんてしないし、ただ話をするだけだよ！！」

「貴方からは嘘の匂いがプンプンしますよ！！絶対、桜魔は離しません！！」

「お客様ガラスが散乱してますのでござっ…動かぬ」
「邪魔だから消えて！！」

「それはこっちのセリフです！！」

「まっ…腕！！腕！！取れっ…」

「うるさいっ！！」

「桜魔は黙ってて下さい！！」

2人が揉めている原因、桜魔をそっちのけで2人の言い合いは激しさを増した。

桜魔はあまりの気迫に押し黙るを得なかった。

その周りをメイドがまだ何か叫んで走り回っている。

「…こんなんじゃ埒があかないよ。穩便に済ませようと思ったけど無理そうだ。」

「それは私も激しく同感ですね…」

直が桜魔の腕を離すとシアンも腕を離した。

運の良いことに腕は両方とも付いていたし、肩も脱臼していなかった。

肩を擦りながら2人を見ると恐ろしいオーラを醸し出しながら、お互い剣と杖を持って対峙していた。

「ばっ…お前からここどこだかわかってんのか!？」

「うるさいな。今君の所有権をかけて戦ってんだよ？」

「桜魔はそこで事の結末を見守っていて下さい」

勝手に勝負の景品とされた桜魔は2人の禍々しい雰囲気には圧されて数歩後退りした。

というよりも身体が勝手に動いた。

さっきまで隣で喚いていたメイドも2人が武器を構えた途端、硬直して石のようになってしまった。

それを見て桜魔は可哀想にと心の中で呟いた。

ドアの外のやじ馬たちがうるさく歓声をあげる。

「…行くよ。」

直の言葉を合図に場の雰囲気が一瞬にして変わる。

先ほどまで騒いでいたやじ馬たちが静まり、2人の間に静かな、しかし確かに分かる殺意が満ちた。

割れた窓から吹き込む風にシアンの青い髪がなびいた。

第三十二話 舞い降りる（後書き）

今回は中途半端なところで切ってしまいました。

まだ話が続いてしまっって長くなり更新するのも遅くなっってしまったのでこうなっってしまいました。

すいません

第三十三話 メイド乱入

先に動いたのは直だった。

右手に持った剣をシアンに向けて振るう。

シアンはそれを後退して避けた。

そこに直がすかさず追いかけてもう一度剣を振るった。

しかしそれもシアンは軽々と避けた。

まるでダンスでも踊るかのような軽やかな動きに直は翻弄されているようだった。

直も戦闘初心者のように剣を振るったあとは隙が出来るがシアンはそれを見ても攻撃をしない。

様子見、といったところだろう。

シアンの視線は直の動き、そして直の振るう剣の軌道をしつかり見据えていた。

「つくそ!!」

直は無茶苦茶に剣を振るいながらシアンに詰め寄る。

狭い部屋の中でもシアンは直の攻撃をうまく避け、壁に追い込まれないようにしている。

その圧倒的な実力の差に直は気づかない。

「な…んであたんないの!？」

「じゃあ今度はこちらから行きますね。」

攻撃を止めた直は肩で息をしながらシアンを睨む。

服の袖で額の汗を拭い、それでも視線はシアンから逸らさず、シア

んの動きに全神経を集中させているようだ。
一方シアンの方は汗一つかかず、涼しい顔をしていた。

シアンは近くにあったヤカンに手を伸ばす。
直はそれを注意しながら剣を構えなおした。

「古より世界の要と在りし水神よ、我は汝の力を受け継ぐ者なり……」

どうやらシアンは魔法を使うつもりのようなのだ。

桜魔にとってシアンが魔法を使うところは初めて見る。

最初の言葉は理解できたがその後は何語なのかよく解らなかった。
しかしシアンが使っているのがあまり強い魔法でないのは魔力の量から推測はできた。

シアンが詠唱を始めるとヤカンがガタガタと震えだした。
まるでその中に生き物が閉じ込められているかのようにヤカンが暴れ出す。

そのヤカンを持つシアンの周りに柔らかい風が吹く。
シアンの周りだけが淡い光を放ちはじめた。

「魔法とか最悪……」

直はそう呟くとシアンに斬りかかった。

シアンはそれに気付いていないのかまだ詠唱をやめない。

ヤカンは先ほどよりも激しく、シアンの手の中で暴れている。
それ目がけて直は剣を振り下ろした。

ヤカンが大きな音をたてて床に叩き落とされる。

切れた隙間から床の絨毯にヤカンの中の水が滲み入っていく。
それを見て直は笑った。

どうやらシアンの魔法を阻止できたらしい。

しかし、シアンも顔に不敵な笑みを浮かべている。

「再生」

シアンが何かに語りかけるように呟く。

そうすると絨毯の中から先ほどヤカンから絨毯に滲み入った水が重力を無視して宙へ浮かんだ。

細かい水滴が地面から数十メートル上の宙に浮かぶ。

これはこの宿のメイドが部屋を掃除する時に使った魔法と同じだろう。

直は少し眉間にシワを寄せた。

「集結」

シアンが歌うように呟く。

すると今度は宙に浮いていた水滴がシアンの目の前に集まり、1つになった。

それは空気を取り込み、もはやヤカンに収まる大きさの水の塊ではなくなっていた。

「破裂」

シアンが命令するように、囁く。

水はシアンの命令に忠実に従い、破裂した。

それは無数の透き通る針になり飛び散った。

しかしその針はシアンには向かず、直に一直線に飛ぶ。

シアンは価値を確信したように、何とも言えない恍惚とした表情をしていた。

その表情は年に合わず、大人の女のようにだ。

これはまるで、薔薇だと思った。
美しい薔薇が棘で自分を汚す害虫を刺すのだ。
その棘で、人を殺すのだ。
恐ろしい…

直が何も出来ずに迫る針に身体を強張らせている。
その場にいる全員が息を飲んだ。
シアンは本当に直を排除しに来ている。

「…っ！！」

「やめなさい。」

針が直に到達しようとした時、部屋に凜とした声が響いた。
そして鮮やかな赤が宙を舞う。

それは血であって、けれど液体ではない。

先が尖り、水の針と同じ速さで針にぶつかり、互いの力を相殺しあ
って床に飛び散った。

結果、直は無傷、床は血まみれということになった。

「…誰ですか」

シアンは不機嫌そうにそう言ってやじ馬を睨みつけた。
睨みつけられた人間が何人か短い悲鳴をあげた。
それほどシアンは恐ろしい顔をしていたのだ。

「悪いけど、宿屋での揉め事はご遠慮いただけます？他のお客様に
迷惑ですから。」

「それはすいませんでした。でも、先に仕掛けてきたのはあちらで
す」

見えない敵に殺気を向けながらシアンはいつもより低い声で応答する。

扉で見ていたやじ馬がその人間に道を開けていく。

いつの間にかメイドと一緒にになって腰を抜かして座り込んでいた。

そこに見えたのは見覚えのある焦げ茶色のブーツ。

足元から徐々に顔を上げると、そこにはあのメイドがいた。

真っ赤な髪を風になびかせながら、凄い存在感を放って立っていた。風でなびく髪の間から見えた金色のピアスが明りに照らされ、綺麗に輝いた。

「まあ、それが好きな男の取り合いなら仕方ないかもね。」

「ならそこで見ててください」

「…無理。だって私もその争奪戦に交わろうと思って！」

「は？」

「…え？」

「何言ってるの？」

シアン、桜魔、直が怪訝な表情をすると赤いメイドは嬉しそうに笑った。

その反応を楽しんでいるようだ。

「私も、彼に興味があるの。だから、ね？…でもここじゃ暴れられないし、外に出ましょ。」

マイペースに桜魔争奪戦に参加を決めた赤いメイドは不敵な笑みを浮かべると桜魔の手を引つ掴んでそのままの勢いで割れた窓に乗った。

引つ張られて無理矢理走らされた桜魔の腕を掴もうとシアンが手を

伸ばすがその手はカラぶつた。

「桜魔!!」

「ちよっ…!!!?」

「この宿の近くに大きな広場があるのよ。そこで決闘しましょうか。とりゃっ」

「うわっ!!!?」

赤いメイドはその開いた窓から桜魔を抱えて飛び降りた。

「っ待て!!」

その後をすかさず直が追いかける。

「ちよっ…もう!!さいっあくです!!何でこんなことに!!」

シアンもそう嘆くと窓から飛び降り、夜の闇の中を赤いメイドを追いかけて走った。

少し雲のかかった三日月が彼らの鬼ごっここの行方を見届けよう夜空の頂点に輝いた。

第三十三話　メイド乱入（後書き）

魔法の呪文とかよく分からなかったのであんまり出しませんでした。
へたに英語に置き換えただけとかだと駄目かなと思ったので…

第三十四話 反撃

桜魔は混乱する頭で今の状況を整理する。

まず、今自分の手を引いて走っているのは午前中に出会い襲われそうになったメイドであり吸血鬼だ。

普通ならそんな危ないやつと一緒にいることはやめた方がいいだろう。

しかも彼女は自分に興味があると言ったのだ。

なおさら危険だろう。

しかし、自分の手を引いて走っているメイドは楽しそうに笑っていた。

それは無邪気な笑顔で、午前中のつまらなさそうな顔ではなかった。だからだろうか、何だか自分まで楽しくなってきた。

気付けば桜魔は手を引かれて走っているのではなく、自らの意思で走っていた。

「あら、彼女を置いて行って平気なの？」

「別に彼女とかではない。∴それにこの方が何だか楽しそうだからな」

「同感！」

メイドが嬉しそうに笑った。

自分よりも幾分年上の彼女が今は幼い子供のように無邪気に笑っている。

それを見ると自分まで楽しくなってきた。

暫く道を走ると急に開けた場所に出た。

月明かりだけなので広さはよく分らないが終わりが見えないほどなのでかなり広いと推測される。

中央に水が溢れる噴水があり、地面にはレンガが敷き詰められている。

その他には少し大きめなレンガ造りの花壇が5、6ほど均等な距離で噴水を囲むように円形に置かれている。

見える範囲ではそれ以外は何もない。

辺りはやけに静かで隣にいるメイドの息づかいが鮮明に耳に届く。

「静かね…」

「そうだな…」

少し冷たい夜風にメイドの赤い髪がなびく。

走り続けて火照った身体を冷やすように風が吹き抜ける。

「あ、そっぴやシアンたちはどうし」

ふと背後の2人の存在を思い出して踵を返すとメイドと自分の間、顔のすぐ横を何かが掠めた。

「うおっ…!?!?」

慌てその物体を目で追うがそこには何もなく、ただ暗闇だけが広がっていた。

それを見てメイドが口の端を吊り上げた。

「随分と野蛮なことをするのねー」
「貴女には話をして通じないと思ったので…」
「そうしたら実力行使しかないよね。」

暗闇の中から確かな殺気共にシアンと直が現れた。
少し距離を開けて立っているが標的は同じメイド。

「2人とも私を狙ってるの？さっきまで仲悪かったのにいきなり浮気でもしたのかしら？」

「どちらかというと言女の方が厄介だと思ったので貴女を潰してからじっくりと話をつけることにしました。」

「敵の敵は味方って言うしね」

「弱いヒトは大変ねー。そんなことしんくちやいけないなんて」

「勝手に言つてなよ」

「ま、さっさと終わらせましょうか。明日も早いですし…30分以内には終わらせます」

直が剣を構え、睨むようにメイドを見る。

シアンがぱつと袖を振るとそこから細長い短刀が出てきた。

どういいう仕掛けになっているのだろうと少し驚くがこれも魔法の類いだろうと無理に納得した。

「なんかバカなこと考えてるみたいだけど、来るから下がってなさい。」

メイドは桜魔を隠すように桜魔の前へ一歩出た。
武器は何も手にしていない。

「お前：何も使わないのか？」
「使うわよー。ホウキを、ね」

桜魔に笑いかけ、メイドは手を上に上げた。
その手にホウキが落ちてきた。

見たところ何の変哲もない、そこらへんに売っているようなホウキだ。

ただ少し木がしっかりとしていて持ち手に文字が刻み込まれている。
綺麗で高級そうなホウキだ。

「そんなんで戦えるのか？ただのホウキじゃないか…」

「バカねーたかがホウキ、されどホウキよ！物は使いよう！使い手が良ければ何でも武器にはなるのよ？」

メイドはもう一度バカね、と桜魔を鼻で笑ってホウキを構えた。

さっきからバカにされすぎだろ…

心の中でツツコミを入れながら少しの期待をこめてメイドの動きを見守る。

メイドがホウキを構えるのを見て直が一気に駆け出す。

メイドもそれに応えるようにその場から飛ぶように直に詰め寄った。

「うあああああつ！…！」

「おっそいわねえ」

直が剣を振りかざす。

それを紙一重でかわし、ホウキの柄を槍のように使い、直の腹を突いた。

無駄のない動きで相手の弱いところを攻撃し、確実に倒そうとしている。

「うつ…ぐうつ…」

息が上手く吸えないのか苦しそうに腹を押さえ膝を着く直。
あの様子では暫くは立てないであろう。

「弱いわねー。はいはい次々！さっさとしなさいよ！私も暇じゃないのよ。」

あんたみたいなのにかまってらんないの」

ホウキを一回転させ肩に担ぐと余裕の表情でシアンを挑発した。
しかしその挑発にも乗らず、シアンは冷静にメイドを見つめる。
少しの間、その場に冷たい空気が流れた。

何もしてこないシアンにしばれをきらしたのかメイドは呆れたように大きなため息を吐いた。

「何よつまんないわねー。怖気づいちゃったかしら？最初にあんな余裕見せといて全然ダメじゃない。ならもう彼を連れてつてもいいわよね？」

返答もせず、堅い表情をしているシアンを見てもう1度大きなため息を吐くとメイドは桜魔の方を振り返った。

「行きましょ。あの子は戦う気もないようだし…あんたは私が連れて帰るから」

「いや、でも…勝手に景品にされても困る。それに俺はお前とは行けない…」

「大丈夫よ安心しなさい。ちゃんとか愛がってあげるから…」

ホウキを消し、両手で優しく桜魔の頬を挟み込み、自分の金色の瞳

を桜魔の黒の瞳に映しこませる。
目を逸らそうとしたがそれも出来ず、薄らと霧がかかる思考で桜魔は抵抗をしようとした。
頬に触れている手をどかさうと思ったが手に力が入らず、ただ掴むだけとなってしまうた。

「待て…死ぬのは、いやだ…」

「殺さないわよ。ただ…少し、ね？」

妖艶に微笑むメイドの腕が桜魔の首に巻きつく。

耳元に息がかかるくらいに近い彼女の唇が近づくと、耳に軽いキスをされるとそこから全身に熱が広がる。

「文句、ないわよね？」

その問いかけに無意識のうちに頷くと首に巻きついていた腕がスルリと外れた。

下ろした手を桜魔の指に絡めるとそのままきゅっと握り締めた。

「じゃあ皆さんさよーならあ」

勝ち誇った笑みを2人に向け、ひらひらと手を振ってメイドが桜魔の手を引いて歩き出そうとした。

しかし、周りの空気の異常さに足を止める。

夜とはいえ少し寒すぎる。

思い当たる点といえばと視線をシアンに向ける。

そこには笑顔で何かを口ずさむシアンがいた。

「っ…しまった!」

魔法かと気付いた時にはもう遅かった。背後で何か巨大なモノが動く気配がした。慌てて振り返るが丁度よく月が熱い雲に隠され、闇がその場を支配した。

桜魔をその場に残し、気配だけを感じ取りそのモノから距離を取る。

「貴女は随分とお強いみたいですけど、油断しましたね」

暗闇の中からシアンの笑い声が聞こえる。

それは反響するように四方八方から聴こえてきた。

闇に目が慣れていないせいと、目の前のモノの存在の気配が強すぎてちゃんとした姿が確認できない。

「桜魔に何色目使ってるんですか？ふざけないで下さい」

ひゅっという風を切る音に反射的に身体を逸らすとすぐ横をナイフが横切った。

飛んできた方向を見るがあるのは静かな黒だけだ。

しかし押さえきれっていない殺気からだんだんと居場所が特定できてきた。

それでもこの暗闇の中では不安は拭えない。

一応ホウキを出しておくことにした。

「よくも皆さん馬鹿にしてくれましたね」

今度はナイフが四方向から飛んできた。

それをホウキで落としたりかわして避ける。

これでは埒が明かないとため息を吐いた。

あちらが魔法を使うのならこちらと同じでいいだろうと力を使おうとした時だ…

わずかなくもの切れ間から月明かりが微かに辺りを照らした。

そこで目の前にいるモノの正体が分かった。

それはまるで息をしているかのように宙を蠢き、こちらを睨みつけている。

巨大な身体と瞳は今にもこちらに攻撃をしかけてきそうなのだ。

それはこの世界には存在しないとされてる生き物。

しかし水でかたどられているため、ここに存在しているのだ。

目の前に居たのは透き通る透明で美しい、水龍だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3353p/>

リベラル！

2011年10月21日21時15分発行